山嶽寮

甲南山岳会通信第５９号　　２００４年１０月

甲南山岳部・甲南山岳会

山　嶽　寮　　甲南山岳会通信５９号　　２００４年１０月

六甲山麓からの便り　鷲尾　顕　……　1
故福田泰次氏のヒマラヤ研究　越田和男　……　3
先輩、伊藤愿氏を偲ぶ　山岡静三郎　……　4
伊藤愿氏山の履歴書　越田和男　……　9

紀　行

ワハーン回廊　2004　米山悦朗　……　12
ブータン紀行　2003年10月　越田和男　……　28
“ノアの箱舟”伝説の山、アララットへ　南里章二　……　34

随　想

驢　馬　飯田　進　……　41

会員短信

総会・慰霊祭への出欠はがきから　……　44
物故会員　ご遺族からのお便り　……　54

報　告

定　時　総　会　……　56
会　計　報　告　……　56
故福田泰次氏ご遺族からの寄贈図書目録　越田和男　……　57
行事報告　秋の集会　木曽福島　……　58
〃　慰霊祭　……　59

ホームページから

黒部五郎スキーツアー　山本恵昭　……　60
掲示板書き込みダイジェスト　山行とつどい　……　62
〃　フクデンさんの訃報に寄せて　……　79
〃　残しておきたい書き込みあれこれ　……　80

現役だより

大学山岳部部員紹介　……　82
2003年度　高校山岳部　活動報告　……　82

六甲山麓からの便り

鷲尾　顕　（旧 15 文）

去る１月２６日、伊藤文三君より電話あり、福田泰次君の訃報を知る。昨年秋のＫＡＣの東京の会合には夫人と共に元気で出席したと聞いていたので、愕然として吾が耳を疑う。密葬には、夫人よりのお申出あり、伊藤文三君が参列した。お別れの「送る会」は３月２６日、高輪プリンスホテルで行われ、親族の方々を始め、甲南、三菱、東北大、地域関係者が集い、温顔の遺影の前で、在りし日を偲び、最後の別れを惜しんだ。しめやかな中にも、夫人、福田仲子様からの案内状に述べられたように「同窓会のような」雰囲気は福田君の人柄に相応しい「送る会」であった。(註 1)

甲南の少年時代から、７０年を越す友誼に思いを馳せ、追憶の念一入。夏山、冬山、春山、休日毎のロックガーデン、道場の百丈岩、六甲の保壘岩、小豆島の拇指岩の岩登り、北千島遠征等、回想は走馬燈のように尽きない。

甲南時代、当時未踏の前穂東壁ＡＢＣフエイス、劔尾根ドーム、杓子岳東壁Ｄ尾根等登頂に輝しい業績を印し、「世界山岳百科事典」にも掲載されている。

福田君は「道を歩いていて別れ道であると、その先はどうなつているかということが妙に気になつてどうしても確めたくなる。」（旧制１５回卒の会誌「いちご」２５号福田君寄稿「未知を求めての我が人生」よりの抜萃）という未知への旺盛な探究が生涯を通じての信條であつた。また、他者に対し、機微に触れる思いやりの持主でもあつた。

昭和 12 年 3 月　小日向山双子岩にて

杓子東壁・鑓北稜アタックの前日

左より福田・山口雅・武田の各氏

輝かしい登山歴もさることながら、福田君がＫＡＣに遺してくれた次のことを銘記したい。

その一つは、福田君の提案による山岳部創立以来の会誌（註 2）の散逸を防ぎ、永久保存するため合冊本の作製である。１９３２年以前の資料は田口二郎さんが提供され、福田君が厖大な資料を入念に調べ、遺漏なくまとめ欠番なく、全巻が揃い１９８９年

完刊した。旧制版１９２７－１９４１の６冊、戦後版、１９５２－１９７８の６冊、合計五千頁を越し、貴重な資料として、村上與利一君の許に保管されている。(註 3)

次に物故者追悼銘板作製について述べたい。甲南時代、岩登りに熱中した芦屋ロックガーデン、ブラック岩に、山の仲間の魂の據り処として追憶レリーフが１９５１年に据付けられていたが、１９９１年創立６０周年記念事業として個人銘板設置計画が提案され、その際、福田君が企画立案から具体化に至る迄、献身的に尽力、打合せのため葉山からの日帰り関西出張は数回に亘り、会員各位の浄財と共に、福田君との信頼関係の深い三菱の協力工場、中島金属(現ナカキン）の中島満男社長の採算を度外視した積極的な協力に支えられ、１９９２年完工。以来、年中行事として４月下旬に、遺族も参加し、慰霊祭が行はれていることは周知の通りである。

最後に、１９９７年１０月、旧制高校記念館（松本市あがたの森）に於いて七年制高校特別展示会の催しがあり、福田君が精緻な調査に基いた資料により、創立以来の主要な業績の年表を図入りで作製したことである。この年表は会場に展示され、関係者の注目を集めた。当時、鈴蘭集会の帰途、香月さんを始めとする有志が会場を訪れ、図表に魅入った記憶が蘇る。(註 4)

福田君が未知への探求を求める情熱と共にＫＡＣに寄せる愛着の表れであらう。その貢献に深く謝意を捧げ、永く記憶に留めたい。

君は恐らく 6 年前に昇天した田口二郎さんと酒を酌み交し、幽玄の中に遊んでいるだらう。此処にいる吾々も忘れずに、君の傍に行く迄は幻の中でもよいから現れ出て、差し出す盃を受けてほしい。

（註 1）福田君の甲南小学校同期のＡさんとは約 50 年振り、ニューヨーク以来の再会だつた。

（註 2）名稱は報告、部内雑誌、会報、時報と変遷、1952 年からＯＢ主体の山岳会通信、山嶽寮となり現在に至る。

（註 3）故喜多豊治さん（旧制 12 回卒）所蔵の旧制合冊版は1997年日本山岳会に寄贈された。

今年 10 月 9 日より 12 月 1 日に開催される旧制高校記念館の甲南展示会には越田君の計いにより、全誌合冊旧制版 6 冊が展示の予定。

（註 4）山嶽寮 75 周年記念号掲載、平成 9 年旧制高校記念館特別展「展示パネルから」43 頁～52 頁参照。

２００４．７．２　記

故福田泰次氏のヒマラヤ研究

「ヒマラヤに就いて」甲南高校山岳部　部内雑誌　VOL IX-1（1938 年）

越 田 和 男　（昭 36 理）

フクデンさんが亡くなられた後、奥様から甲南山岳部関係の蔵書一式を甲南山岳会にご寄贈いただいた。その機会に旧制高校時代の部報・部内雑誌などに眼を通してみて、改めて当時の高校山岳部員の質の高さと、よく読み、よく書き、よく登るという甲南山岳部の伝統を認識した次第です。

フクデンさんが高校２年の時に部内雑誌に書かれた１２０頁にも及ぶ「ヒマラヤに就いて」と題するヒマラヤ紹介記事は、概説に始まり、各山脈、氷河、高峰、地図、山群毎の遠征記録を下級生向けに纏められたもので、高校山岳部としてはヒマラヤ遠征を目標とせず、とした当時の部の方針には承服しかねたフクデンさんの心意気のにじみ出る労作です。謄写印刷ながら各山群の概念図も多数あり、いま読んでもなかなかのものです。

驚いたことにはネパール・ヒマラヤの項には「マナスル」がちゃんと記載されています。マナスルが日本人の最初の 8000m峰としての目標になる 10 数年も前のことで、まったく驚くべき高校生です。後書きには、「他日我が日本がヒマラヤの桧舞台に進出する時に当たり我が甲南山岳部からもそれに馳せ参じ得る戦士を輩出し得んことを希望して止まない次第です」とあり、具体的な目標としても雲南、四川の奥地探検をあげています。太平洋戦争がなかったらフクデンさんは絶対にヒマラヤ遠征を企画実行されたに違いありません。

先輩、伊藤愿氏を偲ぶ

山 岡 静 三 郎　（旧 11 理）

伊藤愿先輩は昭和４年３月旧制甲南高校高等科を卒業し、京都大学法学部に進まれました。現時点で山岳部の関係で知っているのは、昭和１０年甲南卒業の関集三氏、同１１年卒業の田口三郎氏、同期の私、山岡静三郎の３名と、先輩で中途転校された井上正憲氏、佐野源一氏くらいかと思います。

伊藤氏は戦前、アルピニストとして、それも主として単独登攀者としての一面と、高文（高等試験行政科）合格者として、戦時中は広い中国を舞台に、戦後は中央官庁の要職を歴任された類い稀な人材でした。しかし、昭和３１年、４８歳のお若い最盛期に病で他界されました。私は最近、非常に偶然の機会に、未亡人、房子様にお会いして貴重な資料を戴きましたので、ここに簡単に取り纏めて報告いたします。

輝かしい登攀記録（アルピニストとして）

日本アルプスでは、甲南時代に滝谷単独遡行、小槍の単独登攀、ジャンダルム飛騨尾根初登攀など、京大に進まれてからも残雪期の剣の早月尾根や八つ峰、鹿島槍の北壁初登攀などの記録を立てられました。

甲南ご卒業後も、甲南山岳部の合宿にはよく参加され、春の白馬山麓のスキー合宿では親切丁寧に初心者の私達を指導されました(昭和５年３月)。

昭和１１年には、京大のヒマラヤ登山計画の予備調査のため単身渡印、ダージリンのヒマラヤ倶楽部などを訪問され、Ｋ２登山の為のカラコルム入りの内諾を取り付けるなど活躍されました。

また戦後の早い時期に、訪欧の機会を生かされてスイス・アルプスのマッターホルンを日本人として初めて単独で登られました（昭和２６年８月)。

中国・東京の中央官庁で要職を歴任

（官吏として）

戦時中、昭和１０年から１４年にかけて、北京と天津に赴任、その間、平生釟三郎先生(日本製鉄会長)が北京司政長官在任中、秘書官を務められ、終戦時は青島で領事と

して困窮を極めた在留邦人の保護に尽力され、昭和２１年春に帰国されました。

戦後は、外務省から建設省、さらに大蔵省に転じ、事務官、大臣官房税務官を務められました。在勤中に健康を害され、昭和３１年１１月２７日、４８歳でご永眠されました。

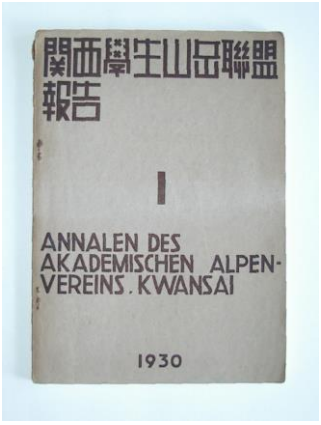
ここに偉大なる先輩の偉業を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

２００４年2月

参考資料：

伊藤愿氏履歴書　（未亡人房子様より）
“伊藤愿さんの思い出”　田 口 二 郎　日本山岳会「山岳」51（1957）
“山と人と本”　織 内 信 彦　日本山岳会会報「山」 2002 年 2 月号

—上記のうち 伊藤愿氏履歴書 と “山と人と本” 織内信彦（部分） は次ページ以下に掲載—



京都大学在学中に編集された
「関西学生山岳連盟報告Ⅰ」

加盟校は八高・三高・同志社・岐阜高等農林・関大・関学高等部・神戸商大・甲南高・京都府立医大・京都帝大・浪速高・大阪医大・大阪商大・富山高・大阪工大・大阪高・大阪薬専・富山薬専・名古屋高商・京都薬専・県立神戸高商・姫高。

「昭和 5 年 11 月 9 日発行 編集兼発行者 伊藤 愿
京都市左京区吉田 京都帝国大学旅行部内」
と奥付にあります。

編　集

履　歴　書

伊藤　憲

生年月日　明治41年4月25日

本籍地　兵庫県城崎郡香住町

現住所　東京都新宿区

学　歴	昭和　4年　3月	甲南高等学校　文科　卒業
	昭和　7年　3月	京都帝国大学　法学部　卒業
資　格	昭和　8年10月	高等試験行政科試験合格
職　歴	昭和　9年　5月	太平洋問題調査会研究員トナル
	昭和10年　1月	同会研究員トシテ渡支
		北京駐在員トシテ支那経済研究ニ従事ス
	昭和11年　6月	帰国
	7月	京都帝国大学山岳部ノ計画セル「ヒマラヤ」
		登山遠征隊ノ先発隊トシテ渡印
	昭和12年　4月	帰国
	11月	天津商工会議所及朝鮮銀行ノ委嘱ニ依リ
		天津経済事情調査ノ指導ニ従事
	昭和13年　2月	上職辞職
		平生釟三郎ノ秘書ニ就任ス
	7月14日	陸軍省事務ヲ嘱託ス
		北支那方面軍特務部附ヲ命ス《陸軍省》
	昭和14年　7月15日	平生釟三郎ノ秘書ヲ辞ス
	7月16日	任興亜院事務官
		興亜院華北連絡部在勤ヲ命ス《宮内省》
	8月15日	叙正七位
	昭和15年　4月29日	叙勲六等授単光旭日章
	昭和17年11月　1日	任大使館三等書記官
		中華民国在勤ヲ命ス
	昭和18年　6月	任領事　《大東亜省》
		青島在勤ヲ命ス
	昭和20年　5月17日	叙勲五等瑞宝章
	8月26日	勅令第491号ニ依リ外務省所管トナル
	12月　4日	叙高等官三等

昭和21年 4月 1日	官制改正 叙奏任	
12月10日	任内閣事務官	
	叙二級	《 内 閣 》
	内閣官房内閣審議室勤務ヲ命ス	
	経済安定本部第四部勤務ヲ命ス	《経済安定部》
昭和23年 9月24日	建設事務官に任命する	
	二級に叙する	
	大臣官房渉外課長を命ずる	
12月 1日	法令審査委員を命ずる	
昭和24年 6月 1日	中央連絡協議会委員に任命する	《 外 務 省 》
昭和25年 4月 1日	中央連絡協議会委員を免ずる	《 外 務 省 》
昭和26年 3月31日	米国に於ける土木事業の行政制度及法規等の調査研究のためアメリカ合衆国欧州に三ヶ月間の予定を以って出張を命ず	
昭和27年 8月 1日	建設大臣官房審議室に配置換する	《 建 設 省 》
10月 1日	主査を命ずる	
昭和28年 2月 1日	大蔵省事務官に任命する	《 大 蔵 省 》
	大臣官房財務参事官室勤務を命ずる	
4月 1日	12級6号俸を給する	
昭和29年 2月16日	大臣官房税務官に昇任させる	

原文は大蔵省の履歴用紙にタイプ

作成年月日は不明

昭和31年	従四位勲四等瑞宝章
昭和31年11月27日	死去

伊藤 愿 いとうすなお （人名）

〔一九〇八～一九五六〕

兵庫県出身。昭和初期、旧制甲南高校、京都大学時代を通じ、登山界の第一線で活躍。新生面を開拓した。昭和二年七月、北穂高滝谷、小槍単独登攀。昭和三年五月、ツェルトザックにより、当時では画期的な、槍、薬師、立山縦走。昭和五年七月、ジャンダルム飛騨尾根初登。昭和六年三月八方尾根、五竜、鹿島槍初縦走。同年十月鹿島槍北壁初登。同年十二月、富士山でわが国初の極地法登山を試みた。一九三六年(昭和十一)京大ヒマラヤ登山計画の下準備のため単身インドに渡った。一九五一年(昭和二十六)ヨーロッパに遊びマッターホルンとウェッターホルンに登ったが、マッターホルンはスイス山稜からの単独登攀であった。訳書「ヒマラヤに挑戦して」がある。大蔵省財務調査官

〈山崎安治〉

出典「世界山岳百科事典」山と渓谷社 一九七一年

“山と人と本”　織内信彦

日本山岳会会報「山」 2002年2月号（部分）

山　681－2002・2・20（第三種郵便物認可）

■忘れられない人と本

もう一人忘れられないのは、伊藤愿さんと、彼の書いた本のことです。

伊藤愿さんは田口二郎さんの出た甲南高校の先輩に当たります。たまたま学生のころに甲南の山岳部報告を見ていますと、伊藤愿さんが、小槍をたった一人で登攀している。その二、三年後に私も仲間と二人でアンザイレンをして登りましたが、ザイルで結んでいると気持ちの上では安心感があります。

伊藤愿さんが一人で小槍を登った記録と、穂高の滝谷を単独で登り、北穂高へ出て南沢を飛騨側へ下りた。そしてまた白出谷を登って穂高を縦走したという紀行文を読んで、非常に感銘を受けました。「こういう山登りをしてみたい」と思っていたら、一、二年後、涸沢の岩小屋――今はありませんが――に私が滞在していたときに、後から四人ばかりやってきて「まだ、入れますか」と言う。「入れますよ」「じゃ、お邪魔します」と言って入ってきた。

岩小屋といっても小さいんです。中では立って歩けない。座って頭がつかえるくらいです。話しているうちに、その一人が伊藤愿さんだとわかった。

「私も小槍を登ってきました。伊藤さんが打たれた正面のチムニーに入る手前のハーケンを利用して登ってきました。あれがあったのでとても助かりました」と言うと、「あれはもう抜いてきてもらったほうがよかったかも知れない」と言われたことを覚えています。

それから天気が悪くなって、穂高小屋へエスケープしたのですが、私は二日ほどいてあきらめて下山しました。伊藤さんはそのまま残って、結局、田口一郎さんと二人でジャンダルムの飛騨尾根の初登攀をやっています。

伊藤さんはそういう記録を残した人ですが、京大を出たときに今西錦司さんらのAACKがヒマラヤへ行く計画を持ち、伊藤愿さんをダージリンのヒマラヤン・クラブに派遣した。伊藤さんがクラブのセクレタリーに会うとき、入室のサイン帳にGEN・ITOと書いたものだから「ゼネラル伊藤」か」と言ってすっかりゼネラルにされてしまったという、そんな話を私は今西錦司さんから聞いたことがあります。ヒマラヤまで行って調査をしたり、交渉したりするのですが、時節柄、ヒマラヤ登山は実現しなかった。

やがて戦争が終わって、お茶の水のクラブルームの屋根裏部屋で「土曜会」があったとき、伊藤さんがひょっこり現れたことがあった。その前にヨーロッパへ行ってマッターホルンを一人で登ってきた。これが戦後、マッターホルンへ登った最初の日本人です。私はそのことを、島田巽会員（朝日新聞）からの通信で知っていたので、すかさず「マッターホルンのことを会報に書いてください」とお願いしたら、すぐ引き受けてくれて、とてもいい原稿をもらいました。

そのとき「伊藤さんとは、昭和五年に涸沢の岩小屋で、しばらく一緒になりました」と言うと「覚えていますよ」と言われて嬉しかった。伊藤さんはドイツのパウル・パウアーがカンチェンジュンガに挑戦したときの報告書を翻訳しています。昭和六年です。

その報告書の中にこんな一節がありました。パウアーがシッキム側からカンチェンジュンガの東北稜を登って行く。第七キャンプまで行くが、あとはテントが足りなくなってしまう。それから先はテントでなしにスノーホールを掘る。

その雪洞から頂上を狙うんですが、遂にチャンスがなくて、あきらめて総退却することになる。そのとき、隊長のパウアーは雪洞の中に持って行ったドイツの国旗を広げて、しわを伸ばしながら退却の決断を迫られる。その場面が臨場感があって、すばらしい名訳なんです。

ちょうど一時間経ちましたね。今日はこの辺で終わりたいと思います。（談）

伊藤愿氏山の履歴書

越 田 和 男　(昭36 理)

このたび、山岡静三郎先輩が偶然の機会に故伊藤愿先輩の奥様房子さんにお会いになられ、前掲の履歴書を入手されました。これを機会に愿氏の山の履歴書を作ってみようと思い立ったのですが、愿氏の山歴や遺稿を収集し纏めておくべきだとのご意見は、以前、登山史研究家の故山崎安治氏から幾度も戴いていたことでした。興味ある作業だとは思いながらも、山崎氏ご生前中には果たせず、今回やっと時間の余裕を得て、取り敢えず、甲南の部報類、関西学生山岳連盟（ＡＡＶＫ）報告などから拾い集めたのが下表です。いづれ、例えば伊藤愿氏没後５０周年に当たる再来年あたりに、愿氏のことを纏めて特集するようなことが出来れば、その資料編として活用してください。京大時代と長かった中国駐在期間中の活動については追加調査が必要です。

伊藤愿氏山の履歴書

年	月	山関連の記録 ： 同行者名など	掲 載 誌
1926 大正15	4月	甲南高等学校入学と同時に山岳部入部	
	8月	燕～槍ヶ岳縦走 ：磯田辰男 西村格也 香月慶太 前田敏文 檀淳 小林 島 山口 中尾 中房～燕～大天井～槍～上高地～徳本峠～島々	磯田辰男 「日本北アルプス踏破記」 甲南高校学友会誌「甲南」3 号(1926)
1927 昭和2	1月	鉢伏山 ：西村格也 檀淳	
		神鍋山 ：単独	
	2月	伊吹山 ：西村格也 檀淳 香月慶太	
		神鍋山 ：単独	
	4月	芦屋ロックガーデン ：安井博彬 香月慶太 水野健次郎 松本甫	
		芦屋ロックガーデン ：安井 香月 水野 松本 檀 今村 井上正憲 喜多又太郎 原 祇園清 近藤中佐	
	4～5	奥池キャンプ ：31名参加	
	5月	芦屋ロックガーデン ：安井 喜多 入江 シノキ山キャンプ・ロックガーデン ：23名参加	
	6月	芦屋ロックガーデン ：西村 香月 檀 山口 松本 野田真三郎	
		芦屋ロックガーデン ：香月 安井 水野 井上 今村 笹岡忠夫 置塩 浅野 足立正夫	
	7月	穂滝谷遡行・小槍登攀 ：単独 徳本峠～上高地～中尾峠～蒲田～錫杖～蒲田～槍平 ～槍～南沢下降～槍平～滝谷遡行～穂高小屋 ～白出沢～槍平～槍・肩ノ小屋～小槍登攀～ 涸沢岩小屋～穂高小屋～前穂～上高地	伊藤愿「蒲澤谷涸澤岳登攀 」部報・創刊号(1927) / 伊藤愿「山旅(単独行)」 部報・創刊号(1927) / 伊藤愿「荒村行ー上高地より蒲田温泉へ」 甲南4号(1927) / 檀淳 伊藤愿「小槍」 部報・創刊号
	7～8	燕～槍縦走: 平沢有一 横田	

1927 昭和2	8月	穂高にて遭難救援に参加: 水野祥太郎(RCC)	伊藤愿「穂高の遭難救援記」 部報・創刊号(1927)
	9月	芦屋ロックガーデン :18名参加	
		ラジオ放送「厳粛なる山の姿と犠牲者」	大阪放送局より放送(9/11)
		芦屋ロックガーデン :単独	
	10月	丹波・小金岳 :香月 檀 祇園 安井 井上 笹岡 今村 喜多	
	11月	芦屋ロックガーデン :RCC岩祭り 甲南より10名参加	
	12月	甲南高等学校山岳部報告・創刊号を編集	
1927 ～28	12～1	関温泉スキー合宿 :18名参加	
1928 昭和3	3月	槍ヶ岳と北穂高 :(人夫)今田重太郎 島々～徳本峠～上高地～一俣小屋～槍往復～ 横尾岩小屋～北穂途中まで～ 北穂下山中大島亮吉氏の前穂での遭難に遭遇遺体 捜索に参加～上高地	伊藤愿「三月の槍ヶ岳」 部報・第2号(1929)
	5月	常念～槍～槍平～三俣蓮華～薬師～立山 : 辻谷幾蔵(RCC) (人夫)中山彦一 近藤一雄 太田八郎 今田重太郎(槍平より)	伊藤愿 「5月の北アルプス縦走・常念～槍～薬師～立山」 部報・第2号
		六甲山縦走 :9名参加	
	7月	穂高～槍～大天井～燕 :安井 笹岡 豊科～大滝岩小屋～常念の鞍部～一俣小屋～涸澤 岩小屋～(雨中独りで穂高小屋往復)～横尾岩小屋～ 槍往復～大天井～燕小屋～中房～有明	安井博彬「北アルプス穂高行」 部報・ 第2号
	8月	六甲キャンプ :多数参加	
	9月	甲陽園キャンプ :18名参加	
		道場不動岩 :香月 井上 野田 笹岡	
		芦屋ロックガーデン: 13名参加	
	10月	仁川～奥池 :8名参加	
	11月	道場不動岩 :15名参加	
		芦屋ロックガーデン: 12名参加	
	12月	芦屋ロックガーデン: 15名参加	
1928 ～29	12～ 1月	関温泉スキー合宿 :7名参加	
1929 昭和4	2月	大江山スキー行 :18名参加	
		芦屋ロックガーデン: 西村 国府礼太郎 佐山好弘	
		芦屋ロックガーデン: 8名参加	
		芦屋ロックガーデン: 富士澤浩 秋馬晴雄 平沢	
	3月	上高地・善六澤より西穂 :単独 島々～沢渡～上高地～西穂～徳本峠～島々	伊藤愿「三月の上高地・善六澤より西穂高」 部報・第2号
		鹿沢スキー行 :大島寛一(神戸一中)	
		上高地生活: 槍ヶ岳: 西村 檀 香月 大島 (人夫)塚田 百瀬 前穂高: 香月 (人夫)塚田 西穂高: 西村 檀 湯川孝夫 (人夫)百瀬	香月慶太 「三月の上高地生活」 部報・ 第2号
		甲南高等学校卒業	
	4月	京都大学入学	
	5月	剣岳早月尾根と八ッ峰: 西村 高橋健治(京大) (人夫)佐伯由蔵	西村格也 「5月の剣生活ー早月尾根・八ッ峯」 部報・第2号 高橋健治 山岳第24年2号(1929)

1930 昭和5	7月	現役の涸沢合宿に参加: 16名 穂高ジャンダルム飛騨尾根(初登攀): 田口一郎 槍北鎌尾根: 喜多又太郎	伊藤愿「ジャンダルム飛騨尾根登攀」 部内雑誌2号(1930) / アルピニズム第4号 / 田口一郎「ジャンダルム飛騨尾根」 AAVK報告2号(1931) 部内雑誌2号
	11月	関西学生山岳連盟(AAVK)報告・創刊号を編集	
	12月	日本山岳会入会 会員番号1265	
1931 昭和6	1月	上高地生活: 独り天候観測のため滞在	笹岡忠夫 部報4号(1931)
	3～4月	八方尾根～五龍～鹿島槍(初縦走):工楽英司(京大) 長谷川清三郎(三高)	行楽英司「春の五龍鹿島縦走」 AAVK報告2号
	10月	鹿島槍北壁主稜(初登攀): 藤田喜衛 平井功(京大)	平井功「カクネ里より鹿島北槍登攀」AAVK報告3号(1932)
	12月	Paul Bauer の著書”Im Kampf um den Himalaja”を訳出出版	P. バウワー著 伊藤愿訳「ヒマラヤに挑戦して」黒百合社(1931) 中公文庫(1992)
1931 ～ 1932 昭和7	12～1月	日本初の極地法による富士山: 京大隊に参加 西堀栄三郎(L) 今西錦司 浅井東一 酒戸弥二郎 細野重雄 工楽英司 遠山富太郎 藤田喜衛 扇田彦一	伊藤愿「ポーラメソッドによる富士登山」 アサヒスポーツ昭和7年2月1日号+15日号 / 伊藤愿「冬の富士山」 部報 V-1(1932) / 遠山富太郎「富士大沢口冬季登山」 山岳 27－2(1932)
	3月	京都大学卒業	
1935 昭和10	10月	渡支・北京赴任	
1936 昭和11	8～11	単身渡印 京大ヒマラヤ登山計画の予備調査にあたり、K2 登山のためのカラコルム入りの内諾を取得	伊藤愿「渡印日記抄」 部内雑誌 VIII-1(1937) 伊藤愿 「印度から」 JAC会報60(1936)
1937 昭和12	11月	天津赴任	
1939 昭和14	7月	華北赴任	
1943 昭和18	6月	青島赴任	
1946 昭和21	3月	復員帰国	
1951 昭和26	7～8	スイス・アルプス:グリンデルワルルトの最初の一週間を松方三郎・島田巽と過ごす ウェッターホルン: ガイドと マッターホルン: スイス山稜から単独登攀	越田和男 「一枚の写真から・伊藤愿さんの アルプス行」 山嶽 48 (1993) 伊藤愿 「アルプス1951年」 岳人62(1953) 伊藤愿「マッターホーン単独行」 JAC会報161(1952)
1956 昭和31	1月	病没	

追悼文

日高信六郎 「伊藤愿君を悼む」
日本山岳会会報第190号(1957年1月)

田口二郎 「伊藤愿さんの思い出」
山岳 第51年 (1957)
時報・甲南山岳部創立 40 周年記念号(1964)、および田口二郎著「山の生涯－来し方行く末」下巻 茗渓堂(1999)にも収録あり

— 紀　行 —

ワハーン回廊　２００４

米 山 悦 朗　（新高Ｓ29）

始めに

今回、ワハーン回廊を探索してきたが、これは私が所属するＮＧＯ団体ＳＯＲＡの事業として行ったもので、本文は内部報告用に作成されたレポートです。将来公表の予定がありその転載・引用は事前に許可を求める必要がありますのでお含みおきください。

昨年の夏頃からバダクシャンのワハーン地区で環境調査をすることを密かに計画してきた。その他のアフガンの状況はおおよそ理解しているが、ワハーン回廊だけはさしたるＮＧＯも入っておらず資料も殆どない状態で、唯一最近で公表された調査資料は広島在住の医師平位剛氏の著書“禁断のアフガニスターン・パミール紀行”だけである。

ここは昔からシルクロードの要路として栄え隊商達が往来している。玄奘三蔵がインドから経文を携えて唐に帰る時に通過し、また東方見聞録によればマルコポーロも元の頃フビライハーンを訪ねてここを通りパミールに向かつている。

ワハーン回廊は、国王アブドゥルラフマーン時代、１８９６年に英露の間で確定された国境地帯であり、この回廊確定の際、ロシアもイギリスも入域しない、という条件が盛り込まれている。

上述のワハーンの権威である平位剛氏の調査では１９７０年前後にいくつかの登山隊が入域しているほか、２０００年にドイツ隊がタジクから大パミールを経由してイルシャッド峠に行ったとのこと、また日本の某民報テレビ局がイルシャッド峠からボロギール峠に抜けた事があるだけで、後は平位氏が１９９９－２００１の間イシュカシムからビクトリア湖を往復したり、何回かパキスタンから峠越えで部分的に入っている以外にこの地域を調査した記録はなく、今回我々のようにバダクシャンの首都ファイザバードからイルシャッド峠まで一気に抜けるのは二十世紀始め英国がアフガンから撤退して以降はじめてのケースではないかとのことである。

今回、我々の立てた計画はバダクシャン県の首都ファイザバードを起点にタジクとの国境沿いに自動車が入ることのできるサルハッドを経由し、その後は徒歩か馬でワハーン回廊の小パミールといわれる部分がタジクと中国方面への分岐点であるボダイグンバースまで行き、そこから方向を変え南のイルシャッド峠をこえてパキスタンに入る行程である

いざ実行段階が近づく頃、イラクでのテロ多発に加え、アフガンでも国連関係者、国境なき医師団、中国労働者などに対する殺害事件が多発し、加えて中央政府は存在するものの地方の軍閥による治外法権的な統治で治安維持の状況が全く不明である。更にはイルシャッド峠を越えてパキスタンに入る際、国境の両側には入国管理事務所が存在せず如何に合法的に入国するかが問題であった。

テロのリスクについては情報分析の結果、外国人にとってファイザバードまでの道路は多分に危険であるが、ワハーンに入れば殆ど安全であるとの結論に達した。

そこで先ずアフガン人スタッフを荷物と共に車で先行させ、外国人であるわれわれは空路でカブールからファイザバードへ向かい合流して行動開始することとした。

アフガン政府によるＮＧＯとしての活動許可証は先ず中央政府の警察庁から取得し、その後訪問する各地のコマンダーと個別の交渉する事とした。ちなみにこのコマンダーというのはいわばその地域の警察署の署長だが治外法権的に自分の言う事が法律であるといった態度で我々に接してくる。またパキスタン側の入国許可はサルハッドで合流するまでにパキスタン人のガイドが取得してくる事で解決を図った。

メンバーの構成は“ＪＲＵ・ＰＡＣ子供平和基金”の堀拓二、“アフガン難民を支える会”の督永忠子とカメラマンの米山悦朗の３名に加えて、上述ワハーン回廊の権威者である平位剛氏が途中まで参加することになった。

アフガン人スタッフはリスク管理に長けた年配のガイド、元ムジャヒディーンの戦士で用心棒と運転手二名を自動車道路の終点地サルハッドまで同行し、その後はこの地域の住民と同じワヒ族でこの辺に親戚も多く常時往来しているパキスタン人をガイドとして連れて行くこととした。

６月２６‐２７日

イスラマバードに全員集結し食料・テント等必要資材の調達･点検と情報収集を図る。コネを辿りアフガン政府要人からサルハッドまでの通行許可証取得とバダクシャン州都のファイザバードからは警官３人が同行する手配がついたことが確認できた。

しかし数日前カンダハールで日本人誘拐の警告があり、日本人全員に退去命令が出たとの情報で頭が痛い。

６月２８日

ＡＩＲ　ＳＥＲＶＥでイスラマバード１０:００発、１時間でカブールに到着。この飛行機はヨーロッパ系の非営利団体ＥＣＨＯが運営しＮＧＯと政府関係者のみを対象として運行している。飛行機は双発プロペラ９人乗りでイスラマバードーカブール間運賃が１００ドルである。

前夜のラジオ放送でファイザバードの国連関係者が一名撃たれた。またファイザバードの郊外ではアフガン人一名が殺されたとの情報有り今回同行予定の医師が動揺している。

テロ情報で頭が痛いがとにかくファイザバードまで行って情報収集に努め最終結論をだすこととした。

６月２９日

同行予定のアフガン人医師から家族がどうしても行くことを認めてくれないので参加中止すると言ってきた。一方ではリスクマネージメントの大家であるガイドは平然としている。

カブールにおける我々の自立支援活動はほぼ完了し手仕舞いの段階に入っている。デダナ地区に有った絨毯工場と識字教室は今年の５月を以って閉鎖した。

２００台有った絨毯の織機は希望者に貸与ないし市場より安く販売し製品の代金で支払うように手配して残っているのは３０台だけとなった。価格は４，５００ルピーだが市場もかなり安定して来ているので簡単に払い終わ

ることができるだろう。

識字教室も識字と言うよりは子供を対象とした国語と英語の学習塾の様相を呈して来ていたのでこれを閉鎖し、費用はこちらで持ち各教師の自宅で行う年長者対象の識字教室に切り変えた。主たる対象者はタリバーン時代に学校に通えなかった女性である。

また裁縫教室もこちらで費用負担のうえ各教師が自宅で行えるようにして１００台のミシンも希望者に貸与し、あと残っているのは４０台だけてある。

６月３０日

アフガン滞在ビザを数次に切り替える申請をするが、どこも同じで役人が出勤していないなど、時間的なロスがおおきい。

午後アメリカ軍による誤爆で夫と第１夫人をなくした未亡人宅を訪れる。彼女は第２夫人だが第１夫人の母親や子供まで面倒を見ている。我々の宿舎の洗濯掃除や自宅での裁縫仕事で暮らしている。ミシン５台を貸与し裁縫教室をひらくことになった。

ガイドが旅行許可を持ちかえってきたが高官への謝礼として１，０００アフガニーかかった。

３日ぶりにハンマームにいって身体をあらう。共同風呂もあるが個室に入りシャワーを浴びた。イスラマバード以来運動をしないで食べてばかりいるので腰の周りに脂がついて来ている。

街のなかを車で走るとかつての日本と同じく凄まじい車のラッシュと大気汚染で咳が止まらない。建設開発も盛んで街の中心部で高級住宅開発が進み１軒４，０００ドルの家が高級官僚用に即完売だそうだ。

我々がNGO活動を行っているヴァルダック県スルハバッド郡の住民が事務所を訪ねてきて、カブールの郊外に新しく開発された村に住宅用の土地を買ったが井戸が無いので掘ってもらえないだろうかと言って来た。時間もあったので念のためと現場に行ってみた。ここは我々の事務所から約１０キロくらいしか離れていないが道が混雑している事といたんでいる為車で片道一時間はかかり自転車の方が早い所であった。丘陵地帯の土漠に約２５０平米の敷地を１０３区画とその中心にモスクやバザールを作ろうというものである。１区画2・3回の分割払い１００，５００ルピーで、住宅はそれに加え１５０，０００ルピーはかかるが、既に２２ヶ所は売れているという。

開発はイランから帰って来たアフガン人がやっているがこの大規模開発にもかかわらず肝心の水がどこにもない。彼等の話では中心のモスクのあたりに直径２メートル、深さ８０メートル程度の井戸を掘って欲しいと言う事だ。話のつじつまが合わず、持って来た人間もかつてスルハバッドでカレーズを掘った時言を左右して道具を返さなかった連中であることが後で判明した為、この話は取り合わないこととした。

ここへの往復の際、町外れに大きなレンガを焼く窯が林立し黒煙を上げている場所に出会った。窯は一基約直径２０メートル高さも２０メートル深さ１０メートルはあろうかという大きな帽子状の塔で主として薪を燃料に一部石炭で焼いている。この窯が数えただけでも５０以上はあり盛大に薪を消費し煙を出して大気汚染の原因を作っている。意味は多少違うが、さながらブリューゲル描く所のバベルの塔が幾つも並んでいる様である。

事務所の周りにも流木を集めただけとはとても思えずそこらの樹木を切り倒して持って

来たらしい薪屋が軒を連ね家庭用の燃料として売っている。

この辺の印象はとても３年前からは想像も出来ない復興ぶりで、経済の基調は国際援助ではあるが末端までその恩恵が行き届き民生も活性化して来ている。これは地方に就いても言える事でスルハバッドで建設中の学校に通って来ている生徒の服装にも言え昨年に比べはるかに良くなっており従来はストリートチルドレンのようだったのが小奇麗な服装に変わっている。

確かに国際的な経済援助が功を発しているといえるだろう。

今回の旅行用にＩＳＡＦの PX に行きウイスキーを仕入れる。一本２０ドル前後でリーズナブルである。この点だけは酒のみの外国人にとってパキスタンよりあり難い所である。

７月１日

アフガンの数次ビザがやっと手にはいいた。

夜１１時にガイド、用心棒と２人の運転手と平位氏のガイドがトヨタのハイラックス・サーフ２台に分乗してファイザバードに向け出発した。彼等は途中一泊して７月３日にはファイザバードで我々と落ち合う予定である。

７月２日

バザール見物に行く。金曜の休日でなにもないと思ったが物凄い人ごみだ。カブール最大のモスクである　ジャミアマスジッド　はイスラームの導師たちの集会で異様な雰囲気であった。警備も厳しく人相の悪い人たちがモスクを出入りしている。

時間つぶしに動物園に入ると中国から寄贈された“野生のいのしし”と称するものがいて人気を集めているがどう見ても普通のブタだ。こちらの人たちはブタを知らないわけで納得である。

夕食にアフガン風焼き鳥を食する。美味だがそれにつけても運動不足で早く行動に入りたい。

７月３日

宿舎を掃除後、１１時発のＡＩＲ　ＳＥＲＶＥに乗りファイザバードへ出発する。我々以外にアメリカ人風の若者二人が同乗していた。発電関係の仕事をするＮＧＯのメンバーらしい。

同時に出たマザリシャリフ行きの便は満員でＮＧＯ活動も盛んなようである。ダリ語を話す欧州人の女性が一人乗っていた。アガカーン財団で働いているとのことである。

約１時間でファザリバードに到着する。ガイドたちが既に到着し手配した警察の護衛と共に出迎えてくれる。飛行場は小さなものだがかつては北部同盟軍のマスード将軍がタジクに行き来するのに利用していたところだと言う。

人口二十万人の町は川沿いに広がり、後背地には緑も多く一昔前のギルギットによく似ている。人々の顔も穏やかであり街の雰囲気も落ち着いておりこれでテロがあったのかと疑いたくなる。

旧市街の食堂で昼食を取る。ちゃっかりしたやつがわれわれの一員だと称して知らぬうちに２人ただ飯を食い逃げしていた。

ガイドが早手回しに昨日の中にコマンダーから通行許可と護衛を付ける了解を取っていてくれた。ファイザバードのコマンダーというのは日本で言えば県警の本部長あたりのことだろう。

バザールで護衛用の食料などを購入、護衛用の車も一台手配した。車は何とファイザバ

ードのコマンダーの個人車でトヨタの４WDピックアップトラックである。借用料は運転手付きで一日１２０ドルである。

車３台を含む我々のチーム８人に加え平位氏とそのガイド及び護衛２人を含めると１２人の大ミッションとなった。

到着後ドクターの帰路用のフライトを調べるとＫＡＭ ＡＩＲも飛んでおりカブールーファイザバード間４０ドルと格安であった。

宿舎はWＦＰのゲストハウスに泊まらせてもらう。一泊２５ドルのコンテナーハウスだがシャワー・トイレ付きで助かった。

ここの食堂で食事をしながらWＦＰのスタッフから事情聴取する。ファイザバードには外人が３０人ほど住んでいるが撃たれた事実はない、現地の人が殺されたのはテロではなく部族間の抗争によるとのことであった。しかしいたずらかどうかわからぬが最近銃弾が宿舎に撃ち込まれたり、入り口に爆薬が仕掛けられたりしたことはある。彼等も大分神経質になっているようで事務所と宿舎の前には車の進入を防ぐ為コンクリート詰めのドラムが並べてある。

夜中に銃声が２発聞こえる。

ガイド達も現地の人たちの情報を仕入れているがシリアスな動きはない。結局従来どおりの判断で、ワハーンに入れば安全であるとして予定通り翌日出発する事とした。

７月４日

朝５時出発し途中バラック村で朝食、ダリアパンジ河に沿って二車線が続く。途中畑も広く緑も豊かだが、麦６割ケシ４割程度の比率で栽培されている。今年は全国的にケシの栽培が拡大し昨年５００ドル／キロしていた生アヘンが今年は５０ドルに暴落しているそうだ。この増産の為、生アヘンの収穫期には人手を取られ日当の悪いＮＧＯ活動には廻ってこず支障をきたしている。

ダリアパンジ河に沿ってゆくと行く手にタジクの山々が見える　レーニン峰も見えることがあるそうだ

ダリア村は非常に豊かでバザールにはファイザバードよりも商品が豊富である。

広い谷間の農村地帯を走り本日の行程の約８割ほどを行くと広大な牧草地ゼバックで羊や馬や牛が放牧されているが、ここはドーラ峠経由パキスタンのチトラールに抜ける分岐点である。平居氏のガイドであるサヒウラはいつもタロカーンの自宅からこの峠を通ってパキスタンに来ているそうだ。

その後ザルハーンで草原越しにタジクの山々が見えるようになる。平位氏によればここからアールクス峰６，７００メートルなどが見えるそうである。

ゼバックからイシュカシムまでは旧ソ連軍が作った立派な二車線が続くが手入れが悪くところどころ通行不能で回り道をせざるを得ない。橋が壊れたところで渡渉を図ったがカブールから持って来たサーフが二台とも水中で石に引っかかり動かぬようになった。取りあえずコマンダーのピックアップで一台は

引き上げたがもう一台は全く動かず後部座席にまで水が侵入、最後は二台がかりで牽引しやっと引き上げる始末である。最後部に積んでいた荷物の半分は水浸しで持って来た砂糖がすべて溶けてしまった。

本日の目的地イシュカシムには４時頃到着し警察のゲストハウスに入った。いよいよ現地風の宿舎に泊まるわけだがしばらくするとノミ・ダニの訪問が有りからだ中が痒い。直ちに殺虫剤を散布し対応したが時既に遅くさされまくっていた。

ゲストハウスの管理人が作ったプラオでの夕食も済み落ちついたところでイシュカシムのコマンダーがナンバーツーを連れて現れ事情聴取された。中央政府の許可証とファイザバードのコマンダーの許可証を見せ説明したが彼曰くワハーンに関する許認可は自分の権限であり自分が決裁するとのことである。結局渉外係の督永の熱弁でイルシャッド峠を越えてパキスタンに抜ける行程の許可が下りまた護衛も２名付けてくれることになり、ひと安心である。

高度はファイザバードの１，４００メートルから２，５００メートルに上がったが全く支障なし、気候も日本の避暑地程度で快適である。それにしても途中で見た大規模なケシの栽培が気になる。ＷＦＰの食料援助で小麦粉が手に入ると自分の食事にまわし、畑は更に儲かるケシの栽培をしてしまい物事が悪いほうにばかり回転するのではないだろうか。人道援助の矛盾点の一つである。

イシュカシムには国境なき医師団の診療所が有りかつては日本人の助産婦もいたそうで、医療設備もある程度整い特に問題もないようである。

こなダニがまだいるらしい。かなりさされている。

７月５日

イシュカシムの警察のゲストハウスは一泊夕食付きで３０ドルであった。

６時出発、旧ソ連軍の作った道路は一車線だがフランスのＮＧＯが修理したのでかなり状態は良い。河を挟んだ向こう側タジクの町はコンクリート製の白い建物が並んでおりそれが直ぐそこに見える。これから当分の間河越しにタジクを見ながら走ることになる。

カラシニコフを持った護衛一名と昨日現れたナンバーツーが制服で同行して来た。これは力強いお守りになると一同喜んだ次第である。

ガイドによればコマンダーから２００ドル通行料の請求があったがウニャムニャのまま出発してしまったとの報告があった。

約１時間後にカシュデー村で平位氏の旧知である　シャーランガール　を表敬訪問し朝飯のナンとチャイをご馳走になる。彼はこの地域でのイスマイル派の指導者である。

４−５キロはあろうかという広い谷間の野原の走行と山から流れ込む水流の渡渉が繰り返し続く。渡渉は前日と同じく水中で身動きつかなくなること多く、そのたびにコマンダーから借り入れたピックアップが活躍し、動かなくなって後部座席に水が侵入したサーフを助けてくれる。良く見ているとこの車の運転手は難しいケースではハシシを吸って元気をつけエイヤッと車を引っ張っている。最後にはハイの状態のまま車を運転し始め収集がつかぬ状態になっていたがさすがにコマンダーの運転手だけあり運転には間違いなかった。

河の向こうはズッとタジクの道路が続いている。こちらから見るかぎり道路の状態は良

く、ＷＦＰがワハーンの奥地に小麦粉を運ぶのに一旦タジクを通っていると言うのもうなずけるところである。

午後３時頃ハンドウーズに到着する。この先の渡渉点では水量が多く明朝まで渡れないとのことでここに泊まることにする。

宿舎は岡の上にあるコマンダーのゲストルーム兼執務室であり、ここでもノミ・ダニの襲撃を受ける。平位氏は南京虫が怖いと言って外でテントに寝ることになった。彼はこの種の宿舎でシラミにたかられ赤いセーターが白くまだらになった経験があるといい心配したがこれだけは逃れる事が出来た。

ハンドゥースでもやはりイシュカシムの幹部が同行しているせいか通行許可は簡単でガイドが勝手にやってくれて手間がかからず通行料の請求もない。

イシュカシムからワハーン回廊に入ったわけだが、この一帯はイスマイリ派に属したワヒ族の地域である。したがって気風は温和で道々写真を撮っても文句を言われずまた女がチャドルで顔を隠すこともない。来る途中でアガ カーン ファウンデーションが支援する学校やクリニック・集会所をそこここに見る事ができた。アガ カーン　ファウンデーションの支援が充分行き届き我々の支援は必要なようには見えない。

クンドゥーズは一見畑も多くそれなりの村落だが、コマンダーとの話しから意外なところが見えて来た。この村落は１１０家族１，２００名からなるがクリニックもなく医療援助を是非ともして欲しい、問題はアヘンの吸引で人々は金ができるとアヘンを買ってしまい一向に生活水準が上がらない、男も女も幼児までアヘンを使用している、カーペット織りや家事で忙しい母親は幼児に大人しくさせる為乳に耳掻きほど混ぜて飲ますと言う。このためアヘン中毒患者も多く患者用のクリックがあったが３年ほど前に医者が逃げだして以降何ら対策もなされていない状態である。

数軒の家庭を訪問したが、住居はいわば家畜小屋に一つだけ明り取りを作り多少広くした程度で全く汚いところである。山の中にある夏村の小屋の状態と同じであり、ある一軒では若い女性が中毒で寝込んでいた。ペシャワール会の中村先生の話では鎮痛剤を渡しておけば対応出来るというが果たしてどうだろうか。良く考えるとイシュカシムまではあったけしの栽培がそれ以降全く見られず最初はイスマイル派の指導でケシの栽培は行われていないと思っていたが阿片の消費地に変っていたようである。

宿舎でできるかぎりの診療を行い、コマンダーには手持のクスリの半分を手渡したうえ秋には更に医薬品を届けると約束した。

７月６日

予定通り朝４：３０出発した。川原の中の小さな側流を何度も渡渉したが始めは順調であったが最後に大物に捕まる。コマンダーのピックアップはバックで上手く渡ったが他の二台は河の真ん中で動かなくなり水がドンドン侵入し始めた。幸いエンジンが上向きになっていてエンストだけは起こさないがまったく身動きがつかない。コマンダー車がなんとか牽引しようとするが上手く行かない。そのうちコマンダー車のラジエーターも漏れ始めこれも修繕せざるを得なくなった。一時間近く押したり引いたり河の中の石を手で動かしたりでやっと脱出することが出来た。また他の運転手たちもハシシのお世話になっているようである。

落ちついてあたりを見渡すと平位氏が若かりし頃初登攀したシェール コー ６，３２９メートルがみえてくる。

１０時近くにカライパンジャに到着、高度２，７００メートルである。ここでも当地の精神的指導者シャー イスマエルの自宅を表敬訪問した。シャー イスマイル本人は不在だが代理の人が接待してくれお茶とナンをご馳走になる。兄弟の誰かが亡くなったと言うので食前のお祈りをあげてからナンを頂く。

途中行商人、親方一人・人足３人が野外で店を開いて居るところに出会った、彼らはカブールから日用雑貨を持って来て５割の利益で販売しており結構商売になっているといい、帰りには山羊を１２０頭持って帰る予定だと話していた。

その後も渡渉が何回も続き酷い時は二台で動かない車を引いたり、最初からコマンダー車で牽引しながら川をわたったりしやっと４時にはサルハッドに到着する事が出来たが、この間に牽引に６重にして使っていたにもかかわらず持って行ったトラロープを３回も切ってしまった。今更ながら格好のよいサーフは４WDではあるが所詮都会車でありこのような状況では全く役に立たないことが判明した。

運転手の一人はハシシの吸い過ぎで目が点になっている。その昔暗殺集団がハッシシで元気をつけて目的地で暗殺を図ったという話しもうなずけるところである。

ピックアップはさすがに強いがこんなに酷使しラジエーターを痛めてしまってコンプレインがくるのではないと心配になってきた。最終的に車をチェックすると３台ともバンバーが曲がったり取れてしまったりボディーがボコボコに凹みラジエーターが壊れており修繕にかなり費用がかかりそうである、取りあえずガイドに１、６００ドルを一時金として渡し、後はカブールで精算することにした。

サルハッドの手前５キロ位からまた緑が増えはじめ牧場が広がり牛馬の数が増えて来た。４時ころ到着すると村長が出迎えてくれる。これ以上車が入れないというところから村長のゲストハウスまで荷物を担いで行った。外から見ると土レンガでできた汚い建物だが中は新しく清潔なものである。

サルハッドの牧場　背後の谷を左に入るとパキスタンとの国境ボロジール峠である

予定していたパキスタン人のガイドが出迎えてくれてホッとする。彼が居なければこれ以上ワハーン回廊内部に入ることは不可な訳である。

ガイドはパキスタンの国境警備隊と道中のコマンダーたちの通行許可は取って来たと言ってかみ切れをピラっとコマンダー達に見せたので一安心である。

ゲストハウスに落ちついたところでイシュカシムから付いてきた大物の護衛が態度を改めサルハッドのコマンダーが不在だがその代理として発言申し上げるが、今回は無事サルハッドに到着されお祝い申し上げると言い出した。ここまでは良かったがいきなり次のよ

うな発言となった。

イシュカシムのコマンダー サイード　ラーンの代理として申し上げるが、ＮＧＯの３名は政府の許可を正式に取って来ておりイルシャッド峠を越えてパキスタンまで行っても構わない、しかし平位氏は過去タリバーン時代に何回も非合法に入国しておりその行動には疑問がのこる。新政府の一員としてルール通りに運用するとこれ以上奥には入って貰うわけには行かないと言い出した。北部同盟時代の知り合いや実績は全く問題にならずむしろマイナスであると言うわけである。なん回かの非公式会談の結果何日でもワハーンに滞在しても構わないが必ずサルハッド経由カブールに戻ってもらうまたその監視と護衛の為に武装した人間を一名同行させると言う結論になり、通行料３００ドル、護衛の費用１００ドルを支払うことになった。

最初はパスポートも預かるといっていたがカブールのガイドが個人的に保証することで決着した。結局スパイ行為を疑われたためであり監視役がついてくるわけである。

村長によるとイギリス人３名とドイツ人４名がパミールに入っており彼等は正式な旅行許可証と観光省の許可を取って来ているとのことだ。

彼等は馬の借用代に一日１，０００アフガニーも支払ったという事で相場を上げてしまったようだ。他の英国人グループもボロギール峠を越えていったがパキスタン側の入国がどうなったか不明である。戻ってこないところを見ると何とかなったのであろう。

サルハッドの高度は３，２００メートル、セーター一枚程度の気候である。

７月７日

４時出発の予定で用意したが、何と馬方が集まったのは６時を過ぎであった。現金収入をめぐって誰が行くかもめていると言うが村長が相場を上げにかかっているのかもしれない。結局全員そろったのは７時である。馬は１日７００ルピー、ロバは５００ルピーである。馬５頭・ロバ５頭で出発した。話がついているはずなのに今度は国境警備隊の人間と称するのがパスポートを出せといってきた。結局説明だけで終わったがなんともややこしいことだ。

出発して直ぐのところに高い峠ダリーズ峠４，２００メートルがある。登りは頂上直下まで急な牧草地が続き頂上を過ぎると急なガラ場の下りとなる、久しぶりの乗馬で腰からしたがおかしい、キャンプサイトはバラクの手前１時間ほどの草原である。

この間アヘン商人らしき人間に出会った。銀の鞍に赤い毛布をかけた馬に乗り供の人間３人とロバ１頭を連れており、アヘンとおぼしき物は弁当箱大の金属カバンに入れられ大切そうに従者が肩から斜めにかけていた。ワハーンに散在するキルギス人の遊牧民に阿片を売る旅らしい。現地の人間によるとアヘン１トラ(約１２グラム)が山羊一頭から二頭の値段だそうで、山羊は１頭８００から３，０００アフガニーだから相当高価なものでありみな貧困な生活を送るのも無理はない。

キャンプサイトはゆったりした草原でヒマラヤマーモットを見かける。ダリーズ峠でバダクシャンの村とワハーンが完全に分断され一旦ワハーンに入ると非常の際の逃げ道がまったくなくなってしまう。川沿いの道は夏の増水で全く使えないそうである。

ダリーズ峠くだり、ガラ場を行く

７月８日

馬一頭ロバ一頭がどう見ても余分で、この朝村に返した。出発５時半、１時間でバラクに更に１時間でアバディーにつく。バラクは谷間の羊飼い小屋でマウンテンローズが満開であった。

通常はバラクから川筋を直線コースでボザイグンバースに行くが道が壊れ山塊一つを迂回せざるを得ず結局二日間余分にかかつてしまうことになった。

バラクからは始め急な登りだが、その後はダラダラとした平原を歩く。途中遊牧民の夏小屋があり三家族が住んで山羊の乳を絞りチーズを作っていた。やっと想像していたワハーンらしい風景となってきた。

それにしても馬方がダラダラと仕事をして頭にくる。ガイドによれば村長がなるべく時間をかけ日当を稼いで欲しいと言っていたといい全く頭にくるのでプッシュしまくって夕方五時まで行動させる。

キャンプサイトの高度は４，０００メートルであった。

７月９日

今まで続いていた晴天が今日は曇りとなり強い西風が吹きまくっている。夜間の温度は５℃昼間でも７℃位しかない。出発は５時半、動きの鈍い馬方たちを追いまくる。

途中で英国人３人のグループに会う。馬方を使わず自分で馬に乗り荷物も括りつけ、ロバは一頭だけであり動きが軽快である。６日間の予定でパミールのチャクマック湖まで往復したそうである。

いよいよシュパードキス峠４，７００メートルにかかると雪になった、２時には峠を越えることが出来たが下りに入ると雪田が出現し馬やロバの脚を取られる。少し下がって４，２００メートルくらいになると湿地に野生のオニオンが群生している。高山植物も満開で美しい。マーモットもしばしば現れピー・ピッピ・ピーと警戒音を上げている。

ダラダラダラとした下りではだんだんと眠くなり馬の上でうつらうつらとしてしまう。キャンプサイトは４，２００メートルで５時頃到着した。夕刻には強風が吹き寒い。

７月１０日

薄曇だが夜来の雨が雪になりうっすらと積もっている。風も強く寒い。テントの中でもマイナス２℃まで下がっている。

６時に出発したが馬に乗っていると寒くて我慢できずに歩かざるを得なくなった。

６時に出発して緩い下りの高原を歩く。直ぐハグブリーズ峠４，４００メートルの登りにかかるが峠と言うものの緩いコブを超える感じである。

草原一杯が黄色いチングルマの群落で絨毯を敷いたようである。２時にはキャンプサイト４，２００メートルに到着し、今日は出発以来始めてゆっくり出来た。

サイトにはキルギス人のパオが二つありやぎとヤクを相当な数飼っている。ここの男た

ちはアヘンを吸引すると聞きガイドに写真撮影の了解を取らせた、パオの中で横になって吸うところを撮影したが、狭いパオの中で煙の二次災害を受け気持ち悪くなりそうそうに退散したが頭痛の為１時間程寝込んでしまった。同じパオの中には赤ん坊と若い女２人住んでおり身体に良いわけはない。一体健康に問題はないのだろうか。アヘンを吸っていた男は３０才、女２人は奥さんだそうだ。

このキルギス人たちは２ヶ月くらいで移動を続け冬になると大パミールを通りタジクの気候の温暖な場所に帰って行くそうである。

ここでパキスタン人４人の行商人に出会う、日用雑貨を売っているというが態度といいロバに積んだ荷物の量といいどう見てもアヘンの行商人である。

夕方になると西風が強い。コマンダーが現れ通行料の請求があったようで、我々は無視したが平位氏はナニガシか払われたようだ。

７月１１日

今朝は晴れたが、テントの中でもマイナス２℃と冷え込んだ。みなを急かせて６時には出発する。

ゆっくりした下りの草原を下る。高度が下がるに連れて花がなくなり乾燥地帯に入る。２時間でボザイグンバスに到着した。　小高い丘の上から見ると、正面左に小パミールが広がっている。左にタジクへと向かう。右に中国へ、更に右を見るとサルハッドに向かう谷沿いのルートの雄大なパノラマが広がっている。

タジク方面にはチャクマック湖越しに国境の山々が見える。中国方面にも国境に広がる山脈が望まれる。かねてから興味を持っているワクジール峠もここにあるのであろう。

小高い丘から雄大なワハン回廊の高原が見渡せる
高原はタジクの国境までつながっている

冬になると世界三大珍獣の一つといわれるマルコポーロ羊が山から下りて来てこのあたりに多数集まるそうである。

とにかくこのシルクロードの本道といわれるところを玄奘三蔵が、マルコポーロが或いは昔の隊商達が通っていたのであろう。眺めていると感無量である。

マルコポーロはその東方見聞録の中でバダクシャン国に就いても述べているが、その中で“ボカーンを過ぎ(ワハーンのことか、ここでは地名として述べられている。今のサルハッドあたりだ)山中を旅すること３日で世界一高い言われている場所に着く、この高所に上ってみると二つの山脈の間に大きな湖があり……、そして、世界でもっとも美しい牧草に被われた平原を通り流れる河を発見する。ここではどんなに痩せた動物でも１０日も居れば思う存分太らせることが出来る……、ここにはあらゆる種類の野生動物がいる。中でも珍しいのは１メートル以上の角を持つ野生の山羊である(マルコポーロ羊である)……、ここから先はパミエルと呼ばれるが全く住民も居らず旅行に必要な物はすべて持って行かねばならない。寒さの為火もよく燃えず温度

も高くならないので注意しなければならない。”と述べた項目があるがまさにこの景観である。

両方の谷の合流点には旧ソ連軍の基地がある。司令部であった建物･燃料タンク･鉄条網･地雷のケーシング･缶詰めの空き缶等を見ることが出来る、まさに“つわものどもの夢の跡“だ。

ここには戦車やミサイルまで装備されていたそうだが１４年前の旧ソ連軍撤退時に撤去されており今は何もない、廃墟に遊牧民パオが一つ立っていた。ドクター平位によれば西に２０キロほど行った所にタジクからの車輌のアクセス道路があり簡単に戦車が入ってこられるそうである。

ここから少し離れたところにボザイゴンバスの寺院遺跡がある。土で出来たスチューバとそれを囲む塀からなっている、土地の人間の説明ではここにソ連軍侵攻まで住んでいたキルギス人達の墓地だと言うが、その様式と規模からいっていささか疑わしい。恐らくシルクロードの要衝ににあった寺院ではなかろうか。

イルシャッド峠経由パキスタンに至る道を勘定に入れれば四つの方角に向かう主要な路の交差点であり、地政学的に見てソ連軍もここに先進基地を置いたし、ボザイグンバスの立派な寺院が作られたのであろう。

このボザイゴンバスで３日前迂回をはじめたコースが本来の谷筋を通るルートにもどったわけである。二日間損をした勘定だがそれなりに楽しむ事が出来た。

ここで大パミールの調査に向かう平位氏と分かれたが、ドクター平位の監視役で来ていた護衛が我々からもバクシーシを欲しいと言い出した、これを断るとカラシニコフをガチャガチャやりだす、彼の理論も自分が現在はコマンダーであり法律であると言う事らしい。ガイドがこちらにもピストルがあるとやり返し結局１００ルピー払って落着した。

ボザイゴンバスを過ぎて大きな河の渡渉を行う。かなり厳しいものでロバが腹まで水に浸かつてしまう。

ボザイグバースで対岸に渡渉する　馬が腹まで水に漬かった

バイカラまではソ連軍の戦車の軌道跡がズッとついておりこれを辿って歩く、やはりパキスタンに対する戦略上の理由でバイカラまで戦車がパトロールしていたのであろう。

途中古い線刻画が石の上に刻まれているのを見つけた。いぬ・アイベックス羊･狼・スチューバとサンスクリット文字などが刻まれている。

バイカラ３，９００メートルに到着は 2 時頃であった、ここには６家族の人間が住んでいるが規模の割にはパキスタンへの交通の要所でありコマンダーもここに詰めている。現在は羊毛の刈り入れシーズンでニュージーランドと同じ刈り取りハサミで刈りとっていた。

診療を依頼され数人の健康診断と投薬をする。

日本の某民放番組が２００１年に無許可で

入り我々と同じルートを逆にサルハッドまで行くつもりで先ずここで拘束され大金を払って通過しサルハッドに向かったものの、またサルハッドで捕まり拘束されて大金を払い散々なめにあった上ボロギール峠経由でもまた大金を払いパキスタンに戻ったのをメンバーとして参加していたガイドが目撃しているが、ドクター平位も丁度サルハッドに滞在中で軍隊の幹部がどう取り扱うか相談している所にいあわせたそうである。

事前の準備が不足していいると揉め事の原因となり大金を払うはめになる。

到着後落ち着いた所でコマンダーに挨拶に行った。中々貫禄あるオヤジであるがヨーグルトをご馳走になった後お土産のビスケットと４０ドルを通過料として差し出した。

キルギス人のキャンプからバイカラに移動中見つけた線刻画

7月１２日

快晴の放射冷却で温度が下がりテントの中でもマイナス２℃である。ここ以降ロバは通行できないのでロバ４匹と弱った馬一頭を返し、人間用のヤク一頭と荷物用のヤク３頭を調達する、価格は７００ルピーで馬と変らない。

コマンダーによれば２００１年の某民放テレビ以来パキスタン人のほかに外人は来ていないそうである。

朝早くから山羊の乳絞りで女たちが忙しく働いている。山羊とヤクの数が多くこれが囲いをでて草原に向かつて移動する風景は迫力だ。

客用のパオに滞在中のパキスタン人に話を聞くと家族１１人でタジクの国境にあるムナラーまで行く途中で体調が悪くなりここにいる。春から夏にかけ移動し遊牧民に１年分の生活費を貸し、秋になると羊を回収しながら最終的には３００頭の羊を連れてパキスタンに帰るのだそうだ。

かなりの金額を動かしているわけだが、パキスタンとの国境付近で一頭４，０００ルピー､都会に行けば７，０００ルピーにはなるというので良い商売であろう。

ヤクの集まるのを待って出発は７時半となってしまった。出発直前にコマンダーが現れヤク代と通行料を値上げしろと言い出したが、ガイドがこれからは外人を一杯連れてくるから諦めろと説得して事なきを得た。

いよいよイルシャッド峠への登りが始まる、だんだん狭くなる峡谷をトラバースしながら昇って行く、途中キルギス人が住んだという住居跡が幾つかあるが今は誰も住んでいない。ガイドが夏の間ヤクを預けているパキスタン人の夏村も対岸に見える。

出発するとすぐ２匹の大きな牧羊犬が付いて来て幾ら追っても帰らない。心配しているとガイドが彼等はパキスタンから来た犬で勝手にマーモットなどを食べているので放って置けと平気な顔をしている。何かの拍子でここまで来てしまい我々に便乗して帰国するのかもしれない。

バイカラの部落にはヤクと山羊が多数放牧されている

途中で最後の大渡渉が待っていた、ヤクも馬も腹まで浸かり人間はこれに乗らないと渡ることができない。一緒について来た犬たちも最初はキューキュー言っていたが諦めて流されながらも犬掻きで渡ってきた。

キャンプサイトは高度３，８００メートルの草原である。到着は３時半であった。

キャンプサイトに到着直前にヤシーン峠が見える。パキスタンのイシュコマンに抜ける峠だがこちら側は氷河で覆われ傾斜も強く越すのが大変そうである。

途中でパキスタン人のパーティーに出会うが、彼等はサルハッドの学校建設に行くエンジニアー達であった。

ヤクにははじめて乗ったが乗り心地は大変よい。馬と比較すると小型車と４WDくらいの差があるし、氷や岩場での安定性は抜群である。

この辺には狼もいるらしく、皮だけ残ったアイベックス羊の残骸が幾つか転がっていた。

７月１３日

晴れて日中は暑い。６時半出発でキャンプサイト４，０００メートルに着いたのは１時であった。ここには高山植物が多く、また湿地帯には野生のオニオンが群生し赤い花を咲かせている。

野生のオニオンの群生が赤い花を咲かせている

昨日から付いて来ている２匹の犬たちは我々の後になり先になりしている。隊列の直ぐ横でクンクン嗅いでいると思うといきなりマーモットを咥えて振りまわし最後はかみ殺してしまった。２匹のうち強い方が後に残り食べていた。その後、今度はウサギを捕まえ一発でかみ殺し弱いほうがこれを食べていた。

キャンプサイトに着いた後しばらくしてから大きなほえる声が聞こえたが戻って来て血まみれのマーモットの毛皮を目の前に置いてくれた。さっきのほえ声は勝利の雄たけびであったらしい。

普段はテントの横に寝転がりなぜてやると腹を見せて甘ったれてくるしナンを投げてやれば喜んでたべているので間違いなく飼い犬であろうと推測される。

もっともこの辺のマーモットはすれていないので隊列の１－２０メートルくらいのところで立ちあがって眺めているし動作も鈍い。これでは犬にやられるのも無理はないだろう。

トレッキングの途中でチリンジパス・アディナバイ･ルクソックなどヒンズーラジの名山が見えて来る。ガイドは２週間後に再びア

メリカ人を連れ我々と同じルートを歩き、その後秋にはドイツ人を連れてバイカラからチリンジパスを目指す計画だそうだ。多くの人がこの地域に興味を持っている様に思える。

夜は風が強くテントが飛ばされそうだったが高度の割りに寒くなく助かった。

７月１４日

イルシャッド峠の雪が解け始める前に峠を越すため起きたのは３時頃であった、出発は４時半である。珍しくいつもはダラダラしているガイドが率先して準備していた。

ドンドン狭くなる渓谷をトラバースするがガラ場と岩場が交互に出現しさすがのヤクでも人間を載せては通れない場面があり乗ったり降りたりを繰り返し最後の氷河に達した。氷河の上に雪が積もりこの上を歩くが足場がわるい。ゴムの短靴か長靴をはいている馬方たちは大変である。

イルシャッド峠を越え振り返ると懐かしい光景が見える　2000 年に甲南山岳会で登ったピークである。

雪の上を歩く事約３０分で頂上へ、到着６時半高度４，９５０メートルである。犬たちは平気な顔でついてくる。

またパキスタン人のグループに会うが彼等もアメリカに本拠地を置くＮＧＯに属しサルハッドの学校建設に行くのだそうだ。

峠を越えパキスタン側にはいると雰囲気ががらりと変り、緑がなくなり氷河と岩峰が現れまさに典型的なカラコルムの山相だ。

ドンドン下り最後は氷河末端の川原を２時間歩いてジアラットへ到着、近くまで来るとババグンジ聖廟の白壁と赤屋根、緑の野原が見えて来る。一昨日衛星電話で依頼しておいた出迎えの車らしい白いランドクルーザーも見えている。これで最終目的地についたわけである。

一緒に来た犬たちはジアラットが近づくと落ちつかなくなり、対岸に民家が見え出すとキュンキュン言ってその辺を嗅ぎまわっている。川を渡ってジアラットに入るとそのうちどこかにいなくなってしまった。やはり飼い犬がはるばる戻って来たのだろうか。

ジアラットに駐在する国境警備隊員にはガイドが話をつけてあり最終的には３人で１００ドル支払い問題をクリアーできたが、最近は政府の中央情報機関からも中佐級が時々視察に来ておりこれがいると全く融通が利かないことになるそうだ。幸いこの日の朝この男はギルギットに戻り不在だったので危うく難を逃れる事が出来た。

大急ぎで馬方たちに料金を支払い車で２時間かけてソストに出た。ホテルにチェックインしてシャワーを浴びる。生き返った心地である。

しかし最後の難関がまだ残っている。パスポートにパキスタンの入国スタンプを押してもらわねばならない。

翌朝ソストの入国管理事務所と交渉するがやはりアフガンの出国スタンプがない事が問題となりもめてしまったが知り合いの高官の口利きで問題は解決できた。

その日のうちに自動車でギルギット経由イスラマバードへ出発し７月１６日の夕刻イスラマバードに到着した。

ビールで乾杯である。

終わりに

ファイザバードからイシュカシムまで、言わばワハーン回廊が始まる所までは農地も広く水も豊かな農村地帯であるが、いざワハーンに入ると人口もまばらで生活も厳しく貧困である。その上アヘンの吸引の習慣が昔から続き金が出来ればアヘンを買ってしまい一向に生活は良くならない。この状態で中途半端な支援をしても全く効果はないと思われる。

幸いな事にイシュカシム以東ではイスマイル派の勢力圏でその精神指導者である　シャー　イスマイル　がアヘン撲滅の指導をはじめ、またアガカーン財団が学校・診療所・集会所建設を着々と進めているようであり我々の恒常的な支援よりは効率的である。

結論から言えば我々としてはスポット的な援助、具体的には巡回医療や医薬品の提供程度しか出来ないのではと考える。ワハーン奥地の冬村であるミルザムラードやランガールで学校を建ててくれという話はあるが資材の運び様もなく当面不可能である。またＷＦＰからも非公式に道路建設や学校建設をする場合労賃を小麦粉で援助する用意があるので調査の上報告をしてもらいたいと言ってきたが、このシステムはスルハバッドで利用させて頂く方向で検討したい。

ワハ―ン回廊の旅については、テロのリスクは我々の分析通り杞憂に終わったものの、各地のいわゆるコマンダーに対する交渉にかなりの神経を使わされた。コマンダーとは要するに地方の警察署長の事だが、中央政府の権威は以前に比べれば行き届いてきているもののまだまだ各コマンダーが自分勝手なルールでその地域を統治しており外国人に対しては通行料を請求している。この機嫌を損ねると拘束されたりもと来た道を引き返させられたりすることになる。

また旧北部同盟のコネは全く効かずむしろマイナスに働くケースもある。今から考えると移動中の神経の半分はコマンダーとの交渉に使ったような気がする。

地理的に言うとワハーン回廊は回廊と言うだけあって南北両側を５―６，０００メートル級の山に挟まれた廊下であり、また東西もその両端は峠で塞がれている。唯一大パミールの東側がタジクに平地でつながっているがこの地域は現地の人間しか交通を許されていない。したがって一旦事故があると逃げ場がなく救援の仕様もない。非合法にパキスタンに出ようとしても最低４－５日はかかってしまう。やはり隔離された秘境と言わざるを得ない。怪我や病気になった時のリスクを考え、今回の旅行は相当な緊張感の連続であった。

実行前に立てた原則、すなわち公式許可を取り行動し非合法な行動はしない、テロ対策には特に気を付け護衛をつける、充分な装備とスタッフを用意すると言うことはほぼ実行出来たと思う。

最近は外国人も徐々に入り始めているようだが十分な準備と大規模なキャラバンを組まないと入ってはならない地域である。

ブータン紀行　　—2003 年 10 月—

越 田 和 男　(昭 36 理)

憧れのブータン入り

コルカタを離陸して小１時間、ブータン航空（Druk Air）の中型４発ジェット機はブータン上空に入ると時計回りに旋回し、左機窓にブータンー中国国境上のチョモラリその他7,000m級の山々が展開する。高度をぐんぐん下げて、パロの谷に北から進入すると、左の断崖にぶら下がるように写真で見覚えのあるタクツァン僧院が確認できた。パロ空港着陸寸前になると実りの秋の色濃い稲田を見下ろす丘の上にパロ・ゾンが聳え立つのが望まれた。

パロ着陸直前

まるで他の飛行機の見当たらない空港に着陸しタラップを降りると、要人か上役でも迎えるのか、民族衣装の“ゴ”姿で、ドテラを着た日本人のような数人の役人らしきのが笑顔で同乗の要人達を出迎えた。場違いなほどの立派な空港ビルに入り、ゴ姿の役人が入国手続きに応対し無事荷物も受け取ると、やはりゴ姿の今回の旅のガイドであるペマさんと運転手に迎えられた。

べとべとと蒸し暑かった経由地のバンコックと較べ、標高 2,400mのパロは爽やかな秋空。中古のトヨタ・ハイエースでわずか３００m位の町のメインストリートをぬけて、パロ・チュー右岸の丘の中腹に建つ、今回のエージェントであるマンダラ・ツアーの経営する快適なマンダラ・リゾートに荷を解き、さっそく見晴らしの良い食堂で地ビールつき昼食で到着を祝った。一行は甲南の旧友平井吉夫、日本山岳会の友人国見ゆみ子さんに越田夫婦の 4 人連れで、ブータンにはまり込んで今度が 4 回目となる国見さん以外は初めてのブータン行。国見さん旧知の宿の女将の歓迎も受け、初入国の印象は上々である。

思えば中尾佐助氏の「秘境ブータン」が出たのが学生時代だったから、もう 40 年以上も昔のことだ。その後、小方全弘、桑原武夫、西岡京治さん達の著作を読む度にこの地への憧憬をつのらせたものだが、こんな歳になってリタイヤ後に気楽に遊び仲間とやって来られたのが夢のようだ。

Druk Pass のトレッキング

さて、ブータンに行くからには観光だけというのでは物足りない。やはりトレッキングをしたいと調べてみると、ツアーの出ているのが圧倒的にパロからチョモラリの BC を往復するというもので、もうひとつぱっとしない。東京で独りでマルコポーロ・ジャパンなるエージェントをやっている真藤健一さんか

らの情報ではパロからの山越えで首都のティンプーに至るDruk Passなるトレッキング・コースがお勧めだという。日本人はあまり行ってないようで､従って詳しい情報はないが､3泊くらいでエスケープ・ルートもある初心者向けのコースで、ほとんどが快適な尾根歩きで山も見えますとのこと。国見さんも始めてだというので、これに飛びついた。

パロ到着の翌朝、宿からパロ・チューを挟んだ対岸の尾根上に見えるゴンパの近くが今夜のキャンプ･サイトで､標高差1,000mの登りだと聞かされた。気合を入れてトレッキング出発点までマイクロで向かうと、馬やら人やらが何やら大げさな準備中。我々客4名にガイドのペマ、助手の若者サンゲ、コックとその助手、それに馬方2人、計6名に馬9頭が付くという何とも気が引ける贅沢な旅だ。これは現在のブータン政府の定めるところの、ホテルに泊って観光旅行しようがテント泊のトレッキングをしようが、1日1人200米ドルという公定料金の下に現地エージェントの采配で決まる旅仕度ということだそうだ。

9時過ぎ出発。晴。登り始めてしばらくは民家が点在する。みな伝統的な白壁のどっしりした木造建築で、風景にとけ込んだ佇まいが心なごむ。屋根に真っ赤な唐辛子が多量に干されているのがブータンの秋の風物詩らしい。石置き屋根が減ってトタン屋根に替わりつつあるのはここ数年来とのこと。ガイドが途中の農家に立ち寄り、民族衣装の女将さんから小粒で旨いりんごを購入した。正午前に昼食。我々の荷物を積んだ馬の一行が追い抜いて行った。昼食は飲み物と数種類のクックされたものと赤メシをサンゲが運んでサーヴしてくれる。

山腹の農家

この日はバテルこともなく、ほぼ1,100m登って、宿から見えていた白い城砦（Jele Dzong）のすぐ傍の峠（Jele La 3,450m）に3時過ぎに着いた。峠の反対側を少し下った所に既に今夜のテント、大きな食天が一つに我々用の小さなのが3張りが張られていた。夕方、焚き火を囲み赤ワイン。夕食はスープで始まり結構な品数の料理が並ぶ。カレー味の物もあるが外国人向けに辛味は押さえているようだった。やがて満天ギラギラの星空、こんなに鮮明な天の川を見たのは初めてで、これだけでも遥々やって来た甲斐があったと誰かがつぶやいた。喉の渇きのせいか紅茶がやたら旨く、ガブ飲みしたのは失敗でテントの第一夜は寝つきが悪く、しかも夜半に放し飼いの馬がテントのそばに来て、寝ている枕元で草をムシャクシャと食らう音が意外と大きく、なんかの拍子で踏んづけられはしないかとひやひや。お陰で完全に寝不足となってしまった。

トレッキング2日目は、高度差は少ないが長丁場の尾根歩きだという。何時間位かとの問いにペマは即答せず、あんたらの歩く早さ次第だといい、標高どのくらいまで登るのか

についてもきちっとした答え無く、地図でどの辺だといっても要領を得ない。悪い予感はするものの最初のピッチでゾンの上の稜線へ出たとたん､雄大な眺めに不安も消し飛んだ。我々がこれから辿る北へ向かう尾根筋（Jele Range)から西の谷を隔てて頂上近くに雪をつけた岩峰には眼を見張ったが、ペマは無名峰だという。ペマ・ピークとでも命名しろといってやったが、後に入手したあまり出来の良くない４５万分の１図でよくみると、標高は一寸怪しいが、ちゃんとそれらしきピーク Chatarake （6,500m）というのがあった。ペマの興味の対象外らしい。

Jele Range の稜線歩き

最初の２～３時間は快適な尾根歩きが続いたが、徐々に高度を上げアップダウンを繰り返している内に、何だかペースが落ち、一寸した登りにひーこら言うようになった。尾根筋で遥か谷間の部落から香草採りに登って来たという母娘に遭った。彼らには生活圏内のことで当たり前なのだろう、元気なものだ。こっちは遊びに来てフーフーいうのだから恥ずかしい。ペマはこの調子だと明るい内にキャンプサイトには着けないなどと言い出す。結局午前中は５時間弱歩いて、住居跡のようなところ（Jangchulakha というところらしい）に着き、ここで昼食となるも半バテ状態で食欲なし。

午後は、このスピードにつき合わされてはかなわないと思ったのだろう、平井と家内と小生はサブリュックも取り上げられ空身にしてくれた。それでも、標高 4,000m 前後でのアップダウンが続き、ペースは極端に落ちた。雲行きも怪しくなり、悪い予感の的中したことを悟った。やがて右前方の谷のどんづまりに今夜の泊まり場の湖が見えたが、まだ遥か彼方だ。尾根から湖へ下り始める頃には既に薄暗く､谷底へと約 400m を下り切ったところで真っ暗。迎えに来たペマがライトを持って誘導してくれ、へトへトになって既に設営の終わったキャンプに辿りついた。結局、国見さんはケロッとしているし、家内もそこそこ元気で、男 2 人がバテバテだった。我々夫婦と平井は 65 歳､国見さんはずっとずっと若い、まあいいか。この日の出発点の標高 3,400m、最高点 4,200m、目的地 3,800m、水平距離 21km 強に約 11 時間かかってしまった。

Jimilang Tsho（湖）と呼ばれる湖畔でのキャンプ・ファイヤーは、そんなことで残念ながら食も進まず、ふるまわれたチャンにロキシーを混ぜたような地酒の回し飲みも楽しめずに、早々にシュラフに潜り込んだ。家内が効くというので、石井スポーツで買った「食べる酸素」の錠剤を飲んだら、ペマが食べる酸素と聞いて目を丸くした。これの効用は結局結論出せず。

3 日目朝、快晴、－４℃。周りの石楠花の葉が寒さで縮こまっていた。ペマが湖で鱒を２匹釣ってきたが、腹を割いてせっかくのイクラは捨ててしまい、身の方もとうとう食事

には供されなかった。

この日は、昨日歩いた尾根を眺めながら、東隣の尾根の中腹を南に向かう。楽勝の行程だということで出発も遅い。他パーティーに初めて出会った。昨夜湖の対岸に幕営していた人達で、欧米人で国籍いろいろ、ベトナムで国連の運営する学校の男女先生一行７名。女性の１人は、一昨年の９月にはニューヨークにいて、複数の知人が例のテロで亡くなったとか。このパーティー、馬の数がそんなに多い訳ではなかったのだが、ちゃんとトイレ・テントを携行しており、白人向けにはえらいサービスやねー、とこちらのご夫人が指摘した。

キャンプの朝一行４人

標高 4,000m 前後だが､昨日よりもアップダウン少なく、途中チョモラリ（7,314m）なども望め､快適に昼食時間込みで約５時間｡広々とした Simkota 湖畔のキャンプサイトに２時前には到着し、のんびりと午後を過ごした。ばりばりの揚げ煎餅のようなのをつまみに赤ワインを飲んでいたら、馬が煎餅をほしがってテーブルに馬面をつっこんできて往生した。夕方うたた寝したのが間違いで、陽が落ち込んで急に冷え込み寒気が止まらない。国見さんにアルコールのせいですね、とぴしゃりとやられてしまった。焚き火のそばで暖かいトマトスープにありつき一息ついたが、食欲回復せず、最後の晩向けのコック労作のケーキもギブアップ。頭痛でキャンプ・ファイヤーもリタイヤ｡いや全くだらしないことでした。

Simkota のキャンプ地

トレッキング最終日も晴れ。－９℃まで冷え込んだ割には寒さ感じずに無事に用足しも済ませ､モーニング･ティーを美味しくいただき８時過ぎ出発。この日は尾根上を 10km、最後の峠から首都ティンプーへの 10km 標高差 1,500m の下り。楽勝と聞かされていたが、標高 4,000m での登り下りと最後の下りはなかなかの長丁場で、国連パーティーは途中でもう一泊するようだった。

来し方を振り返れば白銀のチョモラリ、ジチュダケが望まれ、さらに最後の峠（Phume La）からはブータンの最高峰ガンカー・プンスム（7,542m）も雲間に垣間見えた。この峠、地図に 4,210m の記載あるも､我々の高度計では 4,000m そこそこ｡ブータンではこんなことはよくあるらしい。遥かにティンプーの町を見下ろし、ダルシンのはためくこの快適な峠で昼食大休止して山への別れを惜しんだ。後は､中腹にある Phajoding 僧院群まで急降下、そのあと長い長いだらだら下りに飽きた頃、麓の集落に着いた。農家ではなく都市型労働者の住いであろうか、ちょっとブータンらしくない、やや貧しげな集落だったが、学校帰

りの子供達はみな顔立ちもよく民族服で明るく礼儀正しかった。余談だが、世界中でこの国ほどジーパン、T シャツ姿の少ない国は無いのではないか。

やがて、荷物を降ろして来た道をパロへと帰る馬方一行とすれちがい、迎えのバスの待機地点に着き、３泊４日のトレッキングは終了した。距離にしてわずか 60㎞そこらだったが我々にはきつかった。ガイドにもう１泊はすべきだったのではないかと聞いてみたら、ペマは最初それを提案していたのに、間に入った誰かが客の希望だから３泊にしろと言ったらしい。他人任せを反省すべきですね。ちなみに帰宅してからインターネットを見ていたら、同じコースを他のトレッキング・エージェントが５泊６日でオファーしていた。しかし、トレッキングを終えティンプーで迎えた翌朝からは雨。上でゆっくりしていたら稜線上は雪となったので難儀していたに違いない。

アフター・トレッキング

このあと、ブータンには更に５泊した。ティンプーの街の１日観光、ドチュ・ラ越え、ウォンデ・フォダンの滔々と流れるサンコシュ河畔の優雅なリゾートでの１泊、かつての冬の離宮の建つプナカ、パロ谷の再訪とチェリ・ラへのドライヴなど、ペマの案内とニマの運転で西北ブータンの旅を楽しんだ。秋のこの季節にしては、トレッキング中の稜線にも山麓の村にも結構花々が多く、旅に彩を与えてくれた。

主要道路は日本の林道程度の道幅で舗装されており、ニマの運転も穏やかで、安心して身を任せられた。車窓から望むブータンの村々は、既に変わりつつあるとはいえ、どれものどかで豊か、絵のように美しく、明治大正期に欧米人が賛美し、ほんの 3、40 年前迄は残っていた日本の山村の風情を思い起こさせた。人々も温和そのもの、旅人に土産物を売りつけようする商売根性も皆無で、この国に来ると何かほっとするというのがリピーターの多い要因なのだろう。

山村風景

旅の終わりに、パロの南西のボンデの村の小高い丘の上に建つ西岡京治氏の記念チョルテンを訪ねた。見下ろす稲田は西岡さんの指導によるものと聞く。既に新雪の来た山々と黄色い稲田のコントラスの妙を愛でながら、この地に遂に根を下ろした若き日の西岡青年の情熱に思いを馳せた。　（2004 年 8 月）

旅　の　記　録

期　　間：　2003 年 10 月 18 日～29 日
メンバー：　平井吉夫　国見ゆみ子
　　越田和男・光江
日　　程：
18 日　成田～バンコック泊
19 日　～コルカタ～パロ
20～23 日　トレッキング(Druk Pass)
24 日　ティンプー観光

25 日　～ドチュ・ラ～ウォンデュフォダン
26 日　～プナカ～ドチュ・ラ～パロ
27 日　チェリ・ラ往復　パロ観光
28 日　～コルカタ～バンコック～機中泊
29 日　帰国

ガイド：Pema Gyalpo 37 歳
(帰国後しばらくしてメールが来て、Mandala Tours&Trek 社から独立して個人でエージェントを設立したので宜しくとのこと。機会があったら使ってやって下さい)

甲南学園 広報誌　「甲南Ｔｏｄａｙ」(2003 年９月号)
に山岳部の紹介記事が掲載されました

裏表紙には「鳩杖」(中井久夫氏)
が連載されています

“ノアの箱舟”伝説の山、アララットへ

南 里 章 二　(昭 45 理)

Ⅰ．アララット、その見果てぬ夢

今からちょうど３０年前、1974 年の８月、私はイスタンブールからテヘランへ向かうバスに乗っていた。カイロを出発し、空路でダマスカス、ベイルートを経てイスタンブールから陸路でニューデリーまで、現地の交通機関を乗り継いで、酷暑のシルクロードの西半分を走破する計画の途上であった。出発して３日目の昼過ぎ､イランとの国境に近づく頃、アジア・ハイウェイの左手に雲と見まがうような高所に、雪を頂いた巨大な山塊が見えてきた。山裾を大きく広げた山容は富士山を二まわりほど大きくした感じである。しかし雪が纏わりついているあたりがとてつもなく高く見えた。旧約聖書「創世記」に記されるノアの箱舟が、150 日間洪水のただ中をさまよい､ようやくたどり着いたとされる伝説の山、アララット山（5165m）だ。旅立つ前に繰り返し愛読していた深田久弥著「シルクロード」（1961）には、隊が登頂に失敗したことが記されていたこともあり、その時登れるものなら、あの頂きに立って見たいなと思った。しかし慣れない異国での長距離の移動に精一杯であった当時の私にはとても手の届く代物ではなかった。

それから 25 年後の 1998 年夏、私はその７年前に崩壊したソ連邦から独立したアルメニア共和国の首都エレバンにいた。着いた日の翌朝早く、日が差して間もないときに泊まっていたホテルの屋上に駆け上がった。朝もやを突くように朝日に耀く白銀を頂いたアララット山が目に飛び込んできた。この時も同じ思いにとらわれたが、私にとっては水平の旅の完成（世界全独立国 192 カ国全ての旅）にあと 20 カ国とまだまだ頑張らねばならない時期でもあったので、その思いは再び胸の内深く収めねばならなかった。

トルコ、イラン国境付近から見たアララット

（1974 年撮影）

アルメニアの首都エレバンから見たアララット

（1998 年撮影）

その翌年（1999 年）、５１歳の夏、いつものように海外への旅の準備に追われていた時期に、若いころからの暴飲暴食と不摂生がたたってしまったのか、心筋梗塞を患ってしまった。さいわい症状はそれほど深刻ではなく１週間ほどで退院して、わずかな計画縮小だけでその夏もカリブ海の７カ国をめぐる水平の旅を何とか続けることが出来た。しかし心臓の５分の１が壊死してしまった状態で、それからもハードな旅が続けられるかどうかという大きな不安要因を抱え込んでしまった。何せ今までの５分の４の心臓で生きていかねばならないのだから。

それでも２年後の 2001 年、アフリカ最西端のカーボ・ベルデを訪れ、水平の旅の完成に一段落つけることが出来た。さらに翌年の 2002 年、同年５月に独立した東チモールを旅してこの新独立国を加えて世界全独立国 192 カ国の旅を完成する前に東マレーシア（ボルネオ）を訪れ、キナバル山（4009m）登山を試みた。水平の旅に執着するあまり、忘れていた垂直の旅への憧れがささやかに爆発した瞬間であった。登山道は完全に整備され、登りやすい山であったが、私にとっては久しぶりに取り組んだ大きな山であったので、結構体力を消耗してしまった。しかし 4000ｍを超えた高さで私の心臓は全く異常なかった。

これでやや自信を取り戻し、去年（2003 年）はイスタンブールから西安に至る全シルクロード約１万ｋｍの行程のなかで、私にとって未踏部分であった中国最西端タシュクルガンよりクンジュラブ峠を越えて、アフガニスタンとの国境カイバル峠の東、パキスタンのペシャワルまでの数 100ｋｍを旅して全シルクロードをつなぐ計画を立てた。バスに乗ってではあるが標高 4700m のクンジュラブ峠を越えた時にも特に異常を感じることもなかった。そのあとパキスタン側のススト より右折してチャプルサン川沿いに西進して、パキスタンとアフガニスタンとの国境、３年前に雨宮さんたちが到達したキルギス峠（4820m）に向かって右（東）側、ワハン回廊を見下ろすイルシャッド峠（4880m）にも登った。日パ旅行社の親切なガイド、シャヒーンに励まされつつ、特に息苦しい思いもせずに高所に立つことが出来て、自信を取り戻せたことがこの旅一番の収穫であった。4900m近い高さに立てたのだから、次は約 5200mの高さにも充分挑戦できるだろう。こうしてあのシルクロード上に気高く聳えるアララット山の頂きが私の脳裏によみがえったのも極めて自然な成り行きであった。

さて前置きが長くなってしまったがアララット山登山にこぎつけるまでもう少し。
周知のようにアララット山はトルコ、イラン、アルメニア三国の国境にまたがる地点にあるため、さまざまな軍事的問題を抱えている。また何よりも国を持たない世界最大の少数民族クルド人の居住地域でもあり、反政府運動も活発なことから、トルコ政府は長らく外国人の入域を許可しなかった。そのような中で 1999 年に逮捕されたクルド人の反政府組織、クルド労働者党（ＰＫＫ）の指導者オジャランが獄中より声明を出した。これに従い、クルド人は武力闘争を放棄し、またＥＵ加盟を強く望むトルコ政府もクルド人の権利確立を訴え始めたので、３～４年前より、政府と軍の事前許可さえ得ることが出来ればアララット山登山は可能となった。

日本でも西遊やアトラストレックなどの旅行社により、エクスペディション・ツアーとしてアララット山登山が実施されたとも聞く。

しかし去年あたりからまた登山許可取得に予想以上の日数がかかりはじめたので両社とも去年、今年とアララット山登山ツアーを中止している。であるため登山許可は個人で取得せねばならない。

そうだ、アウィニに相談してみよう。アウィニとは30年前､私がイスタンブールに滞在していたとき、ひょんなことから友達になった当時イスタンブール大学の学生であった。それから30年間､毎年欠かさず連絡を取り合い、神戸とイスタンブールの地震の際にはお互い本気で相手の身を案じた仲である。旅先で仲良くなり、こいつとは一生付き合えそうだと思い、帰国後も手紙をやりとりしたことは、これまでに山ほどあるが、大概は再会しない限り、いいとこ２～３年で終ってしまうのが関の山である。30年間も絆を維持することができたのはトルコ人の彼だけだ。アウィニは２０年前にイスタンブールで旅行代理店を立ち上げていた。そのアウィニに許可取得を依頼したのが今年の６月初め。彼はあらゆるコネクションを使って、政府関係、軍関係にわたりをつけ、許可を取り付けてくれた。

３０年ぶりに再会したアウィニと私

３０年前のアウィニと私

東京のトルコ大使館に許可が下りた知らせが入ったのは私が出発する３日前のことであった。大使館から発給される特殊なヴィザ（トルコの入国、観光は３カ月以内ならヴィザ不要）を受領するため慌てて東京を日帰り往復した。

II. イスタンブールよりドゥバヤジットへ —アララットへのアプローチ

7月20日夕刻､30年前にはそれほど立派とも思えなかったイスタンブール、アタチュルク国際空港はヨーロッパのどの都市の空港にもひけをとらない近代的空港に変身していた。アウィニがよこしてくれた車で海岸沿いに約30 分、懐かしいアヤ・ソフィア寺院やブルー・モスクが見えてくる。そのすぐ近く、スルタンアフメット地区にアウィニのオフィスがあった。こじんまりとした造りであったが、数多くのヨーロッパ方面からの若い旅行者が出入りしている。立地条件は最高の場所である。オフィスの前で彼と30年ぶりの再会。や

や太り、髪も禿げ、髭面になっていたが優しい微笑みは全く同じ。こちらも腹が出て、白髪になっていることなど忘れ、堅い握手と抱擁。夕食を共にして積もる話に花を咲かすのはアララット山登山終了後ということにして、翌21日朝、空路エルズルムへ飛ぶ。

機窓のはるか下に、一面褐色のなかに時折緑を見せるアナトリア高原が拡がる。エルズルムに近づき、機の高度が下がると、東西に延びるアジア・ハイウェイがはっきりと見えてくる。空港で待機していたドゥバヤジットのシメール・ホテルがよこしてくれた車で約４時間、イラン国境まで 35km という標高約2000mのドゥバヤジットに到着。30年前にはイスタンブールからテヘラン行きのバスで３日かかった地点だ。楽しみにしていたアララット山はこの日は曇り空の夕闇のなかから姿を現わすことはなかった。

翌 22 日朝５時に屋上のテラスに出て見ると、朝もやのなかにあの懐かしい山容の大きなアララット山が眼前に飛び込んできた。上部４分の１ほどは雪に覆われ、右横に小アララット（3896m）を従えた、堂々とした容姿の独立峰である。やがて小アララットの真上に朝日が上り、アララット山頂付近の雪が眩しく輝き始める。が、太陽が高く上るとすぐに雲に覆われてしまい、上部３分の１は再び姿を隠してしまった。

午前中にドゥバジヤットの町に出てみる。ドゥバジヤットは三週間ほど前にマグニチュード５．１の地震に見舞われ、町の建物が崩壊し、この地域全体で９人の死者を出したというが損壊のあとは殆ど見られない。昨夜も１１時頃、ホテルの部屋で激しい揺れと階下の女性の悲鳴で飛び起きた。木造なので、揺れが一層激しく感じられたのだろう。このあたりでは地震は日常茶飯事なのだろうか。郊外のイスハク・パシャの宮殿を訪れる。アララット山の南側の山並みの中腹に立つ、18世紀末のクルド人王朝の重厚な要塞風の宮殿。300 以上あるという石造りの部屋は図書館あり、ハーレムあり、モスクあり、牢屋ありで多彩な様相を見せていた。

昼過ぎにホテルのオーナーのアフメットが呼び寄せてくれたガイド、同姓のアフメットがやってくる。53歳になるという、見るからに精悍な男であるが、彼はトルコ語以外には片言のドイツ語しかしゃべらない。が、登山に言葉は大きな問題ではない。もう一人の登山参加者、イスタンブール在住の会社経営者、やはり同姓のアフメット（やはり 50 歳前後）を加えて簡単な登山の打ち合わせをする。

夜は、この日ドゥバヤジットにやってきた東トルコ一周の日本人ツアーグループの人たちと歓談。アララット山を眺めるためにやってきた人々の前に、今からそのアララットに登るという物好きの出現にツアー客の方々はとても驚いておられたようだった。

III. My Dream has come true.

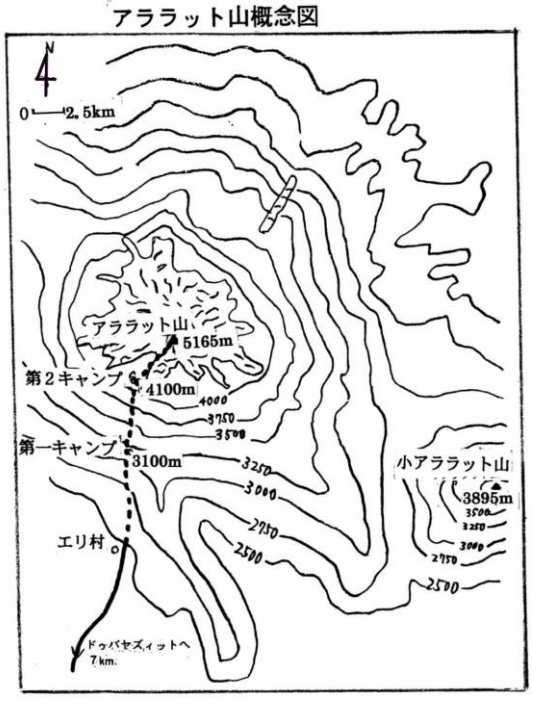
翌 23 日朝９時、チャーターした小さな四輪駆動車にホテルで用意してもらった食糧を積み込んで出発。トルコ語でジャンダルムという国境警備隊の駐屯所で許可書を見せ、登山登録した後、北へ一直線、１時間ほど緩やかな坂道を駆け上がり、エリという村からやってきた、馬を引くクルド人たちが待機する地点へ。二頭の馬に荷を積み、二人の少年が綱を引く。ほぼ空身で歩き始め、１時間ほどでエリ村へ。中央にポールを一本立てた白い

テントが二つ、大型のキャンプ用テントが四張り、集落の中ほどに六本の頑丈な木の支柱に支えられた羊皮の屋根の下、床には分厚い絨毯が敷かれたテントがあり、ここでチャイとナンとヨーグルトの昼食。羊のヨーグルトは酸っぱいがナンとよく合う。男たちは放牧に出かけていて、女性と子供と老人しかいなかったが、平和そのものの放牧生活には何の不満もないようであった。ここで１時間近く費やしてしまい、昼過ぎにしょぼ降る雨の中を再出発。しかし雨が次第に強まったので上部のクルドの村でしばらく雨宿り。再び傘をさして歩き続ける。斜面は緩やかだがキャンプ地までは距離が長い。標高 3100mの第一キャンプ予定地に着いたのは午後５時を回ってしまった。一人用のテントを張り終えたとたん雹（ヒョウ）が激しく降り始めた。キャンプ地には明日下山するというフランス人やドイツ人のテントが１０数張り、すべてここ数日の悪天候に登頂を断念して降りてきた人たちだ。夕食はひしゃげたパンとパスタとオイルサーディン三切れの質素なもの。昨年のイルシャッド峠では日パのコックのイブラヒムがオニギリやミソ汁まで用意してくれたのとはえらい違い。今回はガイドのアフメットがコックを兼ね、馬引きの少年二人が補佐している。

８時にはシュラフに入って休む。夜中トイレに出ると遥か下にドゥバヤジットの町の灯りが見える。町からやや離れたところにあるホテルの位置も特定出来る。気温が下がり、寒さが堪える。

翌 24 日朝、薄日の差す５時頃起床。朝食はまずいスープとパン。すぐにテントをたたみ出発を待つが８時を回ってしまう。同行のイスタンブールからのアフメットはこの第一キャンプに残るという。昨日も歩行中何度も携帯電話が鳴り、彼は商用をこなしていた。昨夜から今朝にかけての寒さが体に堪えたとも言う。英語が少し通じる彼が脱落するのは困るが仕方ない。ゆっくりとキャンプ地西側の尾根づたいに登っていく。少年二人が手綱を引く馬はテンポよく、かなりの早さで登っていく。後から追いついた、チェコ、ドイツ、ポーランドの若者数名の混成部隊。彼らは費用節約のため､自分たちで荷をかついでいた。曇天下を彼らとほぼ同じペースで抜かし、抜かされを繰り返して黙々とやや急な斜面を登って行く。午前１１時半、標高 4100m，不安定な岩場を切り広げたテント場に着く。第二キャンプ地である。

アララット山概念図



もう西側の尾根越しに見える小アララットの高さを超えてしまっている。馬方の少年二人は、ここには馬の飼料となる草が全くない

ので第一キャンプまで降りて行く。明日の昼頃、登頂の成功いかんにかかわらず再びここまで登り直してくるという。昼過ぎより天候は悪化。昨日と同じく雹がテントに叩きつけるように降り注ぐ。風もきつい。夕食時、ガイドのアフメットは、この嵐はまるで冬のようだ。明朝は３時には出発したいが、天候が悪ければ午前８～９時頃までは待機する。それでも回復せねば下山すると言う。重苦しい空気がテントの中を漂う。何も言う事なく自分のテントに戻り、シュラフに潜り込む。風と雪は強まるばかり。１１時頃用足しに外に出るが、若い頃は何でもなかった吹雪の中でのトイレはつらい。ありったけの防寒具を身に纏い、天候の回復を祈りつついつしか眠りに陥る。

翌25日午前２時頃目を覚ます。風の音が弱まったのでもしやと思い外に出る。昨夜のように遥か足下にドゥバジヤットの街明かりが見える。少し離れたテントでまだ寝ていたアフメットを起こしに行く。彼は天候が回復しないと読んでいたのだろう。私たちの会話で目をさましたのかチェコ、ドイツ、ポーランドの若者たちも出発の用意を始める。完全装備を身につけテントで待機。砂糖入りのまずいコーヒーを二杯飲んだ後、５時少し前に出発。もう薄明かりが差していたのでヘッドランプは不要。若者たちは空身になると強い。あっと言う間に追い抜かれてしまう。昨日遅く第二キャンプ地に着いた５０歳前後のポーランドの女性二人と同じペースで登って行く。が、彼女らはどんどんペースが落ちていく。アフメットはドイツ語でもう少し早く歩けないなら、第二キャンプに降りろと言う。女性たちは私に英語に通訳してくれというが辛くて、もう少し早く歩けとしか言えない。標高100mおきに標識があったが、4500m以上は風に飛ばされポールだけしか残っていなかった。ガスの上部奥深いところにわずかに太陽が見えてくる。先頭を歩くアフメットの後を必死についていく。アフメットは 25 年間に 100 回以上アララット山に登ったベテランのガイドである。昨夜の雪がガレ場の岩の隙間を埋め、登りやすくなっていたことも幸いし、4800mまで安定したペースで登行。ここから先はもう雪だけの世界なので少し登ってアイゼン装着。チェコ、ドイツ、ポーランドの若者たちが引き返してきてアイゼンをはずす。頂上の一角にはたどり着いたが風もきつく、濃いガスに視界も殆どゼロなので降りてきたという。彼らと別れて登り始めると、時折強い風がガスを吹き飛ばし、抜けるような青空をバックにした頂上の一角を目にすることが出来た。なだらかな雪の斜面は次第に傾斜がきつくなり、その先に台形状のピークが見えてきた。急に元気がわき出て、登りにリズムを取り戻す。クラストした雪面にアイゼンが心地よく効きはじめる。最後の急なスロープにたどり着いた時、登り直してきたチェコ、ドイツ、ポーランドの若者たちが再度追いついてきた。彼らとほぼ同時に頂上に立つ。午前９時５０分だった。アフメットと若者たち一人一人と喜びをかみしめるように互いに強く抱き合う。わずかな瞬間、ガスの切れ目から東側にアルメニアの平地の広がりを目にすることも出来た。30年前のアララット山との初対面、６年前のエレバンから眺めたアララットの頂き。ようやく今ここに立つことが出来たことを思い返すと涙がこぼれそうになる。しかし風のきつい頂きにいつまでも立っているわけにはいかない。１０時すぎに下山開始。4800mまで降りると頂上は再び濃いガスの中

に隠れてしまった。アイゼンをはずして、ガレ場にさしかかる頃、急に疲れが出てくる。しかし心配した心機能の低下や高度障害なども全く感じることなく頂上に立つことができたのだ。疲れた体にムチ打ち、第二キャンプを撤収して第一キャンプに下山。そのままエリ村まで下り続ける。途中からはクルドの若者が引く馬の背にまたがり、ようやく麓にたどりついたのは午後７時すぎ、沈む夕陽がアララットの頂き付近の雪面を赤く染める頃だった。

アララット山（5165m）頂上に立つ
ガイドのアフメットと私（右）

甲南山岳部ホームページのご案内

インターネットで甲南山岳部のホームページをご覧になったことがありますか？

ホームページの「掲示板」は会員相互の連絡に重宝で、近況はじめ山行のことや飲み会のこと、部室にたむろしていた頃のように情報が耳に入ってきます。

「アルバム」では会員の山行の様子や街での姿が見て取れます。懐かしい写真も寄せられます。

アドレスは

http://homepage2.nifty.com/konan-alpin/

何やら長いし面倒な、と言う方は「甲南山岳部」「甲南大学山岳部」で検索して下さい。

よくわからないなぁという方は、ご家族・お孫さんにお尋ねになるのも方法です。

新しいコミュニケーションが広がるかもしれません。

―随　想―

驢　　馬

飯田　　進　（昭38経）

驢馬のクソ　強き日差しに曝されて
　　風がはこびし　またその上に

三蔵法師が立ち寄ったことで有名なトルファン郊外の高昌故城 。殆どが頽れ、土崩れた広大な廃墟を、驢馬車が案内してくれる。道標は驢馬の糞。同じ道を行ったり来たりで、糞の道が出来ている。小さな荷車に幌を架けた驢馬車は四人も乗れば一杯である。御者は土産物屋も兼ねていて、ドッパ（ウイグル族のかぶる帽子）や色とりどりの刺繍をした小袋など、いろいろのものを売りつけてくる。日本円にして一個５００円程度のものだが素直に言い値で買う気にはなれない。そこで値切るのだが、御者も駆け引きがうまい。

いろいろの物の値段を聞きながら、ポケットから卓上計算機を取り出して、足したり引いたり架けたり割ったり、目の前で計算すると、当然彼らには計算が速くてついてこれない。”おまえさんも計算機で計算せんかい”とばかりせかすと、彼らは持っていないから、恨めしそうな目つきで、ただ首を振るだけである。それが付け目である。”この計算機があれば商売うんと楽になる。どうだ欲しいだろ”と言うと素直に”うん”とくる。

それでそこらの土産品を四つばかり手にとって、”これと交換しようか”と持ちかけると”四つじゃ多い”とくる。それであだこうだと交渉して、最初から欲しかったドッパと刺繍入りの小物袋とで交換することにした。卓上計算機は出がけに近所の安売り屋で一個百円で買ってきた物だから、これでよし、である。驢馬はそんなことお構いなしに、夏の日照りを受けながら、とことこと車を引いていた。

ここトルファンに限らず、タリム盆地を取り巻くオアシスでは、日常の運搬手段は概ね驢馬車である。小さな身体で結構な物を引っ張る。朝早く畑仕事に行く驢馬車には、農夫一家がわんさと乗っていて、御者は６，７才の可愛い顔した女の子。驢馬は文句も言わずに引いている。驢馬はおとなしい、木に繋がれればじっとそのまま。何時までも同じ姿勢で立ちつくしている。もっとも驢馬があぐらをかいたり、寝そべったりするわけはないのだが。

兎に角おとなしい。もの悲しい大きな黒い瞳でうつむき加減にたたずむ驢馬。それが時々驚くような大声で泣き叫ぶのである。普段の鬱憤をはらすが如く、腹の底から絞り上げるような、その都度あばら骨が浮き出て来る、まさに雄叫びである。

オアシスの朝は、コーランから始まる。月の出ていないオアシスの夜は暗い。まだ明けやらぬ頻闇のなか、コーランが響き、それに合わせるように驢馬の嘶きが聞こえる。やがて森の木々が薄闇の空の中に黒々としたシル

エットを浮かびあがらせ、やがて鶏が時を告げ、走行車の警笛が聞こえ、朝を迎える。驢馬は鶏より早起きなのである。

その驢馬が畑から逃げ出したのか、カラ車を引っ張ってコトコト歩いていた、が、よく見るとオッサンが荷台に仰向けに寝転がってうたた寝をしていた。驢馬はほっておくと、ネグラに帰る習性があるらしい。この習性でえらい目に遭ったこともあった。

ここタリム盆地の西端カシュガルの町を南に、パミール高原をひたすら車で走り、クンジェラブ峠を越えると、カラコルム山脈のまっただ中へ入っていく。カラコルム山中にも驢馬は沢山活躍している。但し運搬方法は車を引くのではなく、直接背負わせる。小さな驢馬でも結構背負う。トレッキングや登山でも結構活躍している。

我々がナンガパルバットの北尾根にある、ブルダール峰に行った帰り道のこと。ラキオト氷河をへツリながらタコット村まで降りてきた。ここからはラキオト谷と言う、世界で二番目に深い谷の中腹につけられた道幅２，３メートルのガタガタ道を１７キロ、インダス川に向かってジープで下ることになるのだが、この時途中崖崩れがあって、歩いて降りるはめになってしまった。ジープに乗ってれば早いが、怖い。まあ歩く方が怖くないからましか。と始めは良かったが、だんだんしんどくなってきた。それでも歩くしかないので、歩け歩けであった。行程の中程崖崩れの現場まで来たら、その先にジープが迎えに来ていた。やれやれである。こうなったらしんどいより怖い方を選んですこしでも楽をしようとするのが我々の特徴。早速乗ろうとしたが、トラブルが発生。原因はポーターへの賃金。

全行程１７キロで幾ら、の契約が、道半分で終わったので、賃金も半分。それでもめだした。侃々諤々口角泡をとばして目をつり上げてわめき合っている。これは時間が掛かりそうだ、ということで、我々だけ空身で夕暮れのラキオト谷を下山、ギルギットのホテルに先着した。八時頃到着したのだが、ガイドと荷物は大幅に遅れて、夜中の一時に到着。よほど長くもめたのか、と思ったら、そうではなく、もめ事はまもなく決着したのだが、荷物が一部見あたらず、探し回ったと言うことであった。原因は驢馬。

ながながともめている間に、驢馬君ネグラに帰ってしまった。それでタコット村まで取りに行って来たとのこと。お陰で眠いところを長々と待たされてしまった。

驢馬君の責任ではない。驢馬は忠実でよく働く。先般バルトロ氷河にトレッキングに行った折りも驢馬が活躍していた。バルトロ氷河は長い。突き当たりのコンコルディアまで歩いて一週間。高低差１５００メートル。長いけれど登りは緩い、楽なものよ。そう思って行ったら、えらい思い違いであった。以前北部のチャプルサン川を遡った際、河原をのんびりと歩けた。ミンタカ峠へのキリック川もそうであった。だがバルトロは違っていた。川をへつって行くのである。従って小さなアップダウンの連続、それに何と言っても３０００メートルを超えているから、途中のパユー（３７００M）までの四日間しんどい旅で

あった。

だもんで､パユーから始まる氷河の登りは、それはそれはきついものでした。氷河末端は氷がずたずたに裂けて三角波の様にでこぼこしていて、１０M前後のアップダウンを繰り返し繰り返し、殆どコンコルディアまで続いていたのである。

そこを驢馬たちは荷物を背に行き来していた｡バルトロ氷河は軍事基地が点在していて、驢馬はその荷役に使われていた。そんなしんどい旅も終わりに近づき、コラホンまで降りてきた。明日は終着アスコーレ。と言うことで、のんびりと柳の下にシートを敷いて、この時のために、大事に大事にリュックの奥に暖めていた持参の焼酎を、ビスケットをアテにチビリチビリとやっていた。コラホンはビアフォ氷河の押し出す巨大なモレーンの裾にあり、ローズブッシュや柳の木に囲まれた軍の施設もあるキャンプ地で、驢馬も飼育されていた。その驢馬が三匹、すぐ傍らに来て餌を食んでいた。

白の雌驢馬と若い雄驢馬それとまだ子供離れしていないのと、三匹。彼らものんびりと草を食んでいたのだが、若驢馬が白い雌驢馬に懸想した。このねえちゃん驢馬なかなかの美人とお見受けした｡それが目の前で裸で(当たり前だが)尻を若に向けているのだから､若は我慢が出来なくなったのだろう。姉ちゃんええやろ、頼む！とばかりに挑んでいった。が、姉ちゃん驢馬はいやいやして、すうっと前に出てはぐらかしたしまった。懲りずに若が挑む。若はもよおしていた。一物がにゅうっと出てきた。本気である。にゅうと出た一物は尺ものであった。見ている人間様の持ち物など問題外、立派なもんである。それを正眼に構えて、姉ちゃん！とばかり挑んだが、この姉ちゃん、百戦錬磨の強者か、それとも美人を鼻にかけた性悪か、尻尾を股ぐらに挟んで拒み、さらに迫る若に、なんと後ろ蹴りを食らわしたのである。若の顔面に一発、ポカッという音が我々にも聞こえた。これには若も参った。出た物も引っ込んでしまった。

諦めて草を食みだした、のだが。さすが若い。再びもよおして挑み掛かったのである。が、姉ちゃん底意地が悪い。再び後ろ蹴り。これがまともに決まって、ついにダウン。哀れ若驢馬はブッシュのなかへとすごすごと消えていったのであります。寸劇は終わった。

再び焼酎で歓談。長閑な一時が過ぎていった。そして一時の後、あの若驢馬が泣きながらブッシュから走り出てきた｡その泣き声は、あの腹の底から絞り出すような雄叫びではなかった。小さな子供が母親に買い物をねだって泣く、甘えたような駄々をこねたような、そのような泣き声であった。よほど悔しかったのだろう。その気持ちよく分かるのだが、テントのそばで泣いてくれるな、五月蠅くてしょうがない｡だがこの驢馬の気持ちは､我々の想像を上回っていた。夜中中テントの周りでわあわあ泣きじゃくっていたのである。テメエが振られたのは俺達のせいじゃないちゅうのに。

お陰で寝不足。高い見物料になりました。

— 会員短信 —

名誉会員・顧 問

山本 三郎 （名誉会員）

山岳会の集まりを心からお悦び申し上げます。最近歩くことが大儀になり高齢者の優待パスでバスや地下鉄を利用することが多く、往年のように山やスキーにでかける元気がなくなり、昼寝の日々が多く、後悔しています。皆さんによろしく

昔の人たちと会うことが、最近とても懐かしく楽しく思うようになりました。孤りでは生きていけない、仲間が増えることが少なくなっていくばかりの老人となり、どこにでもスケジュールが許せば参加するよう努力しています。元気です。楽しみにしています。

平井 一正 （名誉会員）

その頃私は東チベットのカンリガルポ山群の最高峰ルオニイ峰(6805m)に挑んでいます。今年の異常気象が、吉となるように祈っています。出発は10月2日、帰国は11月20日ごろです。

昨年、東チベット ルオニイ峰(6805m)に行きましたが天候悪く、山もむずかしく登頂断念いたしました。甲南山岳会の発展をお祈りいたします。

神戸 謙司 （中高山岳部顧問）

中高顧問の神戸です。いつも中高山岳部、心にかけていただきましてありがとうございます。

2003（平成15）年秋「木曽福島集会出欠」と2004（平成16）年春「**総会出欠**」に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、**秋は明朝、春はゴシック**で区別しています。

旧 制 高 校

関 集三 （旧10理）

本年、卒寿を迎えました。卒業時の山岳部クラスメイト、伊藤 新一・佐山 好弘・山口 省太郎の3君は他界され一人ぼっちです。阪大理卒後66年になりました。もう、山岳会に先輩もおられなく淋しいです。毎月一回の通院、毎週一回のリハビリで年令相応の体調を保つ努力しており、毎月一回の上京の日本学士院例会出席も19年目となりました。

佐野 源一 （旧10）

又々膀胱がんが再発、7月24日に2000年の発病以来4回目の手術を受け、8月1日退院しました。何故こう度々再発するのか。スキーは無論ゴルフも控えて極めてつつましい生活をしているのですが、それに腰痛で週3回リハビリに通っています。そんな訳で申し訳有りませんが欠席です。

少し無理すると膀胱癌再発の恐れがあり腰痛も有るので、大阪・神戸に行くのも控え、出来るだけ毎日近所を1～2キロ程度散歩する位にしています。特に夜間は無理なので残念ですが欠席いたします。100才になってもスキーを楽しんでいる人も居るのに10以上若いくせに山にもスキーにも行けなくなるなんて悲しい限りです。末筆乍らご盛会を祈ります。

山岡 静三郎 （旧11理）

ご案内有難う御座いました。目下私は表記の病院に入院中で欠席いたします。

奥山 正雄 （旧12文）

いつもお世話になっております。小生は大変元気ですが、家内が体調をくずしておりますの

で残念乍ら外出はむずかしく今回の集会には出席できません。ご出席の皆様に宜しくお伝えください。

86 才になりました。昨年妻を亡くし目下独り暮らしですが元気で何とかやっています。香月さんや福田さんの慰霊祭なので、ロックガーデンに行きたいのですが、残念ながら行けません。

國府 雄次郎 （旧 12 理）

山岳会名簿中の小生名はだんだん左上隅に押しやられるようになりました。しかし、行きたい所は未だいっぱい在り（山岳会員の性）、その気力は在るつもりですが（無論交通機関で）体力が許すかどうか？

山口 雅也 （旧 13 理）

心房細動による不整脈があるためドクターより付き添いなしで独りでの遠出はなるべく避けるようにと言われており、残念ながら欠席いたします。皆様によろしく

長島監督と同じ心房細動による不整脈があり、遠出するのがオックウで残念ながら欠席いたします。皆様によろしく

武田 六郎 （旧 13 理）

ご盛会を祈ります。

腰痛のため欠席いたします。御一同様に宜しくお願い申し上げます。

赤松 二郎 （旧 14 理）

84 才ともなれば動作もにぶくシャッキとしなくなりました。60 年前海軍で戦争をしていた頃は元気よかったなーと思い返しております。然し再び戦をしてはなりませぬ。

私も 84 才の爺となり山は遠くにありて眺むるものとなってきました。身近い者の訃報を聞くばかりです。

鷲尾 顕 （旧 15 文）

ご案内有難うございました。出席出来ないのが残念の極み、息災の日々を過ごしています。

体力伴わず慰霊祭には参加出来ず残念の極みです。事務方のご尽力に感謝します。

伊藤 文三 （旧 15 文）

肺がんの手術をしてはや 2 年なんとか生きています。秋の木曽駒高原まだ行ったことなく、一度は参加したく思っていますが、毎年 10 月 10 日前後は神戸へ行く事にしていますので、残念ながら欠席。参加の諸兄によろしくお伝え下さい。

レリーフ設置場所まで行けそうもありませんが、ともかく慰霊祭参加します。

福田 泰次 （旧 15 理）

元気にやっています。木曽駒では東京から出かけるには不便になったので失礼させていただきます。

小川 守正 （旧 17 理）

秋の集会案内戴き有難うございます。出席のつもりですが、その時にならぬと分かりません。80 歳までは元気で、衰えた老人をいささか軽蔑していたのですが、81 才を境にそれが我が身となってしまいました。何とかもう一度集会に出られるように回復の努力中です。甲南病院の患者兼経営者として一年。経営は奇跡の起死回生しましたが私はまだです。（60 才を超えた方は是非年一度検診においでください。割引します『コマーシャル』）

久しぶりに皆様のお顔拝見すること楽しみにしております。小生多病老衰の集、引退しようと思ってましたが、理事長急逝され、甲南病院臨時理事長代理となり、3 つの銀行とゴールドマンサックスと 5 つ巴の激戦中です。

福井 實 （旧 17 理）

先ずは病気もせず、活動しています。当日、

海軍のＯＢ会(先約)で欠席いたします。皆様の御活躍、山岳会のインターネットの掲示板で拝見して居ります。

無事過して居ります。4/25(日)芦屋川には参りますが、その日の調子によって、キャッスルへ行ければなんとか(レリーフ銘鈑取付)行きたいと思って居ります。よろしく。

津田 昌男 (旧 18 理)

今年 81 才になりました。先にお知らせしたと思いますが、ここ数年の間パーキンソン病で、又昨年 10 月食道に悪性腫瘍が見つかりその治療のため 11 月から 2 月まで入院、体力は回復せず外出も妻のつきそいでなければ思うようにならず。御出席の皆様によろしく。

パーキンソン病の上 一昨年の暮 食道に悪性の腫瘍が見つかり、その治療のため 3 ヶ月入院いたしました。今は落着いていますが、外出には常に家内につきあってもらっています。体力的に神戸まで行く事が出来ません。ご出席の皆様によろしく。

茂木 光隆 (旧 18 理)

いつもご案内有難うございます。乗鞍から木曽駒に移ってから、一度も参加できないのは残念ですが、病気の方も根気よくつきあっていれば、いつかきっと歩ける日も戻ってくると期待しています。皆様のご健勝を祈ります。

小生血液の病気に加え、今年になってから急性膀胱炎などで入院 2 回、今週末に漸く退院という状態で、とても遠出は出来ませんので失礼します。福田先輩の「送る会」にも参加できず残念でした。ご盛会と皆様のご健勝を祈ります。

2003 (平成 15) 年秋「木曽福島集会出欠」と 2004 (平成 16) 年春**「総会出欠」**に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、**秋は明朝、春はゴシック**で区別しています。

国府 三郎 (旧 18 理)

ご案内有難く拝受しました。脳身共にダンダン怪しくなって来ました。それでも質問されると「マアマアです」と返答しています。元の勤務先の OB 歩行会にはできるだけ参加しています。皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

お世話様です。福田先輩が他界され淋しくなりました。昨年 12 月に集まったのが最後でした。先輩には会える機会には、なるべくお会いしとかんとイカンと思います。そー云いながら不参加なのは矛盾ですが、心電図が乱れたからでして大事をとった次第です。失礼します。

岡橋 節三 (旧 19 文)

昨年秋から体調を崩し、延べ 100 日あまり入院しました。退院後体力の回復に努めていますが、まだ本調子ではありません。皆様によろしくお伝えください。

体力がもう一つというところで遠出は疲れるので失礼します。皆様に宜しくお伝え下さい。

徳末 省三 (旧 21 理)

来年は出席します。

丸山 照夫 (旧 25 文)

体の方がだんだん老化しておりまして、平坦な道(例えば六甲のゴルフ道)等をゆっくり歩いております。

旧制高等学校の皆様に宜しくお伝え下さい。

伊藤 五介 (旧 26 文修)

幹事さんご苦労様です。残念ながら欠席いたします。小生マアマア元気でやっております。

フクデンさん「偲ぶ会」に出席しました。大変盛会で故人のお人柄にあらためて感心させられました。

新 制 高 校

中井 久夫 （新高 S27）

甲南大学で、神戸大学医学部精神科退官後、文学部に移り、1997 年春から勤めていましたが、2004 年春に第二の退任をいたすことになりました。『甲南Ｔｏｄａｙ』の裏表紙に『鳩杖』という小文を書いております。最近、陛下と同じ所を切りました。皆様お大事に！

神戸大学を '97 年に退職し、甲南大学に行かせていただきました。ちょうど人間精学科創設、文部省学術フロンティア計画指導校となる、18 号館創建後と重要な時期の末席に連なることができたのは幸せでしたし、大学院生には「かわいがって」もらいましたが、陛下と同じ手術が一寸こじれて迷惑をかけました。3 月で甲南も無事退職ですが「鳩杖」は書きためた分がまだ載るかもしれません。皆様のご健勝を祈ります。

米山 悦朗 （新高 S29）

アフガンの取材で取り込み中です。ちょっと出られません。

北方 龍一 （新高 S30）

毎日小野市の共進牧場で設備の改善とレストランミルカーズの経営にたずさわっております。大変健康的で元気にやっております。又皆様にご案内を差し上げます。

平井 吉夫 （新高 S32）

なにやら年をとるほど忙しくなってきました。よいことなのか、悪いことなのか・・・・・

塩田 邦博 （新高 S32）

7 月 3 日腰椎の 13 時間の手術をし、それは成功しました。目下養生中です。

竹原 祐爾 （新高 S33）

御無沙汰しております。７月に白山に、８月木曽駒ケ岳に登りました。皆様に宜しくお伝え下さい。

ご案内ありがとうございます。皆様に宜しくお伝えください。

永島 孝男 （新高 S37）

サラリーマン生活の最終コーナーとなり、完全燃焼をめざし日々奮闘中です。当日商用のため欠席させて頂きます。

商用の為欠席致します。（東京在勤中）

川村 静治 （新高 S40）

6 月はじめて家族で、尾瀬の水芭蕉を見に行きました。大清水から三平峠の登りは結構きつく、最後の方では木道に厚く積もっている残雪に足を取られたり、踏み抜いたり結構なアルバイトでした。でも、水芭蕉・ザゼンソウ・ショウジョウバカマ・・・・の花とブナの新緑と湧き水の味は格別でした。

佐野 英治 （新高 S45）

㈱ 高島屋京都店 外商部

福田 裕久 （新高 S45）

白内障で右目を手術後、山には行けておりません。又今年か来年早々に左目も手術予定で、当分の間山にも行けそうにもありません。

前回で右目の白内障の手術で、今回は左目の白内障の手術ということで、かなり長い間山歩きをしておりません。全快後に少しづつ近辺の山歩きをしようかなと思っております。

松下 弘幸 （新高 S54）

相変わらずアメリカベースで年中あちこち行っております。皆様にくれぐれもよろしくお伝え下さい。

佐野 善史 （新高 S61）

在 メキシコシティ

桧垣 公平 （新高 H11）

新入社員になってようやく半年！やっと採用

が取れこの 10 月より正社員の身となりました。皆様、お元気で！

大　学

小原 耕治　(大 31 経)

秋の集会楽しみにしております。幹事さんにはお世話になりますが宜しく。小生、毎日元気にしております。特に今年は Tigers が元気なので浮かれています。

古希を過ぎて外目にはいざ知らず、自分では至極元気のつもりで毎日を過して居ります。幹事様には毎度の事乍ら御苦労様、お世話に相成ります。感謝！

阿部 純一　(大 31 経)

今年 70 才になった記念として立山の 3015m に登ってきました。まだまだ元気です。

先日 20 年ぶりで雪彦山(姫路の北西)へ登ってきました。岩山は昔のままですが、最近は訪れる人も少ないようです。慰霊祭は所用のため欠席します。

砂川 彰雄　(大 32 経)

まずまず元気にしております。楽しい一夜に期待しています。

元気にしています。千葉の田舎と長野の田舎でほぼ半々の生活を送っています。春から初冬にかけては、高遠が主になりますので、お立ち寄りください。盛会をお祈り致します。

宮本 侑　(大 32 経)

元気にしています。当日早くから計画していた旅行に行きますので。

2003（平成 15）年秋「木曽福島集会出欠」と 2004（平成 16）年春**「総会出欠」**に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、**秋は明朝**、**春はゴシック**で区別しています。

散歩がてら岡本梅林・ホクラ神社あたりに行きますが、どうしてもバットレスへの行き方が思い出されず年を感じます。

柳澤 正　(大 32 経)

いつものこと乍ら、お世話役有難うございます。幸いにして日々元気に過ごして居ります。晴耕雨読と謂へば格好よいですが、無為徒食の感あり、それだけに今回の会合を楽しみにして居ります。

例年のこと乍ら、幹事役ご苦労様、深謝して居ります。勤めを辞めてから 4 年余、幸い元気で週 3~4 は出歩き、行く所があり かつ行ける間は幸せと感謝しながら年金生活を Enjoy しています。

柏 秀樹　(大 32 経)

ご案内ありがとうございます。13 日(月)所用があり欠席いたします。ご盛会をお祈りいたします。

鈴木 頼正　(大 33 経)

バルトロ氷河・K2 トレッキング頑張って行って来ました。次回はヨーロッパ・ニュージーランド・カナダのトレッキングを考えています。いつもお世話をかけます。よろしくお願致します。

昨年のカラコルムバルトロ氷河をもう一度行ってみたいと思っています。しかしアプローチが長いので新しいルートの出現を期待しています。マレーシアのキナバルも関空から直行便が出来 登山は勿論植物も楽しめるので是非と考えています。

田邉 潤　(大 34 経)

カラコルム・バルトロトレッキングの疲れがまだ抜けきれずにおります。私の山旅の体験の中で最も厳しいものでした。それだけに印象も最も強烈でした。終わってみれば、私の人生の山旅も終わってしまったような気がする今日此の頃です。

幹事の皆様には大変ご苦労をおかけしております。返事が遅くなって申し訳ないのですが、今年も欠席です。スキーも3回・5日間しか滑れない有様で、高遠の仕事もいっぱいたまっていますので、暖かくなった、これからを精一杯戸外で働けることを楽しみにしていますが、はたしてどうなることやら。

美田 靖夫 （大35経）

会員の皆様お変わりないと思います。小生 9 月下旬より 11 月上旬まで丹波で山ごもりの為欠席させていただきます。いつもお世話ありがとうございます。

いつもお世話ありがとう。

鳥居 威男 （大35経）

元気で毎日を有意義に過ごしております。孫も3人となり忙しくなりました。山にも力を入れています。左肩の調子が悪く悩んでいます。皆様とお会い出来ることを楽しみにしております。幹事様ご苦労様。

元気にしております。近くの山へハイキング、今年は又岐阜・長野方面にトレッキングにと考えております。

伊丹 弘忠 （大35年経）

幹事さんいつもお世話になります。集会には楽しみに出席します。

元気にしておりますが、最近は体力の衰えを感じます。楽なハイキングは続けていきたいと思います。

芦田 匡平 （大35理）

この時期、父の命日・母の卒寿と何かとややこしく、欠席です。皆様に宜しくお伝え下さい。

1日目に出ると、2日目の朝には目が覚めぬ可能性大なので、2日目だけの出席とします。但し、2日目豪雨100%の予報の場合は、1日目に出ます。

牧野 宏 （大36経）

同期のトリヤン(鳥越 哲君)のご長女の婚礼がありますので、残念ながら欠席致します。(黒田庄のお寺の大黒さんとして嫁がれます)

藤安 賢一 （大36経）

薬を飲みながらも裏山(ヘルマンハイツ)から仏舎利の横を通って打越山を遠廻りするようにぐるっと歩き、足腰を強化しています。一週間に2～3回は、このハイキングを楽しみに、平素は夕刻に住吉川を散歩。しかし宿泊はなかなかです。

昨年の夏までは一週間に一度か二度、風吹岩から横池・雨ｶﾞ峠まで登っていましたが、10 月頃からは、ほとんど毎日平地歩行(5km 程)になり横池近辺へは時々行く事になっています。又体力維持のため、腹筋・腕立て体操等でトレーニングしています。1日が短く感じられ、すぐ夜が来てしまいます。

越田 和男 （大36 理）

この 8 月は、先日米山バブさんと東京都の最高峰雲取山に１泊２日。下旬には会社の仲間と瑞牆山(ﾐｽﾞｶﾞｷﾔﾏ)を楽しみます。10 月にはブータン行の予定あり。目下、最近出たHermannBuhlの伝記を JAC 会報に紹介記事を書くために読んでいます

6 月にドロミテをのぞいてこようかと考えてます。相変わらずの山見遊山。腰痛完治はあきらめ、だましだまし歩ける様なところを選んで楽しむことにしています。

廣瀬 健三 （大36経）

何時もお世話様です。6 月末に事務所を自宅へ撤収しました。色々と整理を思い立ち、古いゴルフクラブをまず処分と迷っていましたら、錆びついたピッケルが出て来ました。これはそうは参らず篤と見直していたら、SAPPORO BERGHEIL K.I.W.との刻印有り(K.I.W とは何かしら)六甲高山岳部ＯＢの義兄から貰ったものです。皆様にヨロシクお伝え下さい。

何時もお世話様です有難う。昨年の香月名誉会長の

ご逝去につぎ福田 泰次 先輩が逝れましたが、フクデンさんは昔々S36（’61）年大卒組が大学 3 年の時の 5 月合宿にご参加頂きました。不帰第一峰頂上直下のブッシュの中をグイグイと登られた場面を思い出します。昨年末に山関連の本/資料をよく見られた由、つつしんで御悔み申し上げます。

大関 和夫 （大 37 経）

夏なのに寒い年でした。妙高の平井山荘ではストーブをたく毎日でした。夏休みの妙高も、人が少なくさびしいものでした。山は静かで、のんびりできました。センキチさんと出かけた馬曲温泉もすいていました。

2 月のスキー合宿を体調不良で参加出来ず、少し静かにして生活しています。ロックガーデンの歩きに耐えられそうになく、失礼します。

柏木 宏文 （大 37 経）

柏木は平成 2 年事故に合い、以来重度身障となり、現在自宅療養を致しております。皆様のご健勝 ご多幸をそして会が益々発展致します様にお祈り申し上げます。

柏木 内

飯田 進 （大 38 経）

バルトロ氷河で細菌性の鼻炎にかかり発熱、毎日まれに見る晴天が続いているのに下山。無念無念のトレッキングでした。まだボーッとしています

返事遅れて申し訳ありません。総会・慰霊祭共出席させていただきます。宜しくお願いいたします。

二谷 和成 （大 38 経）

あちこちの年よりグループと近郊の低山を一緒に歩いています。一日 4～5 時間歩くのが限度です。皆様とお会いできるのを楽しみにしています。

いつもお世話になります。月 2～3 日近郊の低山をあちこちの仲間と歩いています。どうも膝の調子がよくありませんが出来るだけ山行には参加いたします。

福田 信三 （大 39 理）

幹事いつも御苦労様です。九州より 10/11 帰着 10/15 より北京へ出張となり、準備要り、今回は欠席させていただきます。元気な方々のような活動は無理ですが、遠くから眺める主義に徹しています。11 月にはマナスルトレッキングを予定し今特訓中です。では皆様によろしく。

総会は先約で欠席ですが慰霊祭は出席いたします。幹事 御苦労様です。

安井 正 （大 39 経）

母の 49 日にあたりますので欠席致します。盛会を祈ってます。

森本 全彦 （大 39 法）

この初秋 9/19～9/23 にかけて一度は行かねばと思っておりました、白馬岳～親不知迄の山並みを歩いてきました。次は、下の廊下の黒部ダム～櫛平迄の水平道を歩いてみたいと思っています。山に登られるときは、声をかけて下さい。

事務局の方々、お世話いただきありがとうございます。甲南ホームページを楽しみにしております。当方いたって元気で山登りに励んでおり、一部の方からお叱りを受けたりしております。この 5 月連休には屋久島に行こうかと計画中です。どなたか御同行お願い致します。

武田 雄三 （大 39 経）

世話役の諸兄に多謝。

2003（平成 15）年秋「木曽福島集会出欠」と 2004（平成 16）年春**「総会出欠」**に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、**秋は明朝、春はゴシック**で区別しています。

鵜木 洋 （大 40 文）

昨年夏より近県の山へ日曜日毎に登って 連続 46 回元気です。その内雪山へ 7 回。この年で輪カン履いてラッセルするなど思いもしなかった。この慰霊祭へ残り何回出席できるか心細い気持ちになりました。

藤原 邦彦 （大 40 経）

夏バテで体調不良が続いて居ります。

奥山 正紀 （大 40 法）

家内の 49 日です。

井本 洋 （大 40 理）

10 月に南京で農業機械の展示会があり、訪中する予定です。皆様によろしくお伝え下さい。

皆様にお出合して、元気を頂きたいと思います。

伊丹 徳行 （大 40 法）

幹事さんご苦労さまです。今回は欠席させていただきます。9/26 横山君の散骨にすこしだけ(JR 富山駅⇒地鉄立山駅)同行しました。全行程同行します鵜木先輩・塩崎君ご苦労さまです。カンさんも室堂から同行されるとの事。昭和 38 年夏合宿で東大谷で岩登りした 3 人の内 ガス・横山が先に逝ってしまいました。残った 1 人は 2 人分長生きしたいと思います。

1/3 は仕事 1/3 は旅行やハイキング 1/3 はボケッとしています。先日「ホッチン」に電話をしましたら「今度は誰が亡くなられたのか」と言われました。長生きしましょう。3/5～3/8 北海道 3/11～3/14 九州へ行って来ました。次は・・・？

柏 敏明 （大 41 経）

返事が遅れて申し訳ありません。今年は所用があり残念ながら参加できません。ご盛会を祈ります。今日(9/28)安井君のご母堂の四十九日の法要に、同期の連中と共に出席してきました。99 歳の天寿を全うされたお母様には朝・昼・晩と学校よりも多く安井宅に寄せて頂きお世話になったものです。心から感謝と共にご冥福をお祈りします。合掌

若者は一日が短く、一年が長い。年寄りは一日が長く、一年が短いと云う言葉通り、もう山岳会総会と云った感じですね。委員の皆様 何時もお世話をいただき有難うございます。山・沢・スキー・ヨットへの気力はあるのですが、どうも体力の衰えが・・・。4/10 の大関先輩宅での花見会に出席させていただくのを楽しみにしています。

井上 徹 （大 41 営）

仕事の為参加できません。皆様によろしくお伝え下さい。

いつもＨＰを楽しみにのぞかせていただいております。特に同期の塩崎君の活躍ぶりというか、行動力にはいつも感心させられています。当方、日頃の運動不足もあり、足腰がめっきり弱くなってしまいましただけに・・・。塩さんどうなってんの？という感じです。皆様によろしく！！

森岡 宏光 （大 43 理）

いつも欠席ですみません。
８月 13～８月 16 夏山山行(妻と２人で) ８月 13 日(水)八甲田山大岳(1,585m)８月 14 日(木)八幡平(1,613m)８月 15 日(金)八幡平～大深山～松川温泉 ８月 16 日(土)岩手山(2,038m)8/15 のみ雨他は天候に恵まれました。以上です。

いつもお世話になっております。H16. 3月20日(土) S43 年卒の山岳部メンバー4 人(国分・頼富・佐崎・森岡)が卒業後初めて高槻の佐崎氏のお店に集まって中華料理を食べながら楽しい時間をすごしました。

國分 廣昭 （大 43 経）

今年も参加できません。来年こそはと思っています。

とりあえず元気です。

頼富 信輔 （大 43 法）

ご案内ありがとうございます。今回も残念乍他の行

事と重なり出席できません。先日、卒業以来はじめて同期 4 人(国分・森岡・佐崎・頼富)が集まりました。みんな年をとりましたネ。皆様によろしくお伝えください。

石原 浩二 (大 44 理)
いつもご苦労さまです。

関係者の方々には、いつも感謝しております。時々山に登っています。

岸田 昌雄 (大 44 文)
貧乏暇無！！いつも勝手で申し訳ありません。皆様によろしくお伝え下さい。

赤田 友則 (大 44 理)
熊野の社有林に時々行っています。わたら瀬温泉は露天風呂がいいですよ。(TEL 0735-42-1185)。10/15 からマレーシアに出張します。キナバル山に(4218m)に登れればと思っています。欠席しますが皆さんによろしく。

当日年度会議で出席できません。皆様によろしくお伝え下さい。3 月中国 南昌に行きました。ローサンに登りました。登山路の整備はりっぱでした。よい写真が撮れました。

矢吹 操 (大 45 理)
元気です。

元気です。会社の休みが日・祝しかありません。晴れている時は、武庫川の河川敷をジョギングしています。

南里 章二 (大 45 理)
御世話役、いつもながら御苦労様です。この時期は学校行事と重なることが多く、毎年の不義理をお許しください。夏はイルシャド峠まで行き、ワハン回廊を眺めてきました。ペシャワルよりカイバル峠を越えてカブールまで行ってきました。このあたりを巡って、面白い計画を考えてみたいと思っています。

拙著「全世界紀行」の出版に際し山岳会の皆様方の多大な御協力に心より感謝致します。おかげ様でほぼ完売致しました。4 月からはじまるカルチァーセンター講演のネタ集めに、明日(3 月 20 日)より 10 日間、東南アジアを旅してきます。

山本 真博 (大 48 理)
御苦労様です。

村田 信一 (大 50 経)
甲南A. Cのホームページは、よく見ております。皆さんお元気なご様子。当方職場の異動や、家族の世話でしばらく出掛けていませんでしたが、夏休みに新穂高に行き、景色を満喫しました。山はいいですね。

高橋 けい子 (大 50 文)
遅くなって申し訳ありません。「秋の集会のご案内」はこれからも出席不可能と思いますので、もったいないので、大変ではなかったら、今後いただかなくてもよろしいかと・・・と存じます。ご検討ください。よろしくお願い致します。
★明日 10/5 ポチやイモコたちとヒナコのお墓へいきます。

4 月初め三男(他の大学生ですが)がビラ配りに甲南大学に行った時「山岳部が新入部員獲得に頑張ってたよ！」と申しておりました。とても嬉しく思いましたが、いかがだったでしょうか？

松下 哲夫 (大 52 理)
申し訳ありませんが、欠席させて頂きます。

渋谷 一正 (大 51 営)
若い頃、ゆったり楽しみ過ぎたせいか、年中無休状態です。

2003 (平成 15) 年秋「木曽福島集会出欠」と 2004 (平成 16) 年春**「総会出欠」**に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、**秋は明朝**、**春はゴシック**で区別しています。

大柳 香代子 （大51法）

とりあえず元気でおります。

大森 雅宏 （大53文）

山嶽寮の編集が終わりました。パソコンがなければ全部印刷屋さん任せでしょうが自分で作ってしまえば安くつくという理由で今年もせこせこ機械に向かいました。不出来はいくつもありますが、それはそれ。夏休みの宿題を提出した小学生の気分です。木曽福島でお目にかかります。

住友 健時 （大55法）

今年1月に引越しました。忙しくて部屋も片付かず、どこにも遊びに行けずストレスがたまってます。

子午線の真上に住んでいます。

要 裕晶 （大55営）

4月から大阪勤務になります。総会で皆様にお会いできますことを楽しみにしております。

川野 幸彦 （大56理）

この7/1より単身で高崎に転勤になりました。群馬県の夏は、非常に暑くなりますが、今年は冷夏のため快適です。秋の集会には参加します。皆さんにお会い出来ることを楽しみにしております。今年の集会は、12日(日)13日(月)なんですね。11日(土)にはどこか沢に入るのですか。

今冬の妙高・栂池と楽しく過ごさせて頂きました。相変わらず皆様が活発なので驚いています。さて、山岳会総会は今年も不参加です。申し訳ありません。皆様によろしくお伝え下さい。それから井上さん・山本さん・大森さんいつも御連絡頂きありがとうございます。

今井 啓介 （大56経）

昨年はシャモニー・ガルミッシュヤギャツビューエルでスキーを楽しみましたが、あまりにも奔放に休み過ぎたのと、突然仕事が忙しくなったので、今年はヨーロッパにスキーに行けそうにありません。

山本 恵昭 （大56理）

山スキー・山菜・沢登・キノコ狩りと四季おりおりの自然を楽しんいます。

八木 健 （大58経）

御無沙汰して申し訳ありません。レリーフ銘板のお名前を見て驚いている次第です。遅くなりましたが皆様のご冥福をお祈り申し上げます。慰霊祭には参加したいと思っています。皆様によろしくお伝え下さい。

西名 俊英 （大61理）

いつも連絡ありがとうございます。この4月に引越し住所が変わっています。

いつもご案内ありがとうございます。この一年は、転居・結婚・女子誕生とあわただしく過ごしました。山は丹沢大山・屋久島ぐらいにとどまっています。

吉川 寛 （大H5経）

残念ですが仕事の都合上参加できません。本年5月に結婚し下記住所に転居致しました。何卒よろしくお願い致します。感謝

阿部 康彦 （大H6法）

引越ししました。

に移りました。

久々に八ヶ岳に行きました。2/16～2/19 で阿弥陀北稜に初心者を連れての山行です。取り付きまでトレースがわからず膝までラッセル。学生時代より深い雪でした。特に難しい所もなく、快適に登り下ってきました。とは言え約 10 年ぶりの冬山。楽しかったですが膝は関節痛・太腿は筋肉痛で体はボロボロでした。卒業してはや 10 年体はやっぱり老化していたみたいです。一緒に靴も割れ老化していたみたいです。

鷹取 祥史 （大H7 文）
住所が変更しています。

松成 健 （大H8 文）
転職&転居致しました。

勤務先：ｸｲﾝﾀｲﾙｽﾞ・ﾄﾗﾝｽﾅｼｮﾅﾙ・ｼﾞｬﾊﾟﾝ㈱
小倉にお立ち寄りの際は是非ご一報下さい。

橋田 豊彦 （大H12 経）
失礼しております。次回神戸等で会がありましたら参加したく思っています。現在鍼灸・指圧学校の 3 年であります

ご多忙中ご連絡ありがとうございます。申し訳ございませんが当日、都合つかず欠席させて頂きます。今年、鍼・灸・指圧療法の専門学校を卒業致しました。今後は実際の経験を通じ、自分自身をも含めたバランスある健全さを求め進みたく思っております。
合掌

2003（平成 15）年秋「木曽福島集会出欠」と 2004（平成 16）年春「総会出欠」に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、秋は明朝、春はゴシックで区別しています。

物故会員 ご遺族からのお便り

福田仲子様

この度はロックガーデンの慰霊祭にお招き頂きまして誠に有難うございました。行き届いたお心づかいで往きも帰りもお車にのせて頂き、あとは皆様がつききりでお助け下さいましたお陰で無事に念願を果すことが出来ました。故人の思いのこもったレリーフや銘板を私自身の目でたしかめたいばかりに八十才という年齢も忘れて参加させて頂きましたが、まさかあのように皆々様に御迷惑をおかけする事になりますとは予想もいたして居りませず本當に申譯なく恐縮いたして居ります。

でも甲南山岳会の雰囲氣のあたゝかさが何より嬉しく故人の学生時分のお話など聞かせて頂きまして福田は皆様のお蔭で本当に幸せな「山の人生」を過させて頂いたのだと改めて感激いたしました。孫達もはじめて山登りを体験いたし祖父の山への思いが少しは理解出来ましたのかとても喜んで居りました。

思いがけなく香月様の御遺族ともお目にかかる事が出来まして、これも何かのお引き合せかと嬉しく存じました。無事、葉山まで帰りまして故人の遺影に報告して共に幸せを喜び皆々様の御厚情に改めて感謝いたしました。山道を歩いたのは小学校以来の事で年老いてから望外の体験が出来ましたこと、あつく御礼申し上げます。

何とぞ会員の皆々様にくれぐれもよろしくと私共の感謝とお手数をかけましたおわびとをお伝え頂きたく存じます。

新緑の好季節ながら不順な日が多うございます故御自愛下さいますよう。先ずはお礼まで申し上げます。

荒地山で

左から　柴崎様　福田様　伊藤文三氏

柴崎慶子様

謹んで一筆申し上げます。この度は慰霊祭にお招き頂きまして誠に有難うございました。今年は好天に恵まれ風薫る中会長様と会員の皆様方のお力で無事ロックガーデン　ブラック岩のレリーフのもとに福田様横山様と御一緒に香月の父を眠らせて戴き心より感謝申し上げます。慰霊祭では山の恵みの中で山を愛して来られた温情あふれる甲南山岳会の方々に感銘を受け胸が一杯になっておりました。ひとえに武田会長様のお陰と深謝申し上げます。

武田会長様には終始過分なお心遣いを賜りまして誠に有難うございました。思いもかけず福田様のすてきなご令室様ともお出会いをさせていただき、道中は福田様と私の足元をお気遣い頂きご親切にお助け下さいましたお陰で待望のブラック岩まで登る事が叶い、レリーフの銘板を拝ませていただけましたことを有難く思っております。11 年前足が弱くなりました父を大変な思いでお連れ下さり、父がどんなにか感謝を致し有難く思った気持ちをそのまま感じさせていただけまして只今は心安らかな思いでございます。又、帰途には高座の滝までお車でお迎え頂き、芦屋川からは拙宅までお送り下さいまして武田会長様には本当に有難うございました。御厚情重ねて厚く御礼申し上げます。

永年の間父と共に歩んで下さり温かく父を支えて下さいました甲南山岳会の皆様にも御礼の気持で一杯でございます。このすばらしい方々と御一緒に一日を香月共々過させて頂けました事を幸せに思っております。有難うございました。これからも甲南山岳会の御発展を心よりお祈り申し上げます。

時節柄どうぞ御身御自愛遊ばされまして益々の御活躍をお祈り申し上げます。

右御礼まで申し上げます。

草々

— 報　告 —

定　時　総　会

日　　時　　平成16年4月24日（土）

場　　所　　岡本公会堂

出 席 者

山本三郎	名誉会員	平井一正	名誉会員
神戸謙司	中高顧問		
國府雄次郎	旧12理	奥山正雄	旧12文
鷲尾　顕	旧15文	伊藤文三	旧15文
小川守正	旧17理	福井　實	旧17理
米山悦郎	新高29	乾卯兵衛	新高37
小原耕治	31経	宮本　侑	32経
柳沢　正	32経	鈴木頼正	33経
雨宮宏光	33経	美田靖夫	35経
伊丹忠弘	35経	鳥居威男	35経
牧野　宏	36経	廣瀬健三	36経
越田和男	36理	藤安賢一	37経
二谷和成	38経	飯田　進	38経
武田雄三	39経	安井　正	40経
伊丹徳行	40法	鵜木　洋	40文
奥山正紀	40法	井本　洋	40理
柏　敏明	41経	浪川純吉	42営
石原浩二	44理	南里章二	45理
井上知三	48文	大森雅宏	53文
要　浩晶	55営		

議　　事

1　武田会長より挨拶

2　15年度事業報告

- 「山　嶽　寮」
- 慰　霊　祭
- 木曽福島集会
- 大学新人募集
- 高校活動状況
- ホームページ

3　15年度会計報告　別記

4　16年度事業計画

- 慰　霊　祭
- 「山嶽寮」発行
- 木曽福島集会

会　計　報　告

会計　山本恵昭

故福田泰次氏ご遺族からの寄贈図書目録

越 田 和 男　(昭36理)

1. 甲南山岳部･山岳会・報告・部内雑誌･時報･山嶽寮

○ 合本製本分 12冊

1	甲南高校山岳部報告	I･II	
2	〃	III	(部内雑誌 I ・ II)
3	〃	IV	(部報 IV ・ IV-2 ・ IV-3)
4	〃	V･VI	(部報 V-1, 部内雑誌V-2･V-3･VI-1～2･VI-III)
5	〃	VII･VIII	(部内雑誌 VII-I･VII-II･VIII-I)
6	〃	IX･X	(部内雑誌 IX-1･X-1)
7	甲南山岳部･時報	I～IV	
8	〃	VI～VIII	
9	〃	IX～XI	
10	〃	XII･XIII	
11	甲南山岳会通信	1～30	
12	山嶽寮	31～43	

○ 時報･創立40周年記念号 2冊

○ 山嶽寮･未製本分

44～57全揃え(75周年記念号含む) 14冊　一部重複あるが略す

○ 部報類 バラ

旧制高校部報類

部報創刊号	(1927)	＊
部報第2号	(1929)	＊
部内雑誌 II	(1930)	
部報第4号No2	(1931)	
部報第4号No3	(1931)	＊
部報第5号	(1931)	
部内雑誌 Vol. 5-3	(1932)	
部内雑誌 Vol. 6-1/2	(1933)	
部内雑誌 Vol. 6-3	(1933)	＊
部内雑誌 Vol. VIII-1	(1937)	＊
部内雑誌 Vol. X-1	(1940)	

大学山岳部･時報

II	(1953)
III	(1956)
IV	(1957)
V	(1958)
IX	(1963)
XI	(1969)
XII	(1974)

＊ 印: 甲南学園同窓会に松本での展示用に送付 (6月8日)

2. 山のアルバム　6　冊

甲南山岳会会長武田雄三氏が保管中

1	昭和7～11年	(B4版縦)
2	昭和11～15年	(B4版縦)
3	Rock Climbingの思い出	(B5版横)
4	1940年の北千島	(B5版縦)
5	東北の山々 昭和15～17年	
6	総集編	

3. 「日本登山記録大成」 全２０巻 同朋社出版 (昭和58年)

雨宮山荘に保管中

なお、最終保管場所は検討中です

―― *行事報告* ――

秋の集会　木曽福島

平成15年10月12日（日）～13日（月）

木曽駒文化公園施設「駒王」にて開催された秋の集会。付近の散策を楽しんでのご参加、南木曽 柿其渓谷での沢登りを終えてのご参加、大勢の会員が集まりました。

参　加　者

米山悦朗　高29	小原耕治　31経	阿部純一　31経	砂川彰雄　32経	柳沢　正　32経
鈴木頼正　33経	田辺　潤　34経	伊丹忠弘　35経	鳥居威男　35経	越田和男　36理
大関和夫　37経	二谷和成　38経	武田雄三　39経	森本全彦　39法	塩崎将美　41経
石原浩二　44理	井上知三　48文	山本真博　48理	大森雅宏　53文	川野幸彦　56理

慰　霊　祭

平成１６年4月２５日

銘板取付　　故 横山　洋 氏　　故 香月慶太 氏　　故 福田泰次 氏

参　加　者

神戸謙司	中高顧問	鷲尾　顕	旧 15 文	伊藤文三	旧 15 文	福井　實	旧 17 理	伊藤五介	旧 26 文
柳沢　正	32 経	鈴木頼正	33 経	雨宮宏光	33 経	芦田匡平	35 理	牧野　宏	36 経
越田和男	36 理	二谷和成	38 経	飯田　進	38 経	村上与利一	39 営	武田雄三	39 経
森本全彦	39 法	伊丹徳行	40 法	鵜木　洋	40 文	奥山正紀	40 法	柏　敏明	41 経
塩崎将美	41 経	鈴木　功	41 法	浪川純吉	42 営	石原浩二	44 理	南里章二	45 理
山本真博	48 理	井上知三	48 文	大森雅宏	53 文	要　裕晶	55 営	豆田隆志	56 法

ご　遺　族

横山加壽子様　横山紀子様　香月祥太郎様　柴崎慶子様　福田仲子様　出原亮介様
福田敬三様　中村淳子様　中村　隆様　中村綾子様　本田依子様

甲南高校山岳部　現役４名

黒部五郎スキーツアー

山 本 恵 昭　（昭 56 理）

3連休（2003.5.3～5.5）、浪川さんと大森さんとの3人で、神岡～黒部五郎岳～三俣蓮華岳～双六～新穂高というロングスキーツアーに行って来ました。

連日好天に恵まれて、北アルプスど真ん中、360度の展望を楽しみました。天気が良いので雪洞も掘らず、ツエルト2泊も快適でした。黒部五郎のカールの滑降、弓折岳から小池新道の滑降、豪快・快適・最高でした。

ツェルトホテル

5 月 2 日

夜神戸発、東海北陸自動車道清見 IC、高山経由で神岡町へ。

5 月 3 日

飛越トンネルにはすでに車が20台ほど。7:00 発、スキーを担いで1時間歩き、そこから先はシール登行。寺地山は南斜面をショートカット、避難小屋横に 12:00。後はひたすら登り、最後は夏道を歩いて主稜線 15:40。北の俣岳山頂を少し越えた所で、ブロックを積み各自ツエルトを張る 16:00。風が強いが、大先輩方に気をつかうこともなく、個室も良いものです。

5 月 4 日

ツエルトめくり、朝日を浴びて出発準備、清々しい。6:10 発。クラストした赤木岳東斜面を斜滑降で一気に中俣乗越へ 6:30。スキーはこうでなっくちゃ！

クトーをつけて一山越え、黒部五郎への登りは夏道コースを行かず、左上して直接肩のピークへ 8:50。スキーと荷物をデポして黒部五郎岳山頂へ 9:30。黒部源流の向こうに雲の平、赤牛岳、水晶岳。左には薬師岳、右には三俣蓮華岳、奥には、槍の穂先、後ろを振り向けば笠が岳。最高の展望台。肩のピークへ戻り 10:10、いよいよカールの大滑降。初めは急斜面であるが雪も緩み難しくはない。広いカールの底はどこでもオーライ、黒部五郎の岩壁をバックに快適この上なし。黒部五郎小屋前でしばしくつろぐ 11:00～11:30。

カールを滑る浪川さん

三俣蓮華への登り、下部はひたすら広い斜面をジグザグ登行、上部は雪が少なく2661mピークを越えて一旦スキーを担ぐが、つぼ足だと時々腰まで踏み抜き、体力消耗が激しい。また、すぐにはいて三俣蓮華岳山頂へ 15:00。後は一気に双六へのはずだったのに・・・。

三俣蓮華直下の急斜面を滑り、高度を下げないように斜滑降。しかし、尾根を一本越えてからはハイマツ帯にさえぎられて思うようにコースが取れない。途中で夏道のように一旦登り返せばよかったのだが、ついつい下のトレースに誘われて行ってしまう。ぐるりと回りこんで出た所は、双六小屋より低く、谷を隔てた 2430m台地だった 16:10。先行パーティはさらに下部まで滑り小屋へ登り返している。サイボーグN氏も珍しく不調、雪も腐って登るのも大変なので、今日はここまでとする。木の陰を整地しツエルトを張る。風もなく結構快適。

5 月 5 日

5:30 発。昨日の腐れ雪が嘘のよう、クラストした斜面にクトーをきかせて無駄のないラインで双六小屋まで登る 6:00。双六谷を滑り、左斜面を斜滑降し 2622mピークの手前の谷を登る。私がクトーを落として双六谷本流まで回収に滑り降りるというおまけ付き。

弓折岳までの尾根筋は所々雪が切れて、スキーを履いたり脱いだりで疲れる。弓折岳 8:30 からは槍穂高が目前にくっきり、滝谷が黒い。弓折岳南斜面を豪快に滑り降り、下部でデブリを越える。林道の橋の手前で河原へ下りて休憩 10:00。雪を溶かした水と比べて、沢の水がうまい。同じ雪解け水なのにどうしてかな。林道横のブナ林の中を滑り、わさび平小屋へ 10:50。ハイカーの人でにぎわっている。後続パーティも続々とやってくる。林道は途中何度か雪が切れるが、穴毛谷出会いまで何とかスキーで降れた 11:50。新穂高バス停 12:30。

着替えもないので、温泉はあきらめてすぐにタクシーで飛越トンネルへ車回収 14:00。タクシー代￥17,000 は浪川さんのおごり！有難うございました。帰り道、割石温泉で垢を落とし、富山の回転すしで下山祝い。富山ICから北陸道でたいした渋滞もなく夜神戸着。

最近の山スキービンディング　３枚の爪は「クトー」（取り外し可能なスキー用のアイゼン）

— 掲示板書き込みダイジェスト —

山行とつどい　2003.4～2004.3

東京甲南山岳会花見会

福井　グリン　04/06（日）

”満開のお花見と山仲間の楽しい話”の会に、昨４月５日(土) 大関さんのお宅に集まり、美味しいお料理に、ビール、ワイン、お酒、筍ご飯＆思い出話など５時間以上も楽しく歓談しました。

生憎の雨風で、桜の下でとはまいりませんでしたが、大関さんの心のこもったアレンジには、毎度の事ながら、感謝します。

出席メンバーのファックスを貰いましたので、報告まで。

伊藤文三、福井實、茂木光隆の旧制3名、米山悦朗、平井吉夫、越田和男、大関和夫、飯田進、岡田英暉、森岡宏光ご夫妻、鷹巣和則、鷹巣久美子のご夫妻、日本山岳会の田村俊介、国見ゆみ子以上15名

越田和男

グリーンさん報告有難うございました。いい雰囲気で楽しかったですね。

まさに老弱男女相集いといった感じでしたが、最長老80代の文三さん、グリーンさんが心身ともにお若く溌剌としておられるご様子がなによりでした。

JAC の仲間、田村俊介さんと国見さんもすっかり溶け込んで楽しんでました。

それにしても、なんと15人分の料理の準備と、それに後かたづけまで、いつものことながら、大関に甘えさせてもらい、ただただ感謝、感謝。グリーンさんとは、また来週、山岳会の総会と慰霊祭でお目にかかれるのを楽しみにしてます。われわれ中年4人組は車で行き、平生記念館の宿泊設備に泊まるという安上がりの計画です。

宝剣いきました

西濱　04/08（火）

４月６日（日曜）宝剣岳へ行きました。メンバーは、私、米谷（佛大OB：ケニヤ・ネパール遠征仲間）、コウゾウ君（雪山初デビューのバイク仲間）

09:00 山頂ロープウェイ駅出発。右回りで縦走。稜線取り付きは向かって宝剣左隣の岩稜。ロープ2ピッチ。10:30 稜線到達。10mほどの懸垂一回。－12:00 山頂－14:00 ロープウェイ駅到着。

コンパクトで楽しい山でした。

２００３年チベット

雨宮宏光　05/12（月）

４月24日　関西空港発の成都行はガラガラで機内は全員マスク、ラサ到着後3日高所順応して出発、青蔵公路は、ゴルムドからラサまでの鉄道建設工事のためトラック多く、崑崙山口「峠」越えるまでまるで工事現場見学道路で高原風情なし。

途中、納木湖（4600m）を見に行く。五道梁から1時間ほど今回の目標ココシリ山脈を遠望。地元公安での情報では道は無く車が２台必要で1台で行くのは自殺行為といわれあきらめる。

以後青海湖・黄河源流付近・アムネ・マチンを計画したが、黄河源流記念碑は時間切れで見られず、アムネ・マチンも天気悪く見えない。

５月07日西寧迄ラサから約 4.300km 走行したがこの間快晴なく曇りか雪と最低でした。

ひさしぶりのホテルは健康診断がないと泊まれぬと言われ、病院でレントゲン検査ほか診断OKでやっとチェック・イン。テレビは “宣戦”SARS　主戦区　戦場“と恐ろしい画面多く、北京発の予約便も運航中止で、５月08日国内線

で北京着、即国際線カウンターに行けば、JAL成田行があり当日日本に帰国。

この機内往路9人復路15人とがらがらでした。チベット走行中道中で何回も消毒され、飛行機はほとんど飛ばずSARS騒ぎで今回チベットは、むちゃくちゃでした。

田邊　潤

いやいや本当にお疲れ様でした。
現在のところ SARS に勝てる奴は誰もおらんので用心する以外に手がないとおもいます。お疲れさまでした。また話を聞かせてください。

越田和男

雨宮、米山両兄

天候不順、工事現場の通行、肝心のココシリへのアプローチ不能、それに SARS 騒ぎのおまけつきで、難儀なハプニングの連続だったようですが、順風満帆の旅よりもきっと印象深く意義のある経験をされたことと拝察いたします。これもまた旅、懲りるどころか、ますますもっと行きたくなるでしょう。ともあれご無事の帰国なにより、いずれ話を聞かせて下さい。

祝ってもらいました

塩崎将美　05/19（月）

還暦を迎えた我々を多くの先輩後輩が祝ってくださいました。

食べきれないほどの皿鉢料理、美味い酒、気持ちの良い温泉、思い出を語り夜中まで盛り上がった宴会。2 日目の剣山登山、参加者全員が登頂。全員登頂は 3 回目を向えた還暦登山で始めて。心配した天気も我々を祝うがごとく 2 日とも晴れ、楽しい四国の 2 日間でした。皆さん有難うございました。

頂いた赤いベスト、胸に”甲南山岳会”の刺繍、大事にします。

kannroku

塩崎、鈴木、八島大兄等の還暦登山に同行させていただきありがとうございました。参加者14名全員四国剣山の頂上に立て良かった。何時まで参加できるやら？お世話していただいた36年入学の方々ありがとう。

村　上

横山君を偲ぶブラック行きにゴンチャンからワインの差し入れがあったのだけれども当日雨で私の手元に残ったまま、そのワインで横山君の学年の還暦を祝う記念登山が四国の剣山であり頂上で献杯。前日の吉野川での水遊びと併せて楽しい2日間であった。

三ツ下谷遡行　裏六甲・谷上

大森雅宏　06/08（日）

梅雨入りまでに一度どっかへ行きたいな、ということで、三ツ下谷へ出かけました。

バイクの山本・大森と三宮から北神急行（地下鉄の延伸線）経由の浪川さんとが谷上駅で合流、駅西側の裏山へ。谷筋に沿ったり離れたり、森林植物園方面に山田道をたどること20分ほどで、本流から左の沢へ。こっちが三ツ下谷。分岐の少し上流に昭和初期の石の道標がありました。

渓流靴などで足元をかため遡行開始。すぐに出てきた砂防ダムを越えて沢筋をたどります。さすがに大滝はありませんが10メートルあまりの滝を筆頭に、5メートル級の小滝はそこそこの数で、スケールはかわいらしいものの、ナメ・カマ・フチ・ゴルジュと一応の部品は整っています。ボルト残置の手ごわそうな滝は敬遠して、手頃にシャワークライムを楽しむこと2時間たらずで源頭に。

抜けた稜線は西六甲のかわうそ池近く。昼食ののち、裏に下る山本・大森と、表に下りる浪川さんに分かれて下山。下る途中「オオルリ」の巣を見つけたりして、自然に親しむハイキングも楽しみました。

今回の三ツ下谷はごみくずと堰堤の少ない沢で、スケールはプチでしたがナカナカいけます。ルートは会計山本がインターネットで探してきましたが、別に武田尾方面などにも手持ちの案があるようです。皆さん次回ご一緒いかがですか。

参加　：浪川　大森　山本恵
タイム　：谷上駅発10時ころ　沢の分岐10時20分ころ　終了点12過ぎ
お天気　：水が冷たくなく汗もかかない程度の「晴れ」でした

無事下山

kannroku　06/10 (火)

ガチャさんお世話になりました。鏡平は途中で頓挫。雪多くデブリの山で途中で夏道を見失しないわさび平にて泊。あくる日の9日秩父沢を詰め穂高から槍の稜線を見て下山しました。ピッケルとアイゼンは必要と悟った次第。体力的には槇海新道歩ける感触持ちました。まあ一無理せずに山歩き致します。パキの話楽しみにいたしております。気を付けて

久し振りの八方尾根

越田和男　06/12 (木)

恒例の奥飛騨集会(今年は14名参加)を楽しんだ後、入梅直前の快晴の一日、大関と八方尾根を散歩、八方池から少し登ったところで小一時間、快適な日向ぼっこをした。

残雪の杓子の東壁や不帰が以前よりずっと急峻で寄り付き難く見え、もうあんなとこへは二度と行けへんな、などと慰め合った。

意外なのは、八方からは小日向のコルから樺平までの尾根が短く見えたこと。昔ラッセルに苦しめられたのが嘘のよう。40数年ぶりの八方尾根でした。

宿提供の武田ゆーさん、料理まかないなど全てまかしといての大関兄に多謝。因みに釣り組の飯田、武田の釣果さっぱり。このあたり魚が居ないのだそうだ。

武庫川支流の西の谷

塩崎将美　07/01 (火)

6 月 29 日日曜日、延期した前日と打って変った晴天の中、武庫川支流の西の谷に行って来ました。参加メンバーは大津から森本カンロクさん、浪川、大森、山本、塩崎の 4 名。私の今シーズン初の沢登、シャワークライミングを堪能しました。何時もの事ながら計画立案から現地でのお世話まで大森/山本両君におんぶに抱っこ、有難う。写真は大森君が前に走り横の壁に登りと走り回りデジカメで写してくれました。

バルトロトレッキングに行きます

田邊　潤　07/08 (火)

胃の全摘手術から丸 6 年、ガンの転移もなく体力もまずまず回復したので、ポンコツの誘いに乗って昨年来計画してきたカラコルムトレッキングにいよいよこの 18 日に出発します。

バブからの報告によると、パキの今年は残雪が大変多いとか。中学、高校、大学を通じて連れて行ってもらった山行というのが、OB になって現役の合宿に参加する以外無かったので、今回のポンコツリードの山行は小生にとって初めての経験、非常に楽しみにしています。

効果があるのかどうか判りませんが、常圧低酸素室でトレーニングに励んでいます。この施設は名古屋に無く、毎回大阪まで通っております。

先日の掲示板で、山本恵が沢登りを誘っていて常連がアルバムにも写っていますが、これも大変羨ましく、オレも行きたいっ、と名乗りをあげるとこでしたが、バルトロ出発を前に自制しました。帰ってきたらまた報告します。沢登りも誘ってください。

槍でご対面

kannroku　07/22 (火)

7/18(金)明神東稜を目指したが、ひょうたん池で一夜過ごして雨の中退散。

一路竹中パーティ(竹中・井本・柏・水渡)の出会い求め槍ケ岳山荘へ。

7/20(日)槍沢ロッジを3:30に出て、肩の小屋に8:00着。槍の穂先に立った4名の老人達と出会いの握手。感激のあと、一路鏡平へ。今日は、浪川君にだまされだまされ、11時間30分歩きました。疲れた4日間の浪川、森本の二人の旅でした。

雨、雨、雨

柏　敏明　07/23 (水)

この連休、井本、竹中、水渡君ほか3名と、槍穂高縦走を目指しましたが、入山から下山まで、雨、雨、雨。中崎山荘から小池新道を経て、双六に一泊、西鎌尾根経由で槍の肩山荘に一泊。悪天候の為、穂高縦走をあきらめて、槍沢を下山し、明神で泊まりました。最後まで山の頂上を見ることが出来ませんでした。

小雨と霧の中、30数年ぶりに槍の頂上に立てたことと、肩の小屋でカンさんと浪川君に会えたことがせめての救いでした。我々の二日の行程を一日で飛ばしてしまう二人の凄さに改めて脱帽です。

連休ということで超満員のメザシ覚悟で行ったのですが、どの山荘もうまく個室を確保でき、ゆったり出来ました。びっくりしたのは、生ビールがどこにもあったことです。缶ビールと違って、本物の生ビール。うまかったです。

それにしても、こんな天気の悪い山行は初めてでした。

甲南漬の１日でした

越田和男　07/24（木）

前日に姫路で所用あり、帰りがけの駄賃と神戸に途中下車、やっぱり古巣はいいものです。急な話でもちゃんとビール付ランチの数刻を楽しませてもらいました。牧野、広瀬、村上、塩崎、大森の諸兄に感謝。

夕方、東京甲南会で池上理事長を囲む会に参加、竹中統一君に会い、連休の雨の槍ヶ岳行の話を聞きました。皆元気で何より。森本、浪川はまさにスーパー老人パワーですな。

そのあと伊藤五介先輩が銀座のライヴハウス（Rocky Top）に来ておられるというので、そちらにジョイン。最終ステージまで楽しんで深夜に帰宅。

全くこういうことでは小生も元気。山の方も頑張ります。8 月第一週は米山バブさんと雲取山に行きます。誰かご一緒しませんか。

雲取山

越田和男　08/05（火）

本日、東京都の最高峰 2016mの雲取山に敬意を表してきました。今回は米山バブさんと二人でした。

久し振りに標高差 1000mの往復はこたえました。小生汗だくでしたがバブさんは涼しい顔。おまけに下りにはドシャぶりの豪雨。下山後楽しみにしていた温泉は満員で断念。

前夜一泊した三条ノ湯の小屋は、すいていたせいもありますが、風情あり、なかなか良かったです。最近の百名山ブームで雲取山にやって来る人達はこのルートには来ないんだそうです。

芦屋川、お世話になりました。

柏　敏明　08/10（日）

台風一過、快晴の日曜日、芦屋川を楽しんできました。メンバーは森本御大をはじめ、武田先輩、塩崎、浪川、井上、大森の各君、山本父娘、それに関学の小西君、小生の計10名。10 時過ぎキャンプ場上部から川に入りました。

たかが芦屋川と侮っていましたが、なんのなんの、台風の影響で増水しており、流れに足を取られそうになったり、ザイルをだしてのクライムが何カ所もあったりで、こってりと絞られました。最後の大滝は登ることは出来ませんでしたが、冷たい水が気持ちよかったし、面白かったです。やみつきになりそうです。

皆さんご指導を有難うございました。それに山本君のお嬢さん、立派立派。小生より遙かに強かったです。22 日からの甲川遡行を心してかからねばと思います。塩崎君、色々とお世話になります。

それにしてもしんどかった。

kannroku

柏さんの呼びかけで、芦屋川に。小西さんとお会いするのも30数年ぶりでしょうか。少し肥満の割には、身軽く歩かれ、柏との差が歴然。

次回の甲川が楽しみ。何時も遊んでいただく塩さん、ドン吉さん、ありがとう。ひょいひょいと誘導してくれた井上君、年寄りを何かといたわってくれた大森君、山本君ありがとう。ドンとかまえて見守ってくれてる雄さん、あり

がとう。楽しいい1日でした。

家族で黒部赤木沢

山本恵昭　08/15（金）

家族で黒部川の源流に行ってきました。あいにく長女の体調不良で嫁さんと二人は薬師沢小屋まででしたが、長男（中3：受験勉強せんとこんな事しとって良いやろか？）と二女（小6）と私の3人で赤木沢を登ってきました。途中、タイドプールに取り残された岩魚を発見！3人で協力して手掴みでゲット、小さいのはお帰りいただいて、25cm 一匹は夕食の味噌焼きに。入下山ともに雨にたたられましたが、源流の岩からしみ出す最初の一滴を味わい、大自然の懐に抱かれた充実の夏休みでした。

12 日　折立～薬師峠。雨の中、入山。

13 日　薬師峠～薬師沢小屋～赤木沢～赤木岳～薬師峠。

天候不順の中、ワンチャンスの晴れ！ラッキー！黒部源流は水量多く、親としてはちょっとチビの渡渉には緊張しましたが、本人はいたって気楽に「チャプチャプおもしろい」と。赤木沢は明るい谷に階段状のナメ滝が源流まで連続し、最後まで飽きさせない、すばらしい谷でした。なかなか絶品です。機会があれば、一度、行かれることをお勧めします。沢では元気だった子供たちも稜線へ出てからはさすがに電池が切れたようで、6 時発 17 時着の 11 時間行動になってしまいました。

14 日　薬師峠～折立。

夜半から大雨で、薬師山頂は諦め、トボトボ下山。亀谷温泉でほっと一息、富山の回転寿司でご機嫌とって、無事に神戸着。

無事帰国しました

鈴木頼正　08/17（日）

8 月 15 日パキスタンから無事帰国しました。幸い Goro2,Concordia で天気がよく K2は勿論 BROAD GROUPの BROAD PEAK や CHOGOLINSA, GASHERBRUMがよく見えました。感激しました。BALTORO 氷河は比較的空いていました。写真が出来ましたら見てください。フイルターを落としたり、望遠レンズが故障したり残念でした。

帰ってきました

田邊　潤　08/19（火）

報告が遅くなりましたが、8 月 15 日無事バルトロトレッキングより帰ってきました。帰って来たのは表向きだけのことで、精神と肉体はボロボロのヨレヨレといったところです。現在の私の精神状態と肉体状態には、あの粗々しくも厳しい自然と山旅は限度を越えていたようです。

でも天候が良くて、バルトロのみならずカラコルムの景観を心往くまで楽しんで来ました。しかも、下りで高山病にかかってバルトロの下り 2/3 は馬（馬とロバの間くらいの大きさで、現地名はカラス、英語では Donkey と呼んでいた）で生還して来たしだいです。

カンロクや塩崎などのカラコルムへ行きたいとの意思をお持ちの方は、是非 65 才までにお行きになることをお勧めします。体力が衰えてからの、日本の山々のおよそ 3 倍ものスケールの大きな山々に旅するのは大変ですし、なんと言っても食事もしんどいですし、気力体力の残っている間の方が楽しいですよ。

アメさん、バブさんいろいろなご忠告ありがとうございました。行ってから、なるほどと感ずる実際的ご指導に感謝しております。

米山悦朗

鈴木・田辺・飯田大兄、無事というかたいした事故も無く帰国されご同慶の至りです。何が起こったか大体見当はつきますがさぞかし疲れたことでしょう。

小生は22日からアフガニスタンにご存知のトクナガさんのやっているNGOの活動状況の記録写真を写しに三週間行ってきます。それもこれも今年のヒンズーラジがついておらず不完全燃焼のカバーアップです。これで本年度の活動は終わり。

来年は又チベットのつもりです。

木曾で又会いましょう。

久しぶりの3000m

福田信三　08/18（月）

鈴木さん、お帰りなさい。随分収穫の多いトレッキングだったようですね。

小生は、規模は全く小さいですが、盆休みに久しぶりの立山に登り、剣や、後立山の山々を見ることも出来ました。

中高の山岳部の先生の追悼登山で、東西より約50名の参加で弥陀ヶ原のヒュッテは大入り満員でした。阿部純一先輩も参加されました。年齢は5歳から71歳までで、観光、散策、登山など、それぞれにあった選択肢がありました。

大山　甲川（きのえがわ）

塩崎将美　08/29（金）

今年の甲川は水量多く苦労しましたが、若手の皆さんに引っ張ってもらい登ることが出来ました。面白かったです。上の廊下が心残りです。何時か機会を見付け行きたいものです。

小西啓右　（関学ＯＢ）

日本百名谷のひとつで、一級クラスの沢だと云うことで、私には予想以上のむつかしい谷でした。

引き揚げて貰ったり、押し上げて貰ったりで、バテバテになりながらも、なんとかやれたというところです。皆さんのチームワークも良く、ザイル捌きもお見事でした。

塩崎さんの立派なログハウスも最高でした。また、宜しくお願い致します。

山本恵昭

甲川は、白い火山岩のせいか思っていたより明るく、苔の緑が美しい良い谷でした。大きな淵が多いのも、夏向きですね。今度は上の廊下を覗きに、行ってみたいです。

塩崎様、昨年冬に続いて快適な別荘生活、豪華なバーベキュー、有難うございました。関学小西様、ダッチオーブン料理は初めてでした。ボリュームあるチキン、ご馳走様でした。

大森雅宏

台風で延期になっていた大山甲川遡行、今度はお天気に恵まれて実施、前夜22日塩崎山荘に集まりました。23日は晴れ。車に分乗して1台は遡行終了点に、ほかの2台で入渓点へ。

この谷は岩壁を食んで流れ落ちる滝と渓谷ではなく、狭い谷筋に連続する巨岩で構成されているという感じ。そんなわけで概念図に「滝5m」とあれば「ぺったん岩壁 5m」ではなく、流れに磨かれた「つるつるごろんの5m」をショルダーやらフリクションやらで乗りきったり、ゴルジュに廊下、流れの中を泳ぎきってハング気味の取っ付きにへばりつくちょっと勝手の違った沢登りになりました。

また流れの速さと水の冷たさは格別で、ウェットスーツとライフジャケットには大変お世話になりました。先行パーティの時間まちがあったりして上の廊下は次の楽しみにとり置くことにしました。

果敢に泳いで攀じられた関学小西さんは昔からの仲間のよう、昨年の経験から指示やアドバイスをくださった塩崎さん、泳ぎのトップは誰にも譲らなかった浪川さん、久しぶりでも相変わらずバランスの良い井上さん、ルートにアブミをセットして確保その他に忙しかった山本君、一番ライフジャケットに感謝しているカナヅチ大森と体調が悪くて途中から引き返された柏さんがご参加のメンバー。

日程の関係で参加されなかったカンさんと川野君には申し訳無いのですが、みんなわくわくニコニコと楽しい半日でした。夕方からは鵜木さんも交えて、夜のふけるのも忘れて残りの半日楽しく過ごせました。

引原川　万ヶ谷　沢登り

大森雅宏　09/15（月）

昨日の日曜、会計山本君と鳥取県境近くの引原川に沢登りに出かけました。氷ノ山の往復に取付のすぐそばを通っていました。いつか行ってみたいなというのが、急に決まって。

万ヶ谷、傾斜は割に急で苔と水量のそこそこ多い沢でした。私は比良の貫井谷に似ているかな、山本君は六甲の箕谷の沢を深く大きくしたような、とそれぞれの印象でした。開始から車デポ帰着まで 3 時間、カラッとしたお天気の中、山登りって結構いい趣味やんと言う感じでした。

米山氏アフガンから帰国

越田和男　　09/21（日）

「アフガンから帰ってきましたが久しぶりの集団生活で且つ毎日ナンとたまねぎのスライスと豆の煮たので暮らしいささか疲れました。地方での巡回医療に随行してレポートような写真をとっていました。米山悦朗」

慰霊登山をしてきました

塩﨑将美　　09/29（月）

2 月に亡くなった同期横山の奥さんと娘さんを案内して立山に行ってきました。鵜木/森本両先輩と私の 5 人で紅葉の綺麗な雷鳥平に泊まり、新室堂乗越を登り、今では廃道になっている室堂乗越に皆んなでケルンを積み、散骨しました。奥さんからは彼は生前、山へ行きたいと何時も言っていたと聞いていました。奥さんと娘さんに連れられ剣/立山が綺麗に見える大日の稜線に来て彼も喜んでいる事と思います。

山に散骨すると言う行為に批判的な方も多いと思いますが勘弁してください。お悔やみに行った時、お母さんに”あの子には山しか無かった、何処かの山に散骨してもらえないか”と頼まれた宿題をやっと果たせて私はホットしています。

ケルンの写真をアルバムにUPしました。

鈴木頼正

甲南山岳会の生きた日報、この掲示板を見るのが楽しみです。鵜木さん、森本さん、横山君のご家族との慰霊登山、錦秋の雷鳥沢、剣岳ご苦労さんです。きっと横山君も喜んでくれてると思います。この温かい気持ちがうれしいです。有難う御座いました。

kannroku

皆さんあの鵜木が杖をつきました。横山君の散骨の後、剣山荘から剣岳を登り早月尾根を降りましたが、その道中で拾ったLEKIのステッキをついに使いました。

初老の縦走

kannroku　　10/01（水）

9/19　晴　　京都 23 時の高速バスで独り出発。

9/20　曇り　栂池～白馬乗鞍～小蓮華山～白馬岳～白馬山荘

栂池ゴンドラ乗り場で荷物を秤に懸けられ 15Kg。250 円也。

9/21　雨　白馬山荘～雪倉岳～朝日山荘

非常に綺麗な縦走路・高山植物が咲いていた。雪倉避難小屋（無人）非常に綺麗で便所もあるが水場無し。

9/22　強風　朝日山荘～朝日岳～長栂山～黒岩山～サワガニ山～犬ケ岳～栂海山荘

朝日から黒岩山まで非常に綺麗。ここも花が咲いていたら最高では。黒岩山から小滝へ降るルートあり。途中水を 3.5L 調達したが、一辺に荷物重くなり白鳥山荘までの行程が、栂海山荘となる。小屋に着いた時捻挫した人が居たが、ヘリで搬送され、1 人だけとなる。怖かった。

9/23　晴　栂海山荘～白鳥山～親不知

栂海山荘・白鳥小屋共無人で水場無し。白鳥小屋は綺麗。この間しんどいだ

け。

9/24 雨 親不知-魚津-宇奈月-欅平～阿曽原
宇奈月で寝袋・自炊器具を家に送り、荷物を軽くする。

9/25 雨 阿曽原～仙人池～二股～真砂沢ロッジ
昔使った二股のテント場、草ぼうぼう。

9/26 晴 真砂沢ロッジ～別山～立山～一の越～雷鳥沢ロッジ
懐かしい縦走路。横山君御家族，鵜木、塩崎と合流

9/27 晴 ロッジ～新室堂乗越～旧室堂乗越～奥大日～別山乗越～剣山荘
いい所にケルンが積めて横山君も喜んでいるのでは。剣岳がバッチリ。何回も行ってみたい。伊丹君差し入れの鱒寿司おいしかった。有難う。横山君御家族、塩崎君と別れ、鵜木君と二人で剣山荘へ。

9/28 晴 山荘～剣岳～早月尾根～馬場島～福永氏慰霊碑～帰阪
しんどかった。 早月尾根 2300mに立派な山小屋が出来ている。馬場島の様変わりはすごい。慰霊碑の大きな岩も公園にとけ込んで、違和感がしなかった。甲南・大阪工大・魚津高校の3校の慰霊碑が埋め込まれている。馬場島にはバスは廃線になっており、上市までタクシー。6950円也。

この秋の涸沢紅葉

井上 徹 10/02 (木)

森本、鵜木先輩及び塩崎君ご苦労様でした。横山君もキット満足でしょう。その時期2泊3日の強行スケジュールで、恒例の涸沢に紅葉撮影に出かけました。仕事の都合で（当方、まだ現役の仕事師です）少し早めのこの時期になりました。

紅葉度は70点のできでした。今回の山行では、体力（脚力）の衰えに愕然としました。河童橋から涸沢ヒュッテまでナント10時間！はいずりながら、ヒュッテにたどり着きました。写真など撮る気力は横尾からワンピッチで喪失しました。カメラの重さに泣きながら三脚とストックの両支えで、カールに入ってからは、10歩歩いて5分休み、10歩歩いて10分休みの状態でした。それに付けても、森本先輩の手記には驚きました。どうなってんですか？

お礼：柿其と木曾駒集会

田邊 潤 10/14 (火)

柿其

どうせ濡れるんやから雨が降ってもおんなじことや、とえらそうなことを言いましたが、幸いたいした雨にもならず楽しいシャワークライミングでした。今回は、少し自分から積極的に前に出て皆さんにあまり気を使わせないようにしよう(案外逆かも知れませんが)、としたおかげで大変楽しいものでした。圧巻は滝の裏側くぐりでした。前夜の寄せ鍋といい、お世話になり有難うございました。

木曾駒

駒王も定着しましたね。雰囲気が明るいだけでも乗鞍よりズット良いです。若い方々の活動的なお世話に感謝です。考えてみれば新制の山岳会も上から下まで50年の開きが出るようになりました。今回の最若年参加者は川野君 45 才でしたから、丁度真ん中あたりの年代になりますね。すると川野君あたりが中心になって下の年代層をまとめてくだされば、50 年がつながることになります。ともあれ皆さんにお世話になり有難うございました。雪のシーズンも近くなりました、またお目にかかりましょう。

川野幸彦

皆さん色々とありがとうございました。非常に楽しかったです。来年も参加の予定です。これで天気が良ければ・・・・・。

同期の山本少年ちゃんへ

ウエットスーツ・渓流足袋・ありがとうございました。助かりました。これ程のものとは思っていませんでした。快適でした。

ブータン

越田和男 10/30 (木)

昨日ブータンから帰ってきました。一行は結局

平井仙吉、JAC の友人国見ゆみ子さんに越田夫婦の４名でした。

念願のブータン行は山も川も町も人も、ゾンと呼ばれる役所兼僧院そして民家の伝統的たたずまいも期待通りで楽しめました。再訪したいところです。

トレッキングは体力不足、トレイニング不足が重なり、標高4000m前後での Up & Down ではバテバテでした。天気がよかったので何とか完歩出来ましたが、悪天下では一寸やばかったのではと反省してます。

現地エイジェントとの会話ではブータン国内の登山の解禁はまだまだとの印象を受けました。

田邊　潤

ブータンからの絵葉書、昨 8 日(土)に受け取りました。有難う。

アップダウンの多い 4000m 前後のトレッキングでバテたとのことですが、まさしく小生もバルトロでそのような状態でした。コッシンの絵葉書を読んで、バルトロ氷河舌端部のアップダウンを鮮やかに想いだしました。もっとも小生はその部分は登り下りともに騾馬の背中に乗ってでしたが。下りはともかく、小生の場合は登りでバテて普段のトレーニング不足を露呈してしまいました。

再度有難う。

キノコ&かにツアー

kannroku　　11/16（日）

山本恵昭さん色々とお世話になりました。キノコがこんなところにあるのかと知りました。雨の中のキノコ採りでしたが、童心に返り楽しかったです。また来年お伴さしてください。ありがとう。

山本恵昭

キノコカニ鍋キャンプは、森本さん、武田さん、塩崎さん、大森さん、私の5人の参加でした。

大森さんと私は、前夜発で早朝より奥の森に入り、先客の足跡残る中、ヤブを漕ぎ漕ぎ、採りこぼしのナメコ、ムキタケをタッパー1箱分確保。10時過ぎに登山口で他の皆さんと合流し、登山道を山頂避難小屋まで。みんなで道沿いの倒木の周りをうろうろし、下りは、雨の中、山頂から直接森を突ききってやはりナメコ、ムキタケを2箱分ゲット、1時頃登山口へ戻る。一昨年、昨年のように雪にたたられることも無く、少し出遅れているキノコシーズンのため、ナメコが運良く大漁でした。

カニ祭りに間に合うかと港に急いだのですが、すでに終わった後でした。それではと温泉で暖まり、のんびりキノコ鍋と焼きガニの準備。武田さん、塩崎さんがお持ち下さったランタンのおかげで、明るい場所でご馳走を食べながら楽しく歓談。たっぷり天然ナメコの入った鍋は絶品。川野や浪川さんも飛び入り参加、ただし携帯電話で音声のみ、ご馳走は無し。

翌朝の競市はかなりの豊漁だったそうで、塩崎さんが特大のカニを安く手に入れてくださいました。それを発泡スチロールの箱に詰め、御土産のナメコを分けて、解散。私は3匹分けてもらって、1匹は実家に、2匹は我が家ですみずみいただきました。

ナメコ大漁、明るい調理場、カニ豊漁。良い事づくしのキャンプでした。次は、そろそろ山スキーの季節に入りますね。

塩崎将美

キノコを自分で見付けたときは思わず"あった"と大声で叫ぶ感激。それを食べる時にまた感激。美味かったです。今回は大漁で家に持って帰り家族に自慢、ナメコとムキタケを味噌汁で楽しみました。

浜坂漁協の競りで買った蟹は一杯2,000円と 2,500 円でした。今年は大漁続きで少し安いようです。

大森君、山本君大変お世話になりました。来年もよろしく頼みます。夜の宴会と蟹の買出しだけでもお値打ちです。来年はもっと参加者増えればよいと思っています。

塩崎アヤコ

とっても美味しいキノコ＆蟹ご馳走様でした。今年は、お刺身、焼きガニ、お鍋、雑炊で食べました。このツアーから帰ってくる父を毎年心待ちにしています。

来年もよろしくお願いしますね（^OO^）v

ロックガーデン

越田和男　11/24（月）

先週金曜日、小生の都合に合わせて付き合ってくれた方々に先ずは厚く御礼申し上げます。

武田雄サン、塩崎両君には地獄谷の滝登りで引っぱり上げてもらったり、荒地山の下りの岩梯子では足場の指導よろしきを得て何とか無事通過。とっぷり日が暮れての下山となりました。

地震による地形の変化、植林による視界の悪化などで、かなり勘が狂いました。地獄谷、A 懸、B 懸跡、風吹岩あたりまでは何とか昔の記憶で辿れましたが、キャッスルからブラックに至るあたりではブッシュに視界を遮られ、谷筋を完全に間違えました。

それにしても風吹岩でいただいたドングリ持参のボジョレ・ヌーボーの味は格別でした。

これからもたまには付き合ってください。

BERG HEIL！

廣瀬健三

久し振りに地獄谷からの、A懸―B懸―風吹き岩―荒地山のルートを辿ったが、帰途、よもやの夜間下山と成りにけり。

”闇迫る 芦屋の山の 眺め良し。”

（何時も乍ら，季語見当たらず）

参加したオールド ボーイズは；鈴木のオトミサン、芦田アツシン、越田コツシン、牧野ドングリ、武田のユウサン、 塩崎、廣瀬

牧野　宏

稍老齢隊を武田会長、塩崎さんに引率してもらい多謝。ワインの開栓法（押して引く）、靴紐の結び方（今ごろなんや！と言われそうですが） レクチャーありがとうございました。再見再見。

マナスルトレッキング

福田信三　11/24（月）

昨日、カトマンヅから戻りました。

アラガットバザールからバスではばね破損、軍の検問、倒木などで 11 時間も掛かり、更に飛行機も大幅遅れでクタクタでした。

トレッキングはマナスルベースキャンプまでの往復で13日間歩き続けの、かなりハードなものでした。天候にも恵まれ、マナスル、P29，ガネッシュなどを眼前に見ることが出来ました。

生涯に一度はヒマラヤを云う夢を実現することが出来ました。

一行は17名のトレッカーとポーターシェルパなど、全員で約60名の大所帯です。行程は、約50年前の日本隊と同じルートです。他の、ヒマラヤトレッキングルートとは異なり、地味なコースとの事です。一行の殆どは世界中のトレッキングをやってきた猛者ばかりで、30年ぶりのテント生活となった小生なんかは、圧倒されっぱなしでした。しかし、こんなに山にのめり込める方の話を聞くのも楽しいものでした。もうひとつ驚いた事は、最高年齢74歳、平均65歳、女性一人64歳、彼らがまたすごいタフなんです。

次回は、ポカラからの比較的楽なルートを行ってみようと考えています。

落ち着き次第、写真掲載依頼します。

追記：カトマンヅで購入した、Trekking in Nepal by Toru Nakano ルートの詳細が地図、写真入りで非常に丁寧に記載してあります。ご興味のある方はお知らせください。

月例集会アンド忘年会

武田雄三　12/06（土）

本日小原、鈴木、雨宮、武田、伊丹(弟)、安井塩崎、浪川、石原、大森、檀 計 11 名参加

何時もの通り、ワイワイ・ガヤガヤ時の経つのを忘れての懇親でした。

東京甲南山岳会

越田和男　12/13（土）

本日の忘年会、本物のネパール料理で大いに

楽しみました。

参加者予定と若干変わりまして下記12名でした。

福田泰次　伊藤文三　福井實　　茂木光隆
国府三郎　伊藤五介　砂川彰夫　米山悦郎
平井吉夫　越田和男　大関和夫　水渡清夫

なんと80歳台5名、最年少水渡も還暦過ぎの老人クラブでしたが皆さんお元気でした。

大関幹事の予定したアルコール量を軽くオーバーして会費の追加徴収となりました。

伊藤五介

大関幹事お疲れさんでした。なかなか美味しかったです。若手？の諸君　あれからまた飲みに行くような気配やったがバブ兄、夜のまじめな集会は大丈夫やったんかいな。

初冬の箱根

越田和男　　12/16（火）

晴天の昨日、米山バブさんと箱根の山をのんびりと歩いてきました。

足柄峠に車を置き、新幹線から良く見える箱根連山の北端の矢倉岳（870m）を午前中に往復、午後にももう一つ、という感じで金時山（1213m）の連チャンでした。

関東の山に登って富士山が見えないと何か損したような気になるのですが、昨日は終日富士が間近に望め、頂上ではバブさん例によってシャッター切るのに結構忙しく、当方はワイン片手に座り込んで動かず、それぞれの山を楽しみました。

甲斐の山

越田和男　　12/29（月）

今年の最終週末、JACの仲間の恒例の一泊二日の忘年山行に参加して来ました。平井吉夫も一緒でした。

好天に恵まれ、富士、南ア、八つ、遠くに穂高までの遠望を楽しみました。関西の方にはなじみの薄い山だと思いますが、名前と高さだけでも紹介しておきます。1日目大鹿山（1236m）、2日目達沢山（1358m）納豆箱山（1413m）京戸山（1413m）いづれも甲府盆地の東側です。

膝まで潜る落葉のラッセル、迷いに迷ったあげくにヘッドランプで長い林道歩きのオマケつきで今年の山歩きを締めくくりました。では皆さん良いお年を。

比べれば若手の忘年会

大森雅宏　　12/31（水）

今年の30日の忘年会も無事終了しました。
川野君の書き込みみたいに「無事でなかった」のは何年か前までで、近頃は紳士です。

さて、ご参加は美田さん・武田さん・塩崎さん・浪川さん・山本君と電話参加の川野君。平均年齢は幾分高い目ですが、まあほとんど当会の現役プレーヤー、今日は特にお口も元気でにぎやかでした。

時節柄ハナシはスキーに。明日から出かける浪川さんの事や1月の妙高、2月の栂池、ガチャさんの話など、「聞くよりしゃべる」の元気が耳に残っています。楽しく時間を忘れました。川野君、遠くて長い電話、経費もかかってアイすみません。新年も笑顔でよろしく。

川野幸彦

昨夜、12/30　会に途中参加（19:00頃携帯電話）させて頂きました。宴会で美田さん・塩崎さん・浪川さんは超ご機嫌でした。皆さん相変わらず活発です。浪川さんは31日から4日まで、森本さん・山本さんと戸狩へスキ

一合宿。塩崎さんは1月の成人式連休に妙高。滑降禁止区域の新雪を滑るらしいです。24日からは栂池(雪見会)。武田さんも2月に妙高？と全て私にも「来い！」とのこと。今のところ用事がないので全て行こうと思っています。 来年もよろしくお願い申し上げます

妙高スキーハイキング

大森雅宏　01/13 (火)

土・日・月と妙高高原の集まりに楽しく(一部苦しく)参加しました。

雨宮さんがおいでにならなかったのは残念ですが、ご参加の森本さん・塩崎さん・浪川さん・山本真さん・山本恵君・川野君と川野 Jr 君にお礼申し上げます。

さて、1日目の三田原山、夕方遅くまでの行動でお疲れ様でした。まさかヘッドランプで行動するとは思っていなかったのですが、皆さんお持ちですねーヘッドラン。日が暮れたらぱぱぱとザックから出てきました。私、LED(発光ダイオード)式のをはじめて使いましたが、結構明るくて便利でした。単四3本で30時間も持つのが魅力です。

(2日目はさておき、)

3日目は初日よりぐっと良いお天気で、前山から滝沢尾根、割に早く下りてきましたが、上部は急傾斜で登りも下りも「修行」の時間、これだけだったら「山スキーはもう来ない」となるのですが、中ほどのブナ林の新雪緩斜面は楽しく滑って、「また来てもいいかな」となりました。

川野君も書いていますが、先輩諸氏はお元気です。私がその年齢になったらとても同じようには動けないと思います。オミゴト。

1 日目、長い行動になりましたが、GPSなどの近代兵器があったら、現在位置が的確に把握できてぐっと心強いですね。

改めて宿のセットと山行リーダーの両山本氏に感謝とお礼。

塩崎将美

バテバテと大反省。

大森君/山本恵君大変お世話になりました。迎えに来てくれ送ってもらいハンドル握る事無く楽チンでした。此処までは普通の有難う。

三田原山の登り下りは前から後ろから面倒を見てもらい本当に有難う。

誘われ気楽に参加した山スキー、私にとっては大変厳しく大反省でした。まずスキーを付けたり外したり/流れ止めを付けたり外したり/踵を上げたり固定したりの屈んだ作業が大変苦しいものでした。リフトを降りてシールを付けて登り出して直ぐに此れはえらいことだと感じました。何でシールを付けたスキーがズルと後戻り、精神的に大ショック。その上練習不足の足、直ぐにだるくなり最後は足が攣りそうになりとても頂上まではと御免なさい。大森君が付き合ってくれ雪を掘り風除けを造りツェルトを被せてもらいまるでビバーク。頂上まで登ったメンバーが降りてきてシールを外しいよいよ下り。

何処を滑るの、どちらを向いても大きな木とブッシュ、腰が引けてしまい最初の斜滑降で転倒、それからは滑っているのか雪の中でもがいているのか時には立ち上がるのに5分以上ももがき苦しみ、時には誰かに引っ張ってもらわないと起き上がれずバテバテ。

再び登り、シールを付けての声に取り出すとシールが 1 個ありません。リュックの外の網のポケットに入れたはずが途中の大転倒かブッシュに引っかかった時かに無くした様です。大森君が自分のシールを外し貸してもらいました。彼はアイゼンバンドをスキーに捲きつけ歩きます。一つ間違えると取り返しの付かない大失敗/大反省。

登りも下りも山本君にはリュックを持ってもらいました。ほとんど重さを感じないリュック、それでも担ぐのと何も無いのは登りも下りも大違い、特に転んだ後の起き上がりが違います。

皆の足を引っ張り最後はヘッドランプのお世話になりました。

苦しいスキーでしたが此れを書きながら思

い出すとあの雪との格闘も楽しい思い出、足を鍛え再び挑戦したいと思ってます。此れに懲りず又連れて行ってください。

kannroku

シールを付けてのスキーハイク。登りはどうにか、シールを取ってのスキーはボテボテの連続。若い山本恵、大森、浪川君等に助けられどうにか帰り着いたと言えましょう。2 人の老人塩崎、森本再挑戦致しますのでこりずに誘ってください。川野 JR、山本恵、川野、大森、山本真、浪川、塩崎若手 OB の方々本当にお世話になりました。ありがとうございました。

山本恵昭

10日の三田原山ツアー、2年前に登っているし、どこを降りても林道に行き着くし「大したことないわ」と思っていたのが間違いでした。まだまだ未熟な自分が良くわかりました。山登りは奥深いですね。でもさすが、森本さん塩崎さんはじめ、皆さん昔山でブイブイ言わしていたメンバーだけあって、ヘッドランプスキーにも関わらず、どんな時でも冷静沈着安全第一に行動していただき、助かりました。

11日山本真さんに無理を言って、植木校長のスキーハイクに入れていただき、久しぶりにスキー講習を受けました。日ごろ何気なく滑っていることも理論立てて説明してもらうと良くわかりました。山本真さん、有難うございました。ラストにゴンドラ一本、川野と川野ジュニアと一緒に滑ったのも楽しかったです。

12日快晴の中、妙高前山。登りのラッセルはしんどかったものの、ブナ林の新雪滑降は快適そのもの。樹冠についた雪が本当に美しかったです。森本さん、浪川さん、大森さんも、前々日よりワンランク腕が上がった感じ。余裕で滑っておられました。時々、滑りながら、バキバキと小枝を整理されておられましたので、次回、このコースは多少ブッシュが少なくなっているかも？

楽しい連休を過ごさせていただき有難うございました。

久しぶりの「ロッククライミング」

平井吉夫　01/14（水）

1月 11 日、前日の同窓会出席のついでに、ロックはコッシン、ポン、カシワ。高座の滝から地獄谷を登り、Aケンにほぼ 50 年ぶりに手足で触れ、昔と変わらない白い風化岩地帯を昔とちがっておそるおそる歩き、Bケンの残骸を感無量にながめ、万物相を経て風吹岩、下って金鳥山、ホクラ神社の上でイーチャンの出迎えを受け、小ジャレた通りになった岡本に出ました。昔は駆け抜けていたところを、ザイルこそ使わなかったけれど、岩登り気分で楽しみました。付き合ってくださった皆さんに感謝。

廣瀬健三

諸兄夫々の言動が目に浮かび、楽しく拝見しました。昨年、竹中統一兄に大阪の本屋の前でバッタリ出あったとき、八甲田山？のスキー登山の素晴らしさに触れていました事を、フト思い出しました。

確か何年振りかに、シールを付けた喜びをかみ締めている様でした。小生から""KACにも山本恵昭君と言う凄い滑り手がいるので、是非 ご一緒されては""と申して置きました。一度お誘いしてはどうですか。

田邊ガチャ学校のガキの頃からの岳友、平井仙吉、越田コッシン、との山歩きは、実に楽しかった。

藤安イーチャンが芦屋からの同道で、牧野ドングリがおれば、なお結構でしたが。その代わり、若手？のカシワの参加あり、おかげで同期が揃って写真に収まることができました。多謝！！

雪見会

飯田　進　01/19（月）

雪見会　参加者　今のところ　下記の如くなってお

ります。
23日 泊 雨宮 森本 武田 浪川 山本
24日 泊 雨宮 森本 武田 浪川 山本
米山 大関 川野 川野 飯田 田邊
25日 泊 雨宮 森本 武田 浪川 山本 米山
大関 飯田 田邊
以上 間違っていたら 訂正 掲載してください。

川野幸彦
雪見会では色々とお世話になりありがとうございました。楽しかったです。ただもう少しいい天気であれば！と思いました。今朝慌てて帰ったのですが出張は明日の朝でも間に合いました。午前中だけでも滑れば良かったと少し後悔しています。それにしてもゲレンデは空いていますね。バブルの頃の混雑は「過去の出来事」です。

田邊 潤
飯田兄大変お世話になりました。
皆々様にも久しぶりに会え楽しい雪見会でした。お礼もうしあげます。ただ、帰る日になって良い天気になり癪でした。9時50分に前田館をでて、家で着替えをして洗車して 14 時には会社へ出ております。またの機会を楽しみにしております。

冬のアイスランド

越田和男 01/31（土）

憧憬の地アイスランドを垣間見てきました。いつもの山見遊山の延長です。

緯度からいえばカムチャッカの付け根より上に相当しますが、メキシコ暖流のせいで冬の札幌位の寒さです。面積は北海道と四国を足した位で、人口わずか28．5万人。火山国、従って温泉多数、氷河の発達アルプスより大、最高峰は2100m級といったところ。

日照時間短かったですが、氷結したスケールの大きな滝や岬の断崖、地球の割れ目と呼ばれる地溝帯、間欠泉などの見物、それに巨大な露天風呂など堪能。夜は夜でオーロラが出たといってはあわてて防寒着を着てホテルから飛び出したりと、結構忙しく滞在5泊ではちょっと物足りない感じでした。

今年は無理ですが、いずれ夏季に再訪して島の一周と中央高地の探索などやりたいと考えてます。同行有志募ります。

びわ湖バレイへ二日間スキー

柏 敏明 02/23（月）

小生も皆さんに連れて行って貰おうと、10数年ぶりに関学OBの小西君とびわ湖バレイへ二日間スキーに行って来ました。しかも、自前のスキーとブーツで。

天候は精進悪く霧と吹雪でした。ヨーロッパアルプス仕込みの小西君の様にはいきませんでしたが、久し振りにスキーのまねごとを楽しんできました。

只、タバコをやめた反動か、とみに腹が出てきて、中腰でスキーをセットする時の苦しいこと。1m足らずの山スキー（ロシニョールのフリートレック）にスノーブーツをセットするため、つける紐、バックル類が多く深刻な課題ですが、シールの効きは抜群で、稜線歩きが楽しみです。
妙高山ツアーに及ぶべくもありませんが、せめて塩崎君の後を追って行ける位の近場のツアーに連れて行って下さい。
（塩崎君、失礼に思わないで下さい）

飯田 進
柏君、せめて塩崎なんて。塩崎や浪川の後を追っていったらどうなるか。
賀茶さんの後くっついて行く方が楽ですよ。小生とやりましょう。ほどよい仲間探していますから。

田邊 潤
柏 敏明さん
賀茶の後をついて、なんて失礼なことを飯田が言いやがって。というのは実は本当のことです。小生このところノンエナジースキーイングをもっぱら心がけています。自分のペー

スで休まず滑るのです。それだけキチンとスキーに少しでも乗れるようになって来たのかな?

塩崎君のあとを追っていけるだけの・・・の貴君のメールに一言書きたかったのですが、貴君が本当にそれだけの体力をもっていたら大変失礼だ、と思ったもんでだまっていたのです。塩崎君はたまたま妙高では不調だったんですよ。一緒に滑っていたらそれは判ります。浪川に負けじ、というのが滲み出てますから。

小生がなんとか追い付いてやろうと目指しているバブは、われわれと一緒には滑ろうとはせず難しい所へばかり行ってしまうし、いざ滑りだしたらアメさんははるかに小生より早いし、省エネスキーをしているのは、ポンコツと小生とカンロクくらいか。だから、貴君のスキーの腕前は小生は知りませんが、ポンコツの言う通りポンコツや小生と滑っているのが丁度適当やないですか。体力に応じてゆっくりとノンエナジースキーイングを楽しもうよ。

それでも先日、浪川の挑発に乗って富士見を皆より余計に一本滑ったら、それはそれはこたえました。でも楽しかった。

山荘に集合・無料です

雨宮　宏光　　02/24 (火)

雨宮山荘　集合！

各位。　3月5日-7日　伊那の山荘にきてください。

現在参加　雨宮　塩崎ですが諸兄の参加大歓迎です。スキー　登山　山スキー　酒と温泉だけ，各自の勝手。5日深夜着もok. 参加者決まり次第配車連絡します。寝具6人分ありで　不足の時　シラフ持参連絡します。自炊　外食は相談。雨宮はスキーです。好天なら南アばっちり見えます。

氷ノ山横行渓谷山スキーコース

山本恵昭　　02/29 (日)

氷ノ山で山スキーと言えば、戸倉や若桜氷ノ山スキー場からのコースがポピュラーです。でも、せっかく山頂からの広い斜面も、ちょっとすべるとまた登り返しだったり、単調だったりと、物足りない感がありました。いつも、山頂からさらに下に続く気持ちよさそうなブナ林の斜面を横目に見て、尾根上をシール登行していました。

今回、その斜面を滑り降りるコース設定がとれるかどうか、横行渓谷を下から登ってみました。標高530mの橋のあたりに車を止め、林道をシール登行開始 10:30。瀞川氷ノ山林道の合流点に休憩所があり昼食 13:00～13:30。ここから林道を離れ、谷沿いに右岸を登る。少し行くと20mほどの三滝が現れ、右岸から越える。その上は急斜面のトラバース。雪が不安定だと雪崩れそう。亀裂が入っているが、雪は安定しているので割目の間を慎重に進む。すぐに5mほどの滝、これも右岸から越え、右から支流が入ってくるあたりで左岸へわたる。左からの支流を見送り、右岸の台地を進むと、二俣となり右手の斜面の傾斜の登りやすそうな所を選んでひたすら登る。このあたり、ブッシュもなく、ブナの巨木に囲まれて、とても良い感じ。1400m付近まで登って時間切れ 14:45、一息入れて、滑降開始 15:00. 雪は少し重いが、ブナの疎林を緩急取り混ぜて面白い。滝の付近は慎重に、林道合流点15:30。長い林道をひた滑り、車に 16:30。標高差1000mをシール張直しせずに滑れる変化に富んだコースでした。

是非もう一度、朝早く出発し、山頂から一気に滑り降りたいと思います。

雪の荒島岳

kannroku　　02/29 (日)

2/28(土)無風快晴　福井大野荒島岳へ

ドン吉君に誘われ荒島岳へ。絶好の登山日和で沢山の人出を予想したが、男子3、女子2名の方々それもみな単独登攀の方達。我等を入れて6パーティーが頂上を踏んだことになる。

勝原のスキー場よりリフト利用。登山口よりシールを付けて登山開始。尾根通しで迷う心配なし。シャクナゲ平手前よりトラバース。もちが壁手前にてスキーデポ。アイゼンを付けての登行となる。昼

過ぎ頂上。4時間のアルバイト。遠く御岳・乗鞍・穂高が見える。白山は目の前。絶景かな！途中一緒になった勝山の加藤さんにあれが経ヶ岳・能郷白山、と説明して貰い、あーあー行ってみたいなーと思った次第。帰りは転ぶのをがまんしてのスキー滑降。つぼ足で登るよりしんどい下りであった。

8:20 スキー場(340m)～リフト終点よりシール付けて(600m)～シャクナゲ平下トラバース(1200m)～もちが壁下スキーデポ・アイゼン(1200m)～12:20 頂上(1523m)～下山スキーデポよりスキー使用～14:30 勝原スキー場

アルバムの写真は途中お会いした勝山の加藤さんに撮っていただいたものです。加藤様ありがとう御座いました。加藤様の HP(cracli)に綺麗な山の写真あります。

感謝・・・　　加藤

私は福井県勝山市に住む加藤と申します･･･(*^^*)

今日･･･どん吉様と kannroku 様に助けられ福井県にある荒島に登ることが出来ました。急な斜面で怖くて動きがとれなくなってしまい歩きやすく足元を固めて頂き本当に助かりました。先々週チャレンジしたのですが春一番の嵐があり途中で断念･･今日は山日和で再チャレンジだったのですが予想を超えた山の状態でした。無事山頂について名前をお聞きしたなら『どん吉』と『kanroku』と言う名前だと･･･(^^;) 甲南山岳部の話もお聞きして家に帰り早速 HP を見させてもらいました･･驚熟練の方々のパワフルな登山活動には私のような初心者は目をぎらりんことなってしまいました。

(○o○;) (夜でなくてよかった･･興奮して寝る事ができなくなります)

雪山の登り方や下山の方法など細々とした事を教えていただき本当に有難うございました･･感謝の気持ちでいっぱいです。

大雪でした。

山本恵昭　　03/09 (火)

金曜日、せっかく休みを取ったのに昼間じっと家にいるのももったいないので、先日大森さんといった横行渓谷に再度行ってきました。今度は氷ノ山頂上までたどり着きましたが、ラッセルで登り5時間かかってしまいました。前回快適だった下りは、午後から晴れて雪が重く期待はずれ。

金曜の晩に一仕事終え、急遽、土日は家族でスキーに。土曜日は氷ノ山国際スキー場で、3月とは思えない膝上の新雪を楽しみました。神鍋に一泊し、日曜日はハチ北に行こうとしたのですが、ゲレンデ駐車場に行く途中で渋滞。上から降りてくる車に聞くと、チェーンを付けている車でも滑って動かないとのこと。諦めて、新しくできた村岡トンネルで奥神鍋スキー場に。あまりの大雪で、早い目に切り上げて帰ってきました。神戸にかえってきて、公園が真っ白なのにまたびっくり。3月とは思えない大雪でした。

御岳スキー場

田邊　潤　　03/09 (火)

3/8 月曜日は工場休日だったので御岳スキー場へ会社の同僚夫婦と行ってきました。土日と連続で会社へ休日出勤したので神のお恵みか快晴無風で気温低く雪質良く、スキーヤー・ボーダーともに数少なく滅多にない春のゲレンデを快適に存分に滑りました。

バブには少し物足りないかなという傾斜ですが、小生のようなオジンにはまさに適度に快適なゲレンデでした。上から下までの距離も妙高杉の原には劣るにしても、南信州近辺では富士見と肩をならべるくらいのものがあり、何故今まで御岳ロープウエーにばかり行っていたのかと悔やまれました。

スキー愛好の諸兄!来年は御岳スキー場へも行ってみようぜ!

金山パウダースキー、雨飾山断念

山本恵昭　　03/23 (火)

奥深い金山から秀峰雨飾山へ。なかなか魅力的な計画だったのですが、雨飾山は断念しました。頭のイメージと実際の行動力にギャップが･･。こ

れって中高年登山のトラブルの第一原因かも。

3月20日曇。

小谷温泉から、重荷にあえぎながら南南西尾根を登り、天狗原山と金山のコルで雪洞泊。この尾根の1741m岩峰から1949m峰の下まで、小さな尾根と谷が入り乱れてとても複雑な地形になり、面白い。この辺に降った雨は、いったいどういうふうに流れるのだろうか。

21日快晴。

広い平らな金山の山頂からは、一昨年の三田原山～火打山、昨年の昼闇山～焼山のコースがはっきり見える。山頂から西に伸びる茂倉尾根の上部はパウダーで、雨飾山を正面に望みながら、極楽スキーでした。下のほうはクラストバーンとモナカ雪で苦労。1700m付近で雨飾山を断念し、斜面を選んで大倉沢へ下降、車に戻る。栃の木亭の温泉で汗を流し、糸魚川までご馳走の買出しに行って、車中宴会。

22日曇のち雪。

天気は下り坂ですが、雨飾山に行けるところまで行ってみることに。昨日下った大海川を登り、P2大斜面下の小さな谷をつめる。ブナ林の緩いところを選んで左に回りこみ、1520m付近から尾根に出る。1620mの台地から無木立の急斜面をアイゼンで登るとP2に到着し、スキーをデポ。この先はナイフリッジとなり西面の急斜面を慎重にトラバース。しばらく進むが、雪も降り出し、山頂岩壁が目前に望めるところで断念。P2から、スキー滑降開始。クラストした上にうっすら新雪が積もりなかなかの雪質。大雪の中、順調に栃の木亭下の車に到着。今度は少し車で降りて、由緒有る山田旅館の温泉につかる。なかなか趣の有る温泉でした。

三度目になる3月の妙高頚城山域ですが、だだっ広い山頂有り、鋭い岩峰有り、谷と尾根がくねくね、何とも不思議なところに魅力を感じます。

中高春山合宿

神戸謙司　03/30(火)

中高山岳部顧問の神戸です。ご無沙汰をしております。中高の春山合宿のめどが立ちましたので、お知らせします。

時期:2004年4月3日～5日

場所:北八ヶ岳、縞枯山、茶臼山

参加者:(高2)山内、神澤、北川、(高1)村上、長宅、(付き添い)神戸

初日は、ピラタスロープウェイに乗って、縞枯山荘に宿泊予定です。

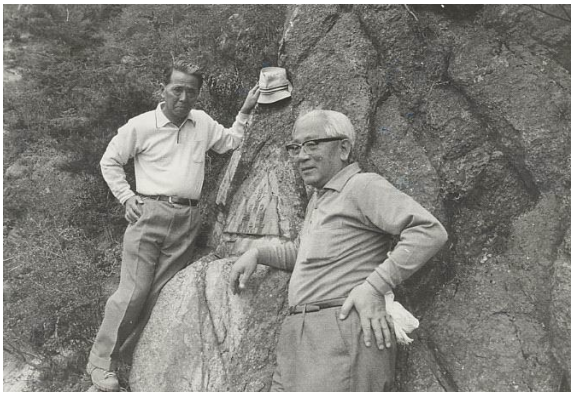
原稿をお寄せ下さい

皆様からのご寄稿をお待ちしています。最近の山旅、学生時代のこと、行事に参加してなどジャンルを問いません。原稿は 縦書き 横書き 手書き ワープロ いずれでも結構です。ワープロ（パソコン）使用の方は、ファイルでお送りくださると編集がはかどります。フロッピーディスクのほかEメールもご利用ください。

宛　先　山嶽寮編集担当　　大森雅宏

電話/ファクシミリ　　Eメール

― フクデンさんの訃報に寄せて ―



レリーフの前で　フクデンさんと香月さん

訃報　―　フクデンさん逝く

武田　雄三　01/29（木）

本日鷲尾さんより、去る1月26日（月）福田泰次氏が肺炎の為亡くなられた旨、ご連絡を戴きました。此処に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。尚、近親者のみにてお見送りをすまされておられ、後日「偲ぶ会」を開かれる御予定と伺って居ります。山岳会宛ご案内があれば、改めて掲示致します。

フクデンさん

伊藤　五介　01/30（金）

亡くなられる時うわ言で「ノンキ、ノンキ」と言われてたそうで文三だけ密葬に参加。急逝のためやつれてなく眠っておられるようなお顔だったそうです。ネパール料理の際にお会いできて本当によかったと思います

ご冥福をお祈りします

福田泰次先輩のご逝去を悼む

廣瀬健三　01/30（金）

フクデンさんの突然の訃報に接し、驚いています。ご冥福を、心よりお祈り申し上げます。

フクデンさん

越田和男　01/31（土）

昨年暮れの東京甲南山岳会では最長老として楽しげにネパール料理に付き合っていただきました。お足元が若干弱られたご様子で行き帰りには奥様が付き添われていましたが、まだまだお元気でした。

小生山岳部新人の春、遭難事故の後始末の会議の席でお会いしたのが最初でしたが、その時失礼にもてっきり刑事さんかと思ってしまったギョロメの精悍なご風貌が印象的でした。

その後現役時代の数年間、フクデンさんは30台後半、三菱重工の働き盛りの部長クラスだったのではないかと思いますが、5月の合宿などにも参加され、親しくご指導いただきました。もう40数年も前の話ですが鮮明に思い出せます。

ご冥福をお祈り申し上げます。

ご冥福をお祈りします

柏　敏明　01/31（土）

フクデンさんの訃報に接し、昨年暮れの東京甲南山岳会に出席されていたということで、アルバムのページを開きました。

お元気そうな様子が写っておられ、数ヶ月で亡くなられるとは、とても思えないお姿です。乗鞍集会でも現役の山の登り方を興味津々に聞かれ、本当に楽しそうに山の話を何時までもされていたのが思い出されます。

フクデンさんと山をご一緒させて頂いたことはありませんが、山嶽寮の編集では、いろいろとご指導をいただき、会員の方々に原稿執筆を依頼していただくなど、陰に日向にバックアップをしていただきました。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

福田さん銘板

石原　浩二　　02/01（日）

福田先輩の訃報に接しロックガーデンに銘板を付けた頃を思い出します。福田、鷲尾両先輩の熱意、村上先輩のサポートが無ければ銘板設置は出来ませんでした。村上さんとの下見、福田　鷲尾さんとの現地確認設置場所の決定、福田さより送られた木製型板でのアンカーセット、現役と一緒に行った台座設置を経て今です。あの場所への銘板設置の是非については諸意見はあるでしょうが、鎮魂、仲間が集まると言う事では良かったのではないでしょうか。心から冥福をお祈り申し上げます。

福田泰次氏を送る会

越田和男　　03/27（土）

昨日（3 月 26 日）、先々月亡くなった大先輩フクデンさん（享年 83 歳）を送る会がご遺族の主催で、高輪プリンスホテルの貴賓館で催されました。三菱関係のお歴々はもとより、学友、岳友の方々も多数出席せれ、会場に飾られた山のアルバムの写真を拝見するなど、なごやかに故人を偲びました。

甲南山岳会を代表して、同期の伊藤文三さんがスピーチされました。仕事にも山にも常に未知を求め続けたフクデンさんの思い出を述べられ、最後に「まだ直ぐには行きたくないけれど、あの世ではまた一緒にやろう」と格調高く締めくくられました。

甲南関係の方のご出席は多く、山岳部OBは次の方々だったと思います。ぬけてるかもしれませんが山口雅也、伊藤文三、鷲尾顕、福井實、国府三郎、伊藤五介、砂川彰雄、越田和男、平井吉夫、大関和夫、飯田進。

なお、来月の山岳会の慰霊祭にご遺族ご出席とのこと、また、出席されていた故田口二郎さんの二女石田エリカさんも是非ロックガーデンにご一緒したいとのことでした。

― 残しておきたい書き込みあれこれ ―

アヒル先輩

伊藤　五介　　10/09（木）

本日同窓会から「甲窓」到着。付録の（と言うよりこっちがﾒｲﾝちゃうか）　平生さん物語に感激。兄貴が飯沼さん達と謹慎になりｵﾌｸﾛが慌てふためいた話をガキの頃よく聞かされたのを思いだします。

ガマさんはほんまたいした人やったと思います。

別冊太陽　「日本の探検家たち」

越田　和男　　11/29（土）

入手が遅れたが、結構面白く仕上がってますので紹介しておきます。別冊太陽というのはなかなか本

屋の棚で見つけ難いですが。

間宮林蔵から植村直己にいたる39名のパイオニア達が、写真たっぷりに簡潔に紹介されており、知らなかったことも多く、楽しめました。いろんな人が分担執筆しているのが良かったのかも知れません。編集は大森久雄氏。

ところで、こんなところにも甲南山岳部の先輩のお名前が出てくるんですね。薬師義美さんの執筆になる概説「ヒマラヤの探検史」のなかに、田口一郎さんの1931年の「シンガリラ尾根からのパルート行」が載ってました。（田口さんが甲南を出た年、東大一年生のときの単独行で、カンチェンジュンガの偵察が目的だったとか。このときの印度シムラからの便りが甲南の部報にも載ってます）

別冊太陽 「日本の探検家たち」
2003 年 10 月　平凡社発行
定価：本体2600円

JAC、日本山岳会、に記されている書評

廣瀬　健三　　12/22（月）

先日入手した、JAC のジャーナル”山岳”に KAC75周年記念号の書評が載っておりますので、興味を引いた言葉／フレーズを下記します。

――――――――――――――――――――――――――――――――

この記念号は、日本の山岳史に関心を持つ物にとって興味深い話題を数多く提供している。其の意味で学生山岳部の部報としても重要な1冊と言えよう。

既に取上げられているが、私のような学生山岳部と関係の無い部外者が見ても数多くのエピソードを興味深く読み、それぞれについて心をゆさぶられ、考えさせられた。

伊藤収二が書いている”甲南山岳部の愛唱歌”は、戦前の学生山岳部と学生風俗に興味を持つものにとって貴重な文献。

甲南には兄弟部員が多かった、先ず田口一郎、二郎、三郎、六郎 そして伊藤新一、収二、文三、五介、その4兄第と、名クライマー、伊藤 愿、とは親戚関係で無いことを本紙で初めて知った。
京大でも偉才だった、伊藤愿だが、私にとっては飽くまでも、愿 は”甲南の愿”である。
東大に進学した田口さんを”甲南の田口さん”と呼ぶのも同じ感覚からである。十数年まえに成るが、山岳会の入り口か、日本テレビの前かで、田口さんと平井吉夫さんがならんで出て来られ、田口さんから”甲南の後輩だ”と紹介された。”甲南の田口 、 甲南の平井”が強く刷り込まれた瞬間だ.
平井吉夫さんが書いた―旧制. 新制の間に―が興味深い。クリスチアン. フッパーと甲南山岳部は事実関係を追及し好論文である。

最後に越田和男さんが、編集後記に一親 子 孫 三世代にわたる山の仲間が 山嶽寮の炉辺に集い、連綿と続けらてきた共通の話題たる 山登り、山歩き、山暮らし、辺境の旅に思いを馳せて、75 周年の喜びを分かち合う と言う雰囲気が醸し出されれば―と書いているが、その狙いは成功している。

（関塚 貞亨）

― 現役だより ―

大学山岳部部員紹介　　（２００４年８月）

大学山岳部に新しいメンバーがそろいました。来年の活動報告をお楽しみに。

主 将	出川啓二	経済学部3年	ﾏﾈｰｼﾞｬｰ	小磯瑠里子	文学部4年
主 務	増田卓也	理工学部2年	渉 外	森本寛之	理工学部2年
ﾌﾟﾗﾝﾅｰ	谷　勇輝	理工学部1年			
	飯島岳史	文学部4年		林　　寛	経済学部1年
	林　昌樹	経済学部1年		山林直史	経済学部1年
	平松悠司	経済学部1年			

２００３年度　甲南高校山岳部　年間活動報告

山岳部部員・顧問

主将：山内寛之（高２）　主務：神澤太一（高２）
記録：北川祐也（高２）　食料：長宅智之（高１）
装備：村上恭央（高１）
顧問：南里章二　　顧問：神戸謙司

山行報告

六甲の仁川渓谷～五ヶ池　６月７日　晴れ
山内・神澤・北川・長宅・村上・神戸
9:33 西宮北口　11:05 五が池　12:30 昼食　14:30 阪急仁川解散
高１の新入生、村上と長宅の歓迎として、仁川渓谷から、甲山五カ池を歩く。

夏合宿　上高地～槍ヶ岳　８月１日～５日
山内・神澤・北川・長宅・村上・神戸
８月１日
19:30JR 大阪駅集合　20:25JR 難波駅到着　21:30 夜行バスで、上高地に向けて出発
８月２日　上高地…明神…徳沢…横尾…ババ平
天候：晴れ
5:45 上高地到着　6:47 上高地出発　7:25 明神到着　7:39 明神出発　8:23 徳沢到着　8:50 徳沢出発　9:37 横尾到着　10:20 横尾出発　12:46 ババ平キャンプ場　15:10 夕食準備　17:15 夕食終了　20:30 消灯
８月３日　ババ平…殺生平…槍ヶ岳…ババ平
天候：晴れ
5:00 起床・朝食　5:40 朝食終了　6:27 ババ平出発　7:00 雪渓の上で休憩　9:30 殺生平　10:55 槍ヶ岳山荘　11:17 槍ヶ岳頂上到着　12:07 槍ヶ岳山荘　12:50 槍ヶ岳山荘出発　18:00 何度も休憩をして、ババ平到着、夕食準備　20:00 夕食終了　21:00 消灯
８月４日　ババ平…横尾…徳沢…明神…小梨平
天候：晴れ
7:00 起床　9:40 出発　横尾山荘・徳沢園・明神と何度も休憩をして、16:40 小梨平到着　20:25 夕食終了　21:00 消灯
８月５日　小梨平…上高地～沢渡～松本～大阪
天候：晴れ
6:20 起床・朝食　8:40 出発　10:40 上高地発～沢渡行きバス　12:50 松本着　16:20 松本駅構内再集合　16:36 松本発～大阪行特急　20:00 大阪着・解散

六甲の清水谷～六甲山　１１月９日　晴れ
山内・神澤・北川・長宅・村上・神戸
8：30 西宮北口駅　9：50 船坂谷　10：28 川上の滝　12：51 六甲縦貫車道　13：07 一軒茶屋　15：30 阪

急芦屋川

今回は、何回か行ったことのある六甲山でも、初めてのルートだった。

強化合宿　六甲の本庄橋～六甲山

１月１２日　晴れ

山内・神澤・長宅・村上・神戸

21：15 芦屋川　21：35 おたふく山登山口　22：10 本庄橋テント設営　02：00 消灯　06：15 起床朝食 07：40 テント撤収

耐寒訓練としては、風もなく暖かく良かった。ヘッドランプ行動のよい練習でもあった。

春合宿北八ヶ岳　縞枯山～白駒池～渋の湯

４月３日～５日　天候:小雪のち晴れ

主将・装備　山内　主務・食料　神澤

装備・食料　北川　記録・食料　長宅

記録・装備　村上　付き添い教員　神戸謙司

４月３日（土）　縞枯山荘まで　曇りのち雪

8:00 阪急３番街バスターミナル集合　14:30 茅野駅前着　15:30 ピラタス・スキー場着　15:47 ロープウェイ山頂駅着　16:15 ロープウェイ山頂駅出発　16:30 縞枯山荘着　17:40 夕食（さばの味噌煮・切干大根・キャベツのマヨネーズ和え・味噌汁・ご飯）　21:00 消灯・就寝

４月４日（日）縞枯山荘より白駒池キャンプ場　天候（雪）

6：30 起床・朝食（ハムエッグ・味噌汁・ご飯）　8：30 出発　8：50 ピラタス山頂駅手前、五辻への分岐点（ショートスキーをつける）　11：35 大石峠着　13：30 白駒池キャンプ場着　14：00 青苔荘昼飯　16：00 テント設営完了　18：50 夕食終了　20：30 消灯・就寝

４月５日（月）下山日　天候（快晴）

5：30 起床　6：45 朝食終わり　7：00 撤収開始　9：00 撤収完了・出発　10：17 丸山・高見岩との分岐点　10：25 高見岩小屋着　11：10 出発　13：55 渋の湯到着　14：55 茅野行きバス出発　15：50 茅野駅前着　21：20 阪急３番街バスターミナル着　21：30 解散

春山合宿の印象　（学年は４月以後のもの）

「八ヶ岳　春山合宿」　　高３　山内寛之

２日目、風は無かったが雪が少し降っていた。雨具、ニット帽、手袋、サングラス、スパッツを身に付け、スキー板を履いて完全装備で出発した。最初はかなり転んだりしたが、徐々にコツを掴んでいった。下りは楽だが上りは予想以上に疲れた。何とかキャンプ地に着いた時にはもうフラフラだった。テントを建ててやっと休めると思ったがそうはいかなかった。いつもは８人用テントに６人などと余裕をもたせていたが、今回は６人用テントに６人と定員ギリギリだったので、上手く整理しないと楽に座ることもできない程だった。

結局最後まで上手く整理できた状態にはならなかったが、とりあえず各自自分の寝場所を作ることはできた。狭い場所は苦手だ･･･。

しかし夜は両側しっかりと人に挟まれた状態で寝たのであまり冷えることはなかった。

「春山合宿」　　高２　村上　恭央

〇スキー板のかかとをはずしてなかったので、かなり歩きにくく苦労した。

〇僕と神澤さんがこけまくって、先頭集団との差がかなりひらいてしまった。申し訳ない。

〇こけたら中島くんが助けてくれた。どうもありがとう。

〇スキーのすべりかたを出本さんが教えてくれた。どうもありがとう。それでちょっとはすべれるようになりました。

〇テントの中はかなり寒かった。はしっこで寝た僕はまったく眠れなかった。

〇3 日目はかかとをはずして移動したので楽チンだった。しかしスキーをはずしてからは岩場が続いている場所があって、そこは雪が深く積もっていたので足をとられた。「うわぁ～！！」やら「ひえ～！！」やら情けない声を出していた。

「4月4日　(2日目)」　　高3　北川　裕也

今回、ザックを背負いながらスキーを滑ったのは、生まれて初めての経験でした。

最初のチョット下りで何も考えずに滑ったら、止まり方の感覚を忘れていて、勢い良くコケました。ザック+スキーで数時間歩いていると、いつもとは違う疲労感が出てきた。

上り坂は勿論、平坦な道でさえ歩くのがしんどく、少しでも下りになっている所は滑れるので楽でした。

何度か「もう着いたな」と思ったトコがあったけど、全てハズレで、天気も悪く精神的にも疲れました。しかし、普段では見ることはない風景をみることができたので、良かった。多分このザック+スキーは最初で最後の経験だと思います。

「春合宿感想」　　高2　　長宅智行

2日目。あいにくの雪。視界も悪かった。晴れることを祈ったが、夜に寝るまでやむことはなかった。時間をかけて移動して、なんとかキャンプ地に到着。雪降りしきる中、テントをはった。この時、手袋がびしょ濡れで使い物にならなくなっていた。テントの中がすし詰め状態の中、晩飯を食べて、阪神巨人戦をラジオで聞いた。阪神のワンサイドだったので、テンションが上がった。

3日目。前日とは打って変わって快晴だった。高見石からの眺めも、雲海が出ていて、最高だった。僕はもう体力が切れかけていたが、その絶景を見て、少し疲れがとれた。渋の湯に着いて風呂に浸かったときは、至福のひと時だった。

この合宿は、忘れ物が多く、水筒と軍手を忘れてしまった。さらに、パッキングが下手だったのか、肩がすぐにしんどくなった。

今年度から僕が新部長になったが、まだまだ未熟なところや、わからないことがあるので、気を引き締めていきたい。

「北八ヶ岳合宿」　高3　神澤　太一

4月4日　6:20、起床、朝食。朝起きて食事を用意しなくても良い、というのは本当にありがたい。

スキーが上手く滑れず、結局転倒を繰り返していた。その内、何故かスキーが滑らなくなるトラブルに見舞われ、滑る体勢をとると、スキー自体がブレーキになり転倒。雪中でのテント泊は水を採るのも一苦労であった。小屋の便利さを痛感。

4月5日　高見岩出発後、しばらく行ってからスキーを外したのだが、この御蔭で、昨日のトラブルの理由を発見。どうもシールがちゃんと貼れていなかったようで、その凹凸が原因だったようであった。転倒もこれが影響と是非考えたい。

初めての雪山でのテント泊であった為、不慣れなことが多かった。小屋に関しては、飯の後は炬燵でゆっくり、なんていう事はこれ迄には当然無く、時間と手間を金で買うようなものか、と思った。寒さからか、目覚める事無く寝れた夜、というのは無かった。前述の雪のこともあり、冬山というのは恐ろしいものである。

(「春山合宿の印象」はホームページ記事から部分を掲載しました　編集)

編集後記

いきなり私事（ワタクシゴト）です。

今年の４月に神戸から大阪へ転勤しました。ほかの皆さんのような転居を伴う異動や単身赴任に比べたらどうと言うことはありません。楽なものです。とは言ってもいくつか変化が生まれます。通勤時間が３倍近くになりました。これが山嶽寮の編集に影響しました。

編集を引き継いでからの２年間、時期になると朝夕１時間職場の早出居残りで結構集中してこなしていたのですが、通勤時間の関係などからそうも行かなくなって、家での「宿題」になりました。そんなんどっちでやっても同じやんか、というご意見も聞こえてきます。が。

夏休みの「宿題」、家でやっつけるか図書館にでかけるか。私は図書館派でした。子供のころからの習性で、家ではペースが上がりません。おまけに今年は暑い夏でした。避暑がてら沢登りのお誘いもいくつか。誘ってもらえる時はちゃんとお付き合いをしておかなくては。第一楽しいし。台風で中止になったのもありましたが、そんなこんなで土曜日曜の作業が止まりました。

と、くどくど書いたのは、ハイ言い訳です。

予定では、写真ももっと入れて丁寧に仕上げたかったのですが、１０月はじめの仕上がり日から逆算して見切り発車になりました。あしからずご了解ください。来年は大学山岳部の活動報告もきっとたくさん出てくるでしょうからその積りでタイムテーブルもきちんと管理したいと思います。

原稿宛先　山嶽寮編集担当　　大森雅宏
電話／ファクシミリ　　Ｅメール

山　嶽　寮　第59号
発行　2004年（平成16年）10月
編集人　山本真博　　印刷　カツヤマ印刷